

建築と社会

Architecture and Society



特集 東海支部

2026 03
vol.107 No.1248
日本建築協会

「建築と社会」アーカイブの検索機能が使いやすくなりました！

(検索方法は以下の手順になります)

1. 協会トップページから「ログインボタン」を押下します



2. 会員ID、パスワードを入力しログインします

(ご自身のID、PWが分からない場合は事務局までお問い合わせください)



3. 会員ページ中ほどの「検索ボックス」に検索キーワードを入力し、発行の「新しい順」か「古い順」を選択し検索ボタンを押下します



4. 検索結果一覧の中から、閲覧したい記事の「表示ボタン」を押下します



5. 検索結果が表示されます(スクロールして閲覧できます)



◆便利機能

「CTL+F」キーを同時に押下し、検索ワードを入れると当該ワードがハンティングし表示されます



◆検索結果がうまく表示されない場合
ページナンバーカラムへ検索ページ番号を直接入力し結果を表示することができます





建築と社会

Architecture and Society
Journal of the Architectural Association of Japan

日本建築協会

2026 03

Vol.107 No.1248

- 特集予告
- 4月号/未定
- 5月号/再び、イカス!

gallery

ひと・まち・建築

13

469

構造
の頁

80

666

法令
コーナー

81

82

ご意見ご要望は
こちらから



86

2025年度 年間特集テーマ「未来」

特集 東海支部

19

エスパシオ ナゴヤキャッスル	20
IGアリーナ	24
津市モーターボート競走場競技棟等	26
DAITEC SAKAE SoftLab	28
犬山市立橋五子子ども未来園	30
折兼豊橋営業所	32
パックススタイル稲沢センター	33
愛知県立岡崎特別支援学校	34
知多信用金庫図書館前支店	35
公益社団法人愛知県看護協会新会館	36
愛知製鋼白扇寮	40
KOSAI Battery Park 新居第3工場	42
川口組テクノセンター	44
CREDO滋賀竜王	46
■TOKAI Sketch Book	48

■特集Ⅰ 青年委員会

納まり切らない建築と社会への想い●久保久志	50
have not been, INDEX	
～日本建築協会東海支部65周年記念事業	
～建築と社会の再接続に向けて～	
●日本建築協会東海支部青年委員会+おどり場	51

■特集Ⅱ インタビュー

建築の新しいミカタ～東海地域の若手がみる「これから」～	59
-----------------------------	----

■特集Ⅲ 建築がつなぐ都市、地域、まちの記憶 (第9回)

名古屋市・「コトづくり研究所」●中井孝幸	67
常を彩る仕組みから考える商店街再生	
～コトづくり研究所という実践～●植村康平	68
みんなで、たのしいコト、あたらしいコト、おいしいコト、	
したいコト、をつくる「コトづくり研究所」●橋本雅好	72
まちをつなげる多機能融合型の居場所づくり	
～「コトづくり研究所」～●中井孝幸	74

■東海の建築：居心地

project	神姫バス姫路本社ビル	2
	大阪信用金庫本店	6
gallery	空間を語るサイン●藤井北斗 (hokkyok)	13
会告	U35 EXHIBITION	表4
	第11回学生のための現場見学会「新・琵琶湖文化館(博物館)現場見学会」(第1回/全2回)	14
	第9回片岡安賞 一次審査通過者によるオンライン 公開プレゼンテーション 視聴者募集のお知らせ	15
	出版委員会主催 第9回 建築セミナー	16
	若き創造者たちへ「第73回青年技術者顕彰」のご案内	17

構造の頁	まちを元気にする病院	
	～医療法人社団恵祐会神埼病院～●平松大知	80

法令コーナー	循環型建築を目指す構造部材リユースの取り組み	
	●岸 浩行、寺井千絵	81

先達に聞く	吉村篤一氏●笠原一人、三宅拓也	82
-------	-----------------	----

Member's Forum	U-35委員会企画 talk baton 28 活動報告	86
----------------	------------------------------	----

お知らせとお願い	協会誌『建築と社会』掲載文における「著作権」についてのお知らせとお願い	89
----------	-------------------------------------	----

information	チュルリョーニス展 内なる星図/西洋絵画400年の旅- 珠玉の東京富士美術館コレクション/ブルックリン博物館所蔵 特別展 古代エジプト/生誕185年 ルノワール展	90
-------------	---	----

月間の動き	2026年1月	92
-------	---------	----

表紙写真提供：植村康平建築設計事務所 撮影：ToLoLo studio

神姫バス姫路本社ビル

建築主 神姫バス
設計 KAJIMA DESIGN
監理 二神建築設計事務所
施工 鹿島建設

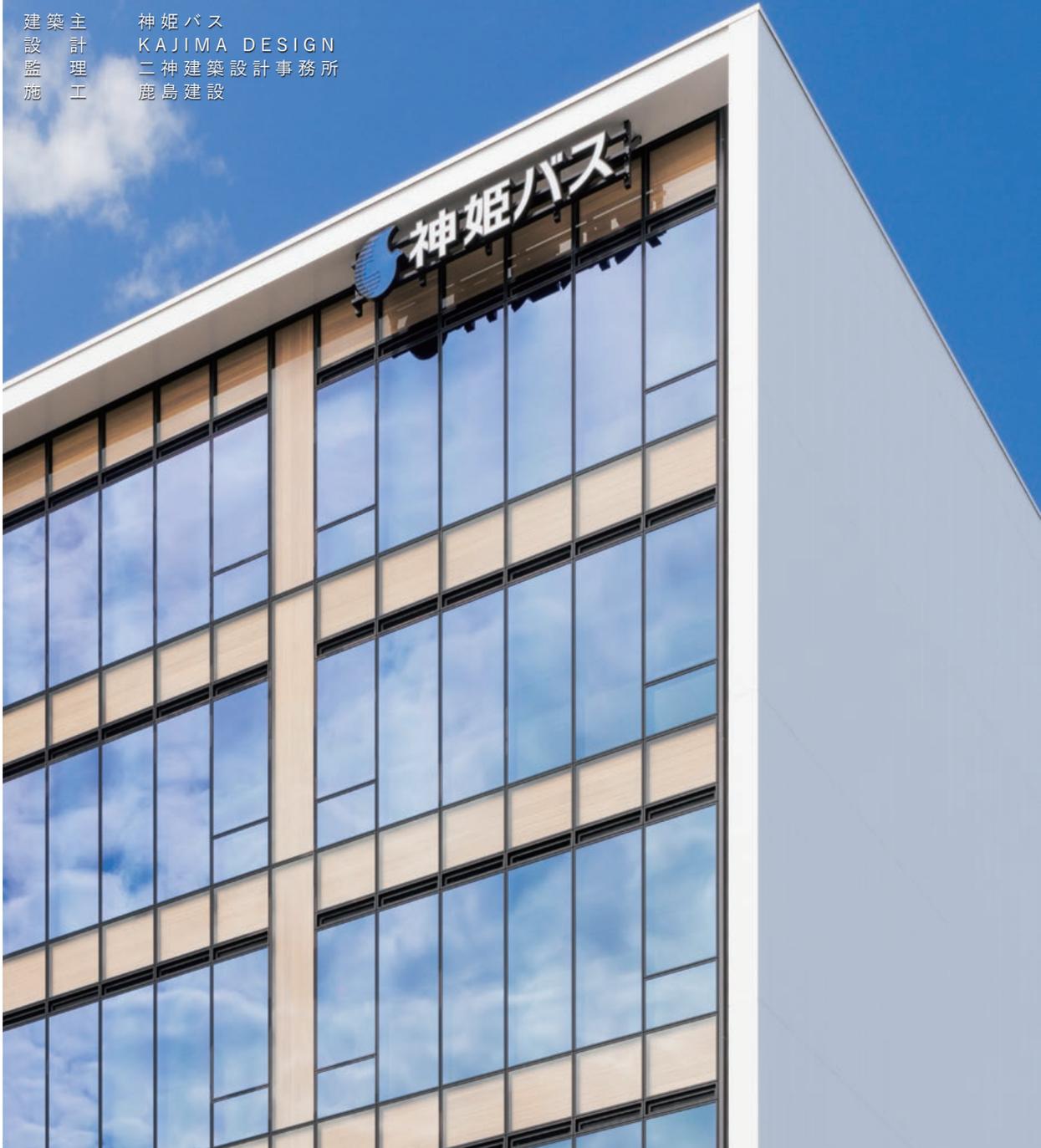
脱炭素を実現する 木質化オフィス

姫路市を拠点とし路線/高速バスを運行する神姫バスの創立100周年記念事業の一環として計画された姫路本社ビルです。「木質化」「環境配慮」「地域貢献」に特化した設計を目指しました。

【木質化】鹿島が開発した木質耐火被覆工法「Tie-KaSOLID（タイカソリッド）」をはじめとした内外装に多数の木材を使用しています。

【環境配慮】外皮性能の向上や省エネ機器の採用によりZEB Readyを実現しています。

【地域貢献】兵庫県産木材の採用や姫路の伝統技術・工芸を活かしたデザインとしています。



ファサード拡大：木のファサードをつつむ白い門型フレーム。防火袖壁としての機能も兼ねる

前垣篤志（まえがき あつし）



1988年京都工芸繊維大学工芸学部建築学科卒業、同年鹿島建設入社。現在、同社関西支店建築設計部グループ長

広瀬良太（ひろせ りょうた）



2009年横浜国立大学大学院建築都市文化専攻（Y-GSA）修了、同年鹿島建設入社。現在、同社関西支店建築設計部設計長



1階 エントランスホール：兵庫県産材による木壁・天井木ルーバーと姫路城をイメージした漆喰壁



外観南面（夜景）：夜間は執務フロア内の木天井が浮かび上がる



外観南西面：柱型とスパンドレルの木が際立つファサード



南面ACW拡大：スパンドレル部も木実板仕上げ



■鹿島が開発した木質耐火被覆工法「Tie-KaSOLID（タイカソリッド）」

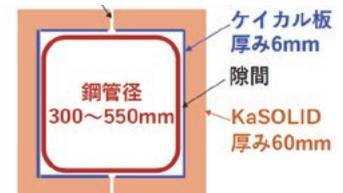
タイカソリッドは燃えしろ層である無垢のスギ材「KaSOLID※（カソリッド）」（60mm）と燃え止まり層のケイ酸カルシウム板（ケイカル板 6mm）で鋼管柱の外周を覆う工法です。大径木から切り出した無垢のスギ材の木目や色合いを生かした見た目を実現します。

タイカソリッドに使うカソリッドには、樹齢50年を超えるような伐採適齢期を過ぎたスギから切り出した大型板を用います。大径木を伐採するコストや手間は若齢木より大きく需要は減少し続けており社会問題となっています。大径木ならではの迫力ある使い方を示し、これまで未活用であった大径木の有効活用により森林の循環を促進します。

※ KaSOLID：Kajima Simple and Optimum-cutting Lumber with Intentioned Dimensionに由来

■木質化オフィス

耐火被覆工法のタイカソリッドに加え、本ビルの顔となる南面外装および各フロアの壁や天井・サイン等の内装にも木を多数使用しています。1階エントランスでは、木口面を活かした壁面や天井のルーバーと共に木に包まれるやわらかな空間を実現しています。木の使用量は約37㎡にもおよび約22tの炭素固定化に寄与しています。



(上) タイカソリッドの概要

(下) タイカソリッドを適用した鋼管柱で耐火試験を実施。試験後も鉄骨の柱は健全だった。



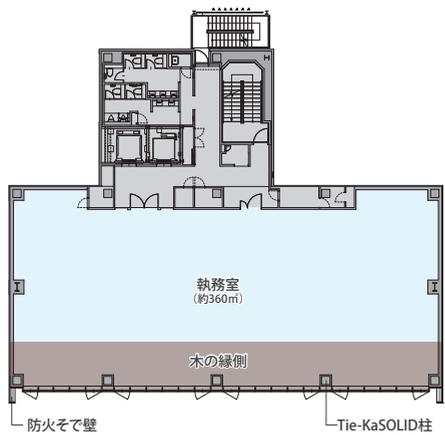
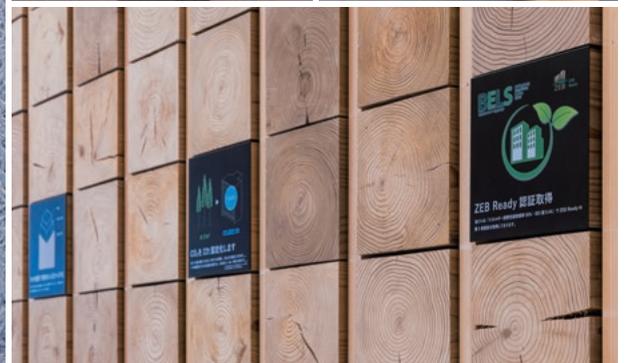
基準階執務フロア：木質耐火被覆工法 Tie-KaSOLID (タイカソリッド) による柱と壁・天井による木の縁側空間



1階エントランス木壁：木口面を活かした角材と天井ルーバーから連続したリブ材による構成



各種サイン：姫路の伝統工芸品である明珍火箸を活かした階数サイン (左) や木の端材を利用したサイン



■基準階平面図 S=1/500



■断面図 S=1/500

所在地 兵庫県姫路市北条口一丁目
 敷地面積 794.08㎡
 建築面積 539.77㎡
 延床面積 3,405.91㎡
 構造 鉄骨造 (一部木質耐火被覆)
 規模 地上7階
 工期 2024年10月～2025年9月
 撮影 (株)エスエス

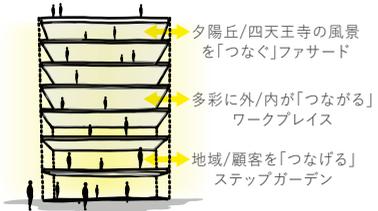
大阪信用金庫本店

建築主 大阪信用金庫
設計・監理 大林組
施工 大林組

まちにひらき つながる 都市型信用金庫

「この街のホームドクター」として、創業以来100年以上、地域を支え続けてきた「大阪信用金庫」の新たな本店ビル。

キャッシュレスやクラウドデータ管理が進んで、堅牢に守るものなくなりつつある今。ATMや窓口利用の機会が減って、地域の接点が失われつつある今。地域との新たなつながりを生む場となる「まちにひらかれた」信用金庫を目指した。



「まちにひらき・つながる」信用金庫

【大林組・設計】

黒川宗範 (くろかわ むねのり)



1994年東京工業大学大学院修士課程修了、同年大林組入社。現在、同社設計本部建築設計部部長。

伊藤 翔 (いとう しょう)



2006年京都大学大学院修士課程修了、同年大林組入社。現在、同社設計本部建築設計部課長。

鎌田順寛 (かまだ まさひろ)



2015年大阪大学大学院修士課程修了、同年大林組入社。現在、同社設計本部建築設計部係長。

【大林組・施工】

稲垣博史 (いながき ひろし)



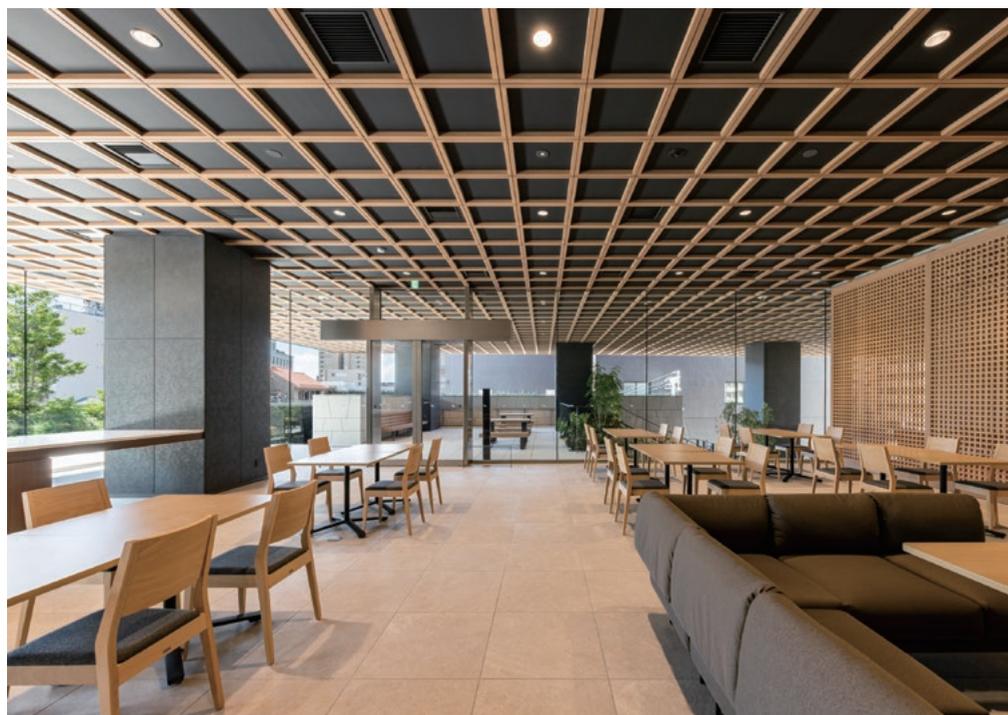
1987年大阪工業大学工学部建築科卒業、同年大林組入社。現在、同社大阪本店安全全部長 兼 京都駅改良JV工事事務所担当所長。



ゆとりある敷地がある地方とは異なり、都市型の信用金庫では、前面道路に面して必要な機能（ロビー・ATM・本店営業部・地域開放スペース・駐車場など）を計画することが困難となるケースが多い。大阪信用金庫本店では、高低差のある敷地や地形を活かし、まちとダイナミックかつ多層につながり、地域にひらかれた憩いの場を生み出した。地下1階の駐車場出入口から、1階のロビー・ATM・本店営業部、2階の地域ラウンジまで、ステップガーデン・ステップグリーンが入々を導き、多様な地域との接点を生み出している。大通りにダイナミックにひらかれたエントランスプロティは、本店営業部やエントランスロビーへの来客を迎え入れるだけでなく、お祭りやイベント、キッチンカーなどで地域に開放される。また、8階の大ホールや3階のセミナー室も地域に開放利用が可能であり、非常時には2階の食堂・ラウンジは地域の防災拠点としても開放できる計画となっている。



地域の憩いの場となる ステップガーデン



ステップガーデンと一体的につながる カフェ・ラウンジ



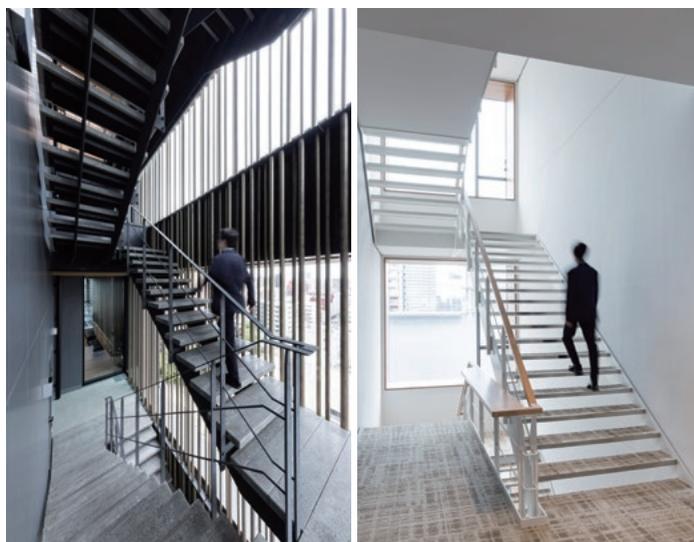
まちにひらかれた 外観

既存躯体の内側で合理的に柱を計画しながらも、西へ約4m、南へ約3mキャンチスラブで跳ね出し、ゆとりあるフロアプレートを確保した。それにより、執務フロア数を少なくなるとともに、避難階段でありながら開放感のある内部階段や、EVホールに隣接し前面道路にひらかれた外部階段によって、風通しのよいコミュニケーションが生まれる、健康増進につながるワークプレイスを目指した。また、キャンチスラブとともに、WCやEV、階段などのコア機能を分散配置することで、夕陽丘の夕陽を受け止めるリフレッシュラウンジ、四天王寺を眺めることができるテラスなど、多彩に内部と外部がつながる場を生み出している。西面と南面に配したフルハイトサッシや外部（外部階段・テラス）に面する屋外感を感じるスペースは、EVホールやラウンジ、フレキシブルワークスペース、テラスとして利用し、コントロールされた均質環境志向から脱却したウェルネスなワークプレイスを実現している。外部ペリメーターゾーンを温熱環境・光環境上の緩衝ゾーンと捉え、あえて外気・外光を感じられる屋外感のあるサマーグラデーションや、生体的なリズムに合わせた可変照度・色温度のライティンググラデーション空間を創り出した。これまでの金融機関にはない「まちにひらき・つながる」新しい信用金庫像を提示すべく、西面と南面にフルハイトサッシを採用しながらも、ウェルネスなワークプレイスと省エネを両立させ、CASBEE ウェルネスオフィスS ランク認証取得とZEB Ready (BEI=0.48/設計時認証)を達成した。また、執務室の中央スペースは、全体照度を確保するライン照明とタスク照度を確保するライティングレール照明を組み合わせた「アダプタブル照明システム」と、「空気式放射空調パネル」を組み合わせた天井システムを採用している。

(黒川宗範・伊藤 翔・鎌田順寛/大林組)

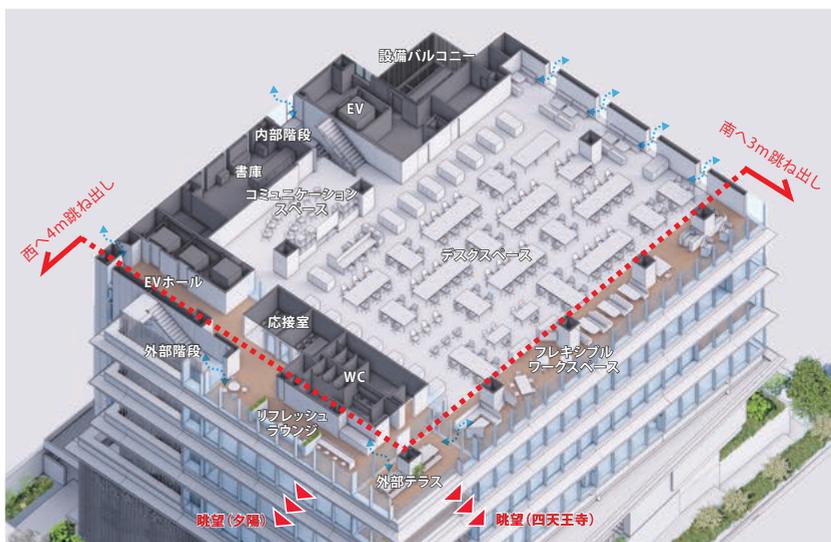


断面構成



前面道路にひらかれた外部階段

開放感のある内部階段



執務フロア平面



多様な働き方を支える天井システム：空気式放射パネル空調×アダプタブル照明システム



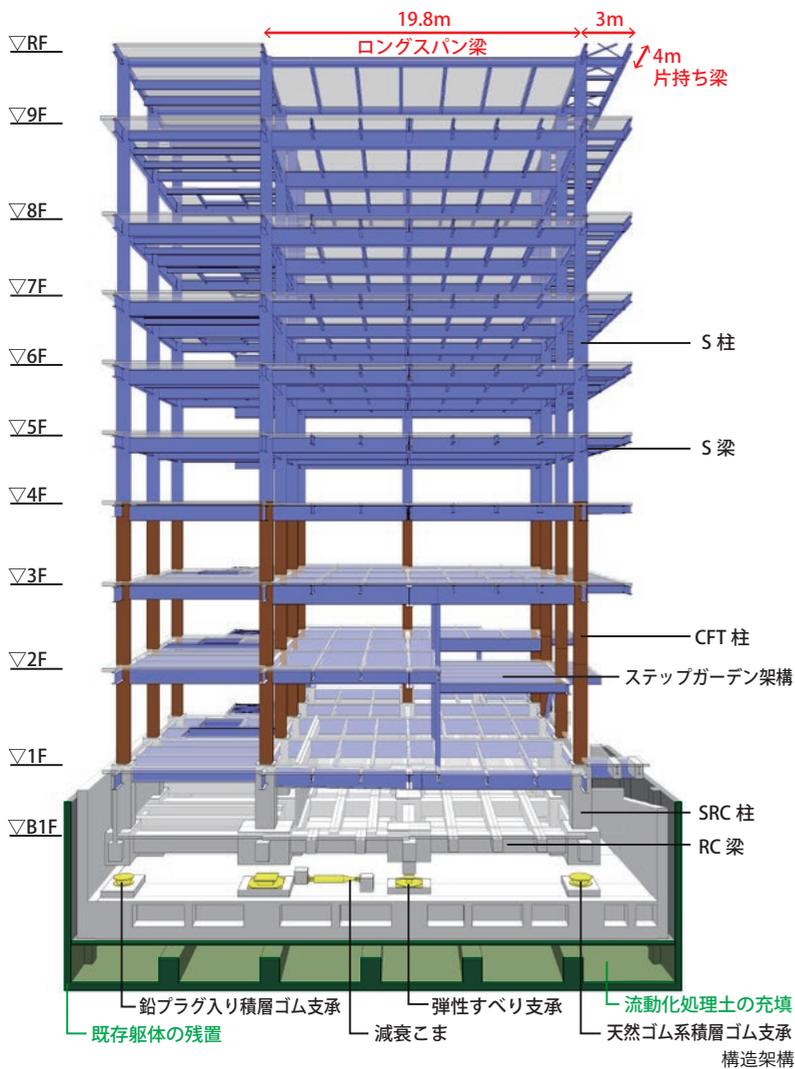
フレキシブルワークスペース+テラス



テラスから眺める 四天王寺



夕陽を眺める文化(日想観)の継承



免震構造によって高い耐震性能を確保しつつ、ロングスパン化によってフレキシブルな執務空間を創出した。さらに、低層部のステップガーデンでは、地域に開かれた開放的な空間を実現している。

本計画は既存ビル解体後の新築であり、地下部の既存躯体を最大限存置し、新築建物に活用することで、環境負荷低減と施工合理化を図った。具体的には、既存地下外壁と基礎を残し、外壁は施工時の山留壁として、基礎は新築建物の支持地盤として利用している。一方、既存地下躯体を残しながら、その内側に基礎免震躯体をおさめることで、建物周辺のクリアランスが制約され、新築建物のフットプリントが小さくなるという課題が生じる。本計画では、柱を内側に寄せて必要なクリアランスを確保しつつ、建物外周部にウェルネスな空間を生み出している。それを最大限跳ね出した片持ち架構で構成することで、特徴的なファサードデザインを生み出した。免震構造によるロングスパン梁と、それに連なる長い片持ち梁の配置は、構造的にも合理的で、フットプリントを抑えながら基準階平面を広く確保している。また、免震装置の交換ルートを確認するために減衰こま（ダンパー）が設置できる場所が限られる中で、鉛プラグ入り天然ゴム系積層ゴム支障や天然ゴム系積層ゴム支障、弾性すべり支障をバランスよく配置することで、免震層の偏心を抑えると同時に必要な剛性を確保している。

(黒川宗範・伊藤 翔・鎌田順寛／大林組)

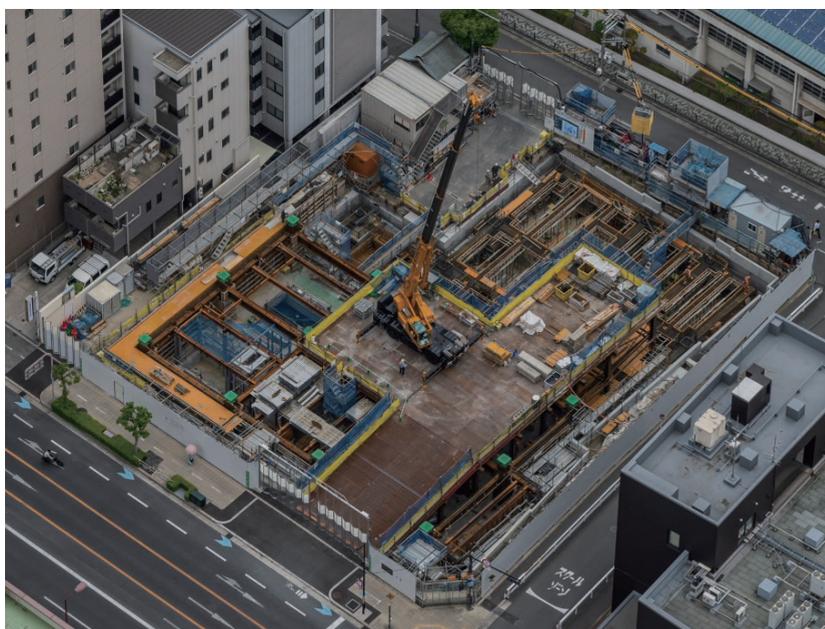
本計画地は敷地東西の道路に約4mの高低差があり、敷地一杯に建物を配置する計画であったため、使用可能な工事ヤードは極めて狭小で制約が大きい状況であった。地上工事では、限られたヤードを有効活用するため、工区を先行・後施工の2分割とし、車両搬出入場所や資機材荷捌きヤード（鉄骨柱建て起こし場所等）を工夫して確保。詳細計画を策定し、ヤード不足を補うことで、安全性や工程への影響を回避した。さらに、地上3階～R階外装キャンチスラブ先端で支持するL型PC版や剛接合部の品質精度管理に重点を置き、現場施工管理を徹底した。

地下工事では、敷地および既存躯体位置の点群データとBIMモデルを活用し、残置する既存躯体の正確な位置・寸法を把握した。これにより、外周擁壁厚の確認や、高低差のある敷地における免震構造の新築擁壁面と既存擁壁面とのクリアランス確認を円滑に行い、地下躯体を構築した。

(稲垣博史／大林組)



片持ち梁先端に剛接合するL型PC版



狭小敷地での工事ヤードの確保



点群データとBIMモデルを活用した正確な寸法管理

所在地	大阪市天王寺区上本町8丁目3-5
敷地面積	1,979㎡
建築面積	1,477㎡
延床面積	10,579㎡
構造規模	S造 一部SRC造・RC造
免震構造	
地上9階・地下1階	
工期	2023年5月～2025年5月
撮影	(株)エスエス 土出将也

四天王寺の風景や文化をつなぐ
ファサード・木天井伊藤 翔
大林組
建築設計部秋重 誠
築柴
取締役

100年以上、地域（上町台地）を支え続けてきた信用金庫として、愛着と親しみのある風景や文化をつないでいきたいという思いがあった。四天王寺の印象的な軒が積み重なるデザインを、木調に塗装したPC版と小口を見せた木ルーバーで構成された軒天井によって継承し、地域の風景の記憶をつなぐことを目指した。また、四天王寺を想起させる木格子天井が、ステップガーデンと内部を大らかにつなぎ、これまでの堅牢性や格が求められた金融機関にはない、「まちにひらき・つながる」信用金庫像を発信するファサードを実現している。

その他、内装や建具、受付カウンター、ブラインドなどに計60m³の国産木材を利用し、ウェルネス（心身の健康）だけでなく、CO₂固定（約40t）にも寄与している。また、旧本店で愛されてきた御神木（クスノキ）を、ドアハンドルや室名プレート、ロゴサインなどにリユースし、旧本店のDNAを継承している。



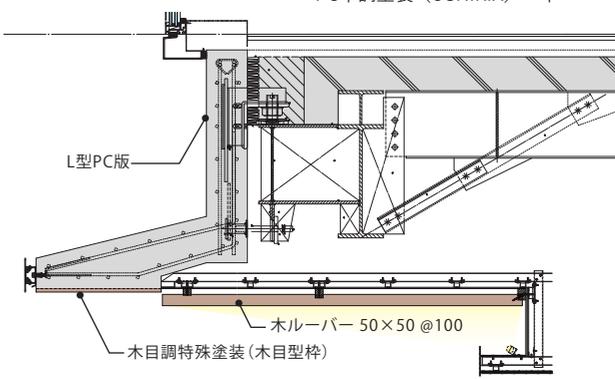
四天王寺五重塔



四天王寺の軒を想起させる 内外をつなぐ木ルーバー天井



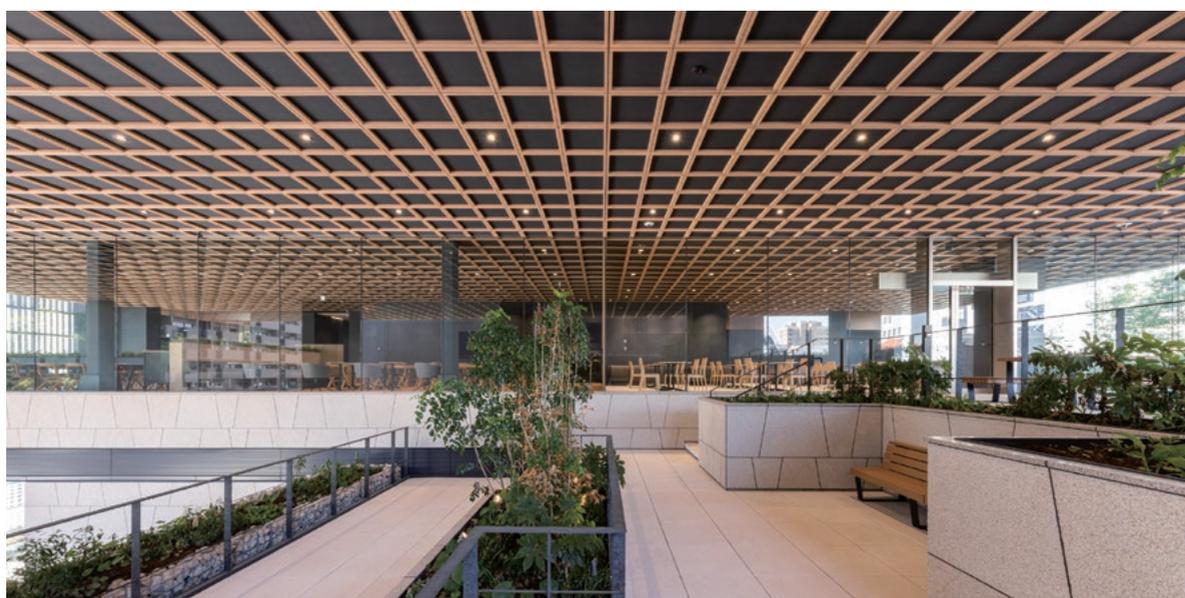
PC木調塗装（OSHIRIX）×木ルーバー



軒先ディテール S : 1/50



四天王寺の格子天井・格子戸



四天王寺の格子天井を想起させる 内外を大らかにつなぐ木格子天井



株式会社 築柴

事業概要：各種建築木工造作工事の材料製作及び施工
特注インテリア家具類及び木製建具の製造

採用製品：木格子天井・木格子建具・天井ルーバー
造付家具・ホール木造作・和室造作

建具商「戸徳商店」として、1884年12月に創業し、時代の変化に対応しながら、特注家具や木工製品の製造・施工、木質内装仕上げ工事を手掛ける企業として、成長し培った「匠の技」をこれからも活かし、「製造力・技術力・人間力」にさらに磨きをかけ、「確かな品質」を皆様方にお届けできるよう成長してまいります。

四天王寺の風景や文化をつなぐ マテリアル・カラーコーティング



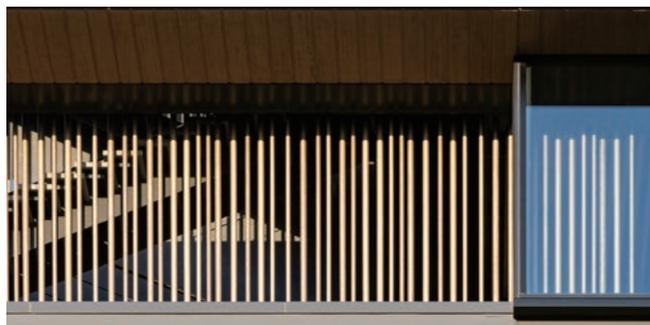
伊藤翔
大林組
建築設計部

夕陽を受けて煌めく真鍮もまた、上町台地の風景をつくる構成要素である。真鍮色（2色）にカラーコーティングされた、外部階段の落下防止を兼ねたスチールパイプスクリーンは、夕陽を受け止めて煌めき、地域の風景を記憶をつなぐ役割を担っている。また、四天王寺や夕陽を望むことができる稀有な立地を活かし、風景だけではなく、夕陽を眺める「日想観」という四天王寺の文化もまた、受け継いでいくことを意図している。

大阪信用金庫が建つ上町台地には、四天王寺七坂に代表される、階段や石垣、石畳のある風景が至るところにある。人々を迎え入れるステップガーデンやステップグリーンによって、地域の人々にとって愛着と親しみのある風景が呼び起されることを意図している。また、ステップガーデンの床材には、四天王寺七坂の石畳を連想させる、カラーコーティングしたPC平板を採用し、歴史を感じさせるマテリアル・風合いを再現している。



外部階段の落下防止を兼ねたスチールパイプスクリーン



西日を受け止め煌めくパイプスクリーン



夕陽を受けて煌めく真鍮



真鍮色（2色）にカラーコーティングされたサイズの異なるスチールパイプ



四天王寺七坂の石垣を想起させるステップグリーン



四天王寺七坂の階段を想起させるステップガーデン・憩いの広場



四天王寺七坂の階段・石垣・石畳



四天王寺七坂の石畳を想起させるテラゾPC平板

OSHIROX

株式会社OSHIROX（オシロックス）

事業概要：OSHIROXのデザイン施工は、外壁をはじめ、
内装・床・ファニチャー・サイン・
ランドスケープ・各種プロダクト等

採用製品：ハイブリットカラーコーティング工法
※建造物やプロダクトの意匠、素材、空気感を
活かしつつ、特殊な塗装を施工工法



クライアント・設計者の想いを受けアイデアをもって可能性を導き出し鍛錬された技術をもって形にする。関わる全ての人に痺れるような感動を与え最高の笑顔をもたらすことが私たちの使命です。また、OSHIROXのアイデア・技術は建造物やプロダクト等に+αの価値を与えます。私たちは、日々思索を重ね、唯一無二の表現を追求しています。その成果と経験、アイデアと技術は、より多彩に、より美しく表現することを可能にし、目に見える表現だけでなく、強く長期的に美しさを保つ技術も注ぎ込みます。『機能的で美しい』ものづくりの根底にあるその真意を、世の中に送り出したいと考えます。

柔軟なホール利用を可能にする ロールバックチェア（移動観覧席）



伊藤翔
大林組
建築設計部

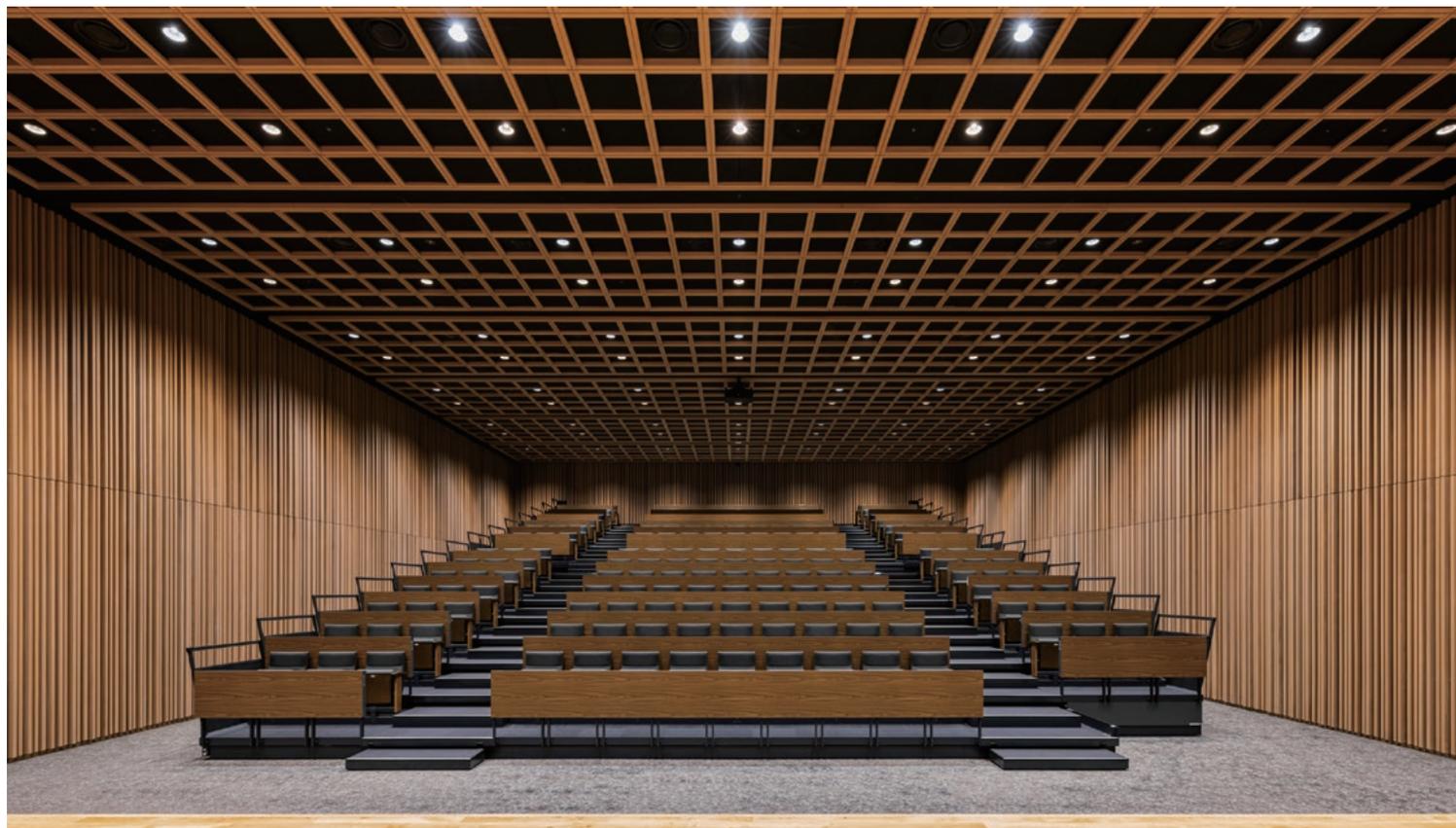


川崎雄人
コトブキシーティング
関西支店営業開発部

天井高6.3m・約400㎡の大ホールは、固定ステージやバトン、AV設備のほか、ロールバックチェア（移動観覧席）を実装し、社内会議だけではなく、総代会や地域イベント、音楽会などの幅広い利用を想定している。ロールバックチェア開放利用時には約200名がゆとりをもって着席利用することができ、収納時にはスクール・島型・パーティレイアウト利用も可能である。部分収納もできる仕様であり、使い方に合わせた柔軟な利用・運用が可能なホールを実現した。

浮き床や剛天井、遮音壁によって、音楽利用も可能な遮音性能を確保するほか、木ルーバー壁や木格子天井の裏にバランスよく配された吸音材によって、適切な残響時間を確保した。

高級感のある木調のロールバックチェアは、壁および天井の木材（杉材）と違和感なく調和している。また、幅を最大限広く確保し座り心地を重視した座席や、A4サイズがおさまるテーブル、高齢の方も安全に利用できるゆとりある階段など、使いやすさ・UXを追求した。



ロールバックチェア（移動観覧席）開放利用時



ロールバックチェア（移動観覧席）全収納時



部分収納による柔軟な運用が可能



イス「Type L」+テーブル「エレガnte」



最後部席からの俯瞰



KOTOBUKI SEATING

コトブキシーティング株式会社

事業概要：公共施設家具事業/文化・スポーツ・教育施設・
議場向け等の家具の製造・販売

採用製品：移動観覧席フルオートタイプ

搭載イス「Type L」/テーブル「エレガnte」



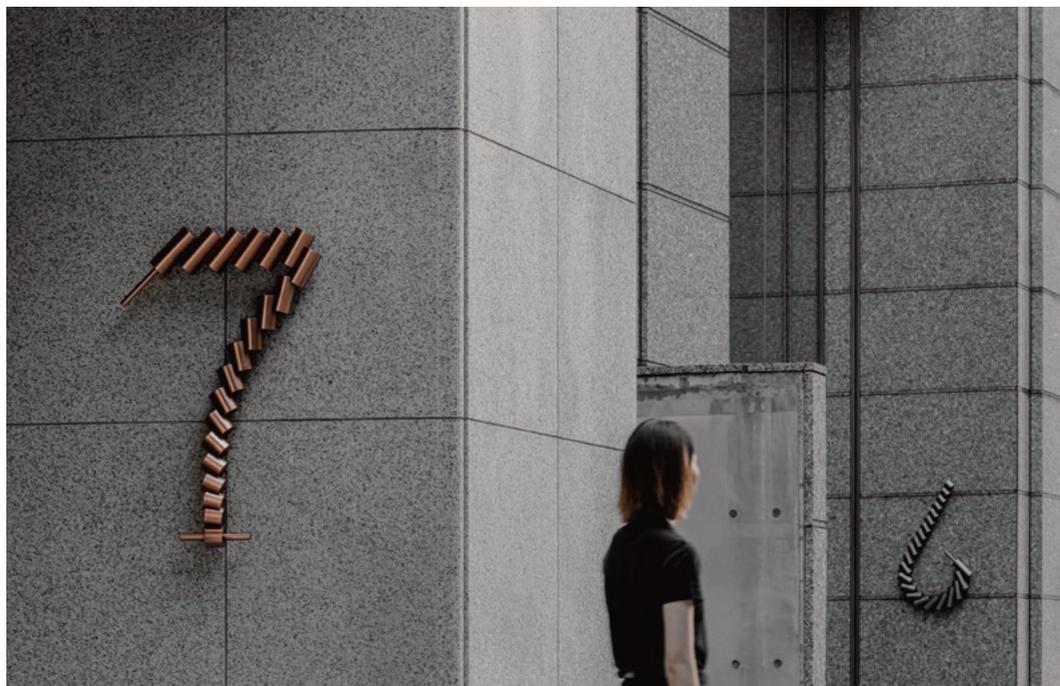
コトブキシーティングは、創業以来110年以上にわたり、公共空間におけるイスづくりを追求してきました。大阪信用金庫本店には、フルオート仕様の移動観覧席が導入されています。スイッチ操作ひとつで階段状の座席を展開・収納でき、短時間で空間の用途を切り替えることが可能です。搭載されているイスは、厚みのあるクッションと三次元形状の背もたれによる高いフィット感が特長の「Type L」。さらに、A3サイズに対応した前テーブル「エレガnte」を備え、会議や研修の際には、必要に応じて収納ボックスから引き出して使用できます。テーブルは収納時にゆっくりと動作する指挟み防止構造で、安全性にも配慮されています。

空間を語るサイン

[アートディレクター・サインデザイナー]
藤井 北斗 (hokkyok)

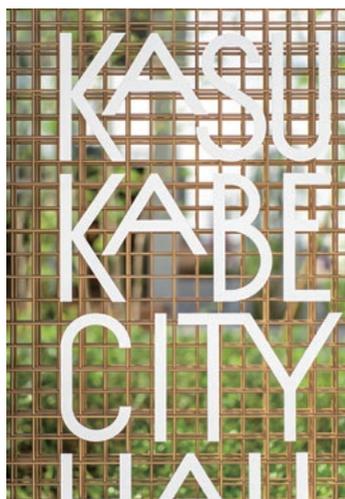
サインデザインにはさまざまな側面がある。ロゴやブランディングから展開されるグラフィックデザイン、空間にとりつくモノとしてのプロダクトデザイン、照明やサイネージと連動し光やデジタル表現ともつながる。どの手法を選ぶにしろ、重要だと考えているのはそのストーリーである。建築は長い年月をかけてつくられる1点ものであり、それに関わった人々の思いも強い。トイレのピクトグラムなど、サインは来館者が自分で探し見るものであるため、それを見たときに施設や空間のコンセプトや思いを伝えることができるのではないかと考えている。その土地に由来する素材や、建築とリンクする形状など、思いを伝えるピースを探し、サインへと置き換えてデザインをしている。

サインの大きな機能は、人を目的地へと正しく移動させることであるが、施設の中では移動の合間にある「待つ」場所が存在する。誰かを待つエントランスやエレベーターの前である。この2箇所のサインには、特にストーリーのある1点もののアートのようなサインを配置することが多い。来客を出迎え、目的地へと移動する際にエレベーターと一緒に待つ。そのときにサインが施設を語るためのトリガーになると良いと考えている。

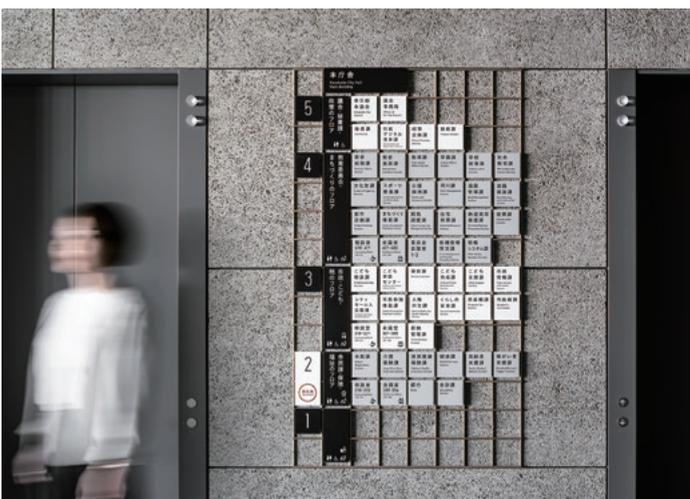


[日本橋兜町ビル ナンバーサイン]

日本橋兜町で街づくりを進める平和不動産のビルナンバーを新設するサインアートプロジェクト。「積み重ね」というタイトルをつけた。古くから日本の金融街として発展してきた日本橋兜町にとって、数字は特別な価値をもっている。これらのサインは、硬貨を棒状にまとめた棒金や、銭を紐で通してまとめた緋銭（びんせん）と、株価チャートを組み合わせてデザインしている。また、円柱状のローソク足が有機的に変化する数字を形づくる様は、経済活動の中で人々が織りなす生命力を表している。[企画：平和不動産・白社/制作・施工：白社]



[春日部市役所 サイン計画]



役所内で今後の誤の移動があったときにスムーズに変更できるように、可動するパネルをかけたメッシュを利用したサインシステム。メッシュは、春日部市の特産品である「麦わら帽子」を編んだイメージであると同時に、まちの文化の特徴である「藤棚」を支える格子や、「大風」の骨組みも想起させるデザインでもある。市役所が市民を支える場所になればと考えデザインしている。[建築設計：久米設計/サイン制作・施工：美和ロック]



[TAKENAKA CENTRAL BUILDING SOUTH]



藤井 北斗 (ふじい ほくと)
1982年 埼玉県生まれ
2005年 京都工芸繊維大学卒業
2007-2014年 廣村デザイン事務所在籍
2015年 hokkyokを設立
日本サインデザイン賞 金賞
日本空間デザイン賞 金賞など

hokkyok.com

企画編集：平野尉仁(ひと・まち・建築小委員会)

大手ゼネコンのオフィスのリノベーションプロジェクト。空間のコンセプトは、入居各社を「つなぐ」、エリアを「むすぶ」ことを意図した「Ribbon」。マテリアルコンセプトはそれに掛けて「Reborn」、再生材や集成材を積極的に活用している。サインも、現場で使い古された作業着を横層しかためたアップサイクル素材 (NUNOUS) を使用。来館者に対して、ユニフォームから生まれた素材のストーリーが、会話の糸口になればよいと考えた。[インテリアデザイン：竹中工務店/素材制作：セイショク/サイン制作・施工：スタッフナインハット]

第11回学生のための 現場見学会 「新・琵琶湖文化 館(博物館) 現場見学会」 (第1回/全2回)

日 時

2026年3月13日(金)
15:00~17:00(予定)
受付開始 14:30

講師 安井建築設計・隈研吾建築
都市設計共同企業体
松村 明 氏 (工事監理者)

大林組・笹川組建設工事共
同企業体 琵琶湖文化館JV
工事事務所
小原 英幸 氏 (工事長)



お申込みはこちら

滋賀の文化財を未来に伝える「希望の船」がいよいよ姿を現します。安井建築設計・隈研吾建築都市設計共同企業体による「新・琵琶湖文化館」の建設現場にて、全2回のシリーズ見学会を開催します。本企画の醍醐味は、第1回(3月)と第2回(11月予定)、2つの時点から同じ現場を見つめることにあります。第1回で触れるのは、文化財を守る基礎免震構造や建物の力強い骨格。そこから約半年を経て、第2回ではどのように意匠が施され、空間が劇的な変化を遂げるのか。一過性の見学ではなく、建築が誕生するプロセスそのものを追体験できる構成です。設計者の意図が施工現場でどう具現化されていくのか。教科書を越えた学びと、クリエイティブな刺激に満ちた体験がここにあります。文化と技術が交差する最前線で、建築のダイナミズムを肌で感じてください。

【建築概要】

工 事 名：滋賀県立琵琶湖文化館
整備事業
発 注 者：滋賀県
建 築 主：(株)琵琶湖C&S
設計・監理：安井建築設計・隈研吾建
築都市設計共同企業体
施 工：大林組・笹川組建設工
事共同企業体
工 期：2025年3月~2027年3月
末引渡し

建築規模

階 数：地上4階PH1階
構 造：RC造(一部S造、SRC造)
建築面積：2,362.01㎡
延床面積：6,644.23㎡

所 在 地 滋賀県大津市浜大津五丁
目1-1
最 寄 駅 京阪京津線「びわ湖浜大
津」駅 徒歩5分
JR「大津」駅 徒歩15分
集 合 場 所 現地(詳細は参加証に記載)
定 員 20名(先着)
参 加 費 無料

申込方法

- ①催名「新・琵琶湖文化館現場見学会」
- ②学校名・学部・学科・学年
- ③学生氏名(ふりがな)
- ④引率者 職名・氏名(ふりがな)
※学生のみの場合不要
- ⑤連絡先電話番号・E-mail
上記を明記しHP又はE-mailにてお申し込みください。
参加証は後日送信します。
- ⑥全2回参加、第1回のみ参加の区分

申込締切日

2026年3月6日(金)
*ただし定員になり次第、締め切らせていただきます。

問合せ・申込先

一般社団法人日本建築協会
(担当：中内)
TEL：06-6946-6981
FAX：06-6946-6984
E-mail：jigyoka@aaaj.or.jp



希望の船を表現する外観イメージ



西側広場からの外観イメージ



エントランスホールのイメージ

第9回片岡安賞 一次審査通過者による オンライン 公開プレゼンテーション 視聴者募集 のお知らせ

日時

2026年3月20日(金・祝)
14:00~16:00(予定)



第9回片岡安賞（日本建築協会論考コンクール）は募集テーマを「100」とし、1月の審査委員会にて下記の一次審査通過者3名が決定しました。最終審査の前に開催する公開プレゼンテーションをオンラインでご視聴いただけます。プレゼンターによる発表と、熱意に満ちた審査委員との質疑応答を、ぜひライブでご視聴下さい。

第9回片岡安賞（日本建築協会論考コンクール） 一次審査通過論考（受付順・敬称略）

- ・「100」をめぐる建築の哲学 — 医師から居住者となった私の視点
八巻 孝之
- ・100の外側で生きる—都市の余白とインフォーマルな時間—
小泉 満里奈
- ・2045 虚構から感じる幸福な空間
白木 美由紀

■論考コンクール審査委員会



審査委員長
松村秀一
神戸芸術工科大学
学長



審査委員
倉方俊輔
大阪公立大学
教授



審査委員
岡絵理子
関西大学
教授

■定員 100名（先着順）

■参加費 無料

■視聴方法

Microsoft Teams会議を使用します。協会事務局よりお送りするメールに記載されたリンクをクリックすると、Microsoftアカウントをお持ちでなくても、ゲストとしてご参加いただけます。

※音声とカメラをオフにしてのご参加となります。

※チャット等での質問は受け付けできません。

※申込受付後、当日のプログラムやTeamsリンク先などを後日メールでお送りします。

■申込方法

E-mailもしくはホームページからお申込ください。

- ①催し名：公開プレゼンテーション
- ②氏名（ふりがな）
- ③職場名または学校名
- ④連絡先電話番号
- ⑤E-mailアドレス



お申込みはこちら

■申込先

（一社）日本建築協会（担当：磯・中内）

E-mail：hensyu2@aaj.or.jp

TEL：06-6946-6981

■申込締切

2026年3月17日(火)

※定員になり次第、締め切らせていただきます。

※電話でのお問い合わせは3月16日(月)まで

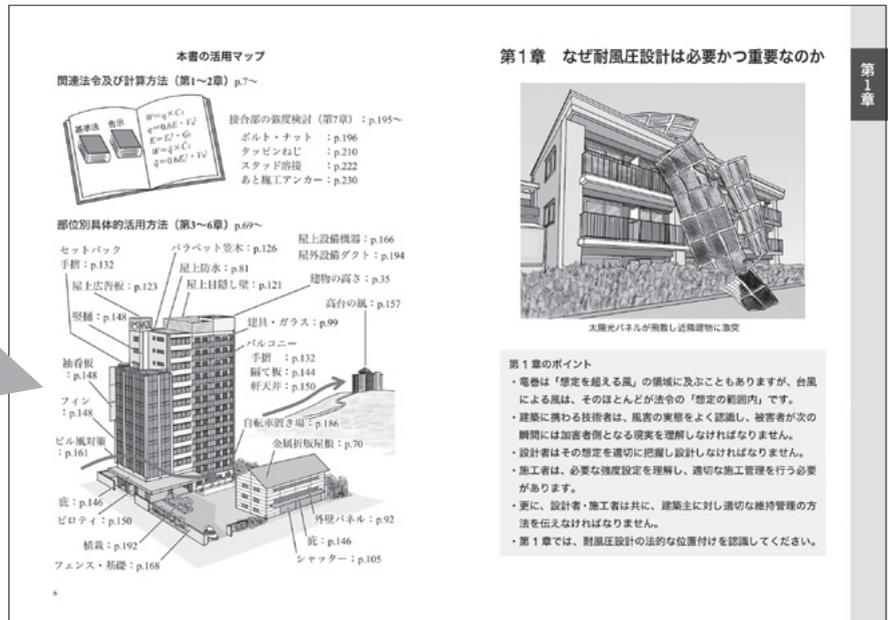
◆ 第9回 建築セミナー ◆

主催：日本建築協会出版委員会 共催：学芸出版社

日本建築協会出版委員会では、著者をお招きし、気軽にご参加いただける連続セミナーを開催しています。第9回として、日本建築協会企画・西博康氏著『イラストと計算例でわかる 外装材の耐風設計・施工』の出版を記念して実施いたします。お申し込みをお待ちしております。

イラストと計算例でわかる 外装材の耐風設計・施工

講師：西博康氏



10%超OFF・送料無料

使用テキスト A5判・256頁・本体¥2,700+税
 受講者は税込¥2,970⇒**税込特別¥2,600**でご購入いただけます。

屋根、足場、庇、シャッター、防水、笠木、外壁、手すり、屋上設置物の飛散など、台風等による飛散被害が頻発するなか、すべての建物の設計・施工管理業務において耐風圧対策の重要性が高まっている。お客様を被害者・加害者にならないために、また生産者責任を追究されないために必要な知識を、実務者視点でやさしく解説。

〈講師プロフィール〉

西博康 (にし ひろやす)

1959年生まれ。1984年室蘭工業大学大学院工学研究科建築工学専攻修了後、清水建設株式会社に入社。以降、施工管理に従事。2011年関西西事業本部建築技術部長、2020年関西支店品質長・上席エンジニア。2024年同社退職。「しずかるー®」(遮音ルーバー)開発者(2019年プレス発表)。2013年一般社団法人日本建築協会常任理事・出版委員長。2025年 西建築エンジニアリング相談室代表。株式会社大成技術顧問。

このセミナーは、建築CPD情報提供制度認定プログラム申請中です。建築関連CPD (2単位)

日時：2026年4月15日(水)

18:00 ~ 20:00(17:45開場)

場所：TOTOテクニカルセンター大阪

大阪市中央区久太郎町3-6-8 JRE御堂筋ダイワビル2F
 地下鉄本町駅から徒歩4分

受講料：	一般	¥3,000
	会員・学生	¥2,000

定員：60名



【申込方法】このセミナーは前払い制です。

下記をご記載の上、E-mailまたはFAXにてお申し込みください。

①催し名(第9回建築セミナー) ②氏名(ふりがな) ③ご所属 ④一般・会員・学生の別 ⑤電話番号
 ⑥E-mailアドレス ⑦CPD単位申請希望の場合は申請先団体名と登録番号

申込先：(一社)日本建築協会 TEL 06-6946-6981 FAX 06-6946-6984 E-mail: ken-shaik@aaj.or.jp (担当: 福原)

●お申し込み受付後、協会より参加費の振込先をご案内します。ご入金確認後、受講票PDFをお送りします。

【テキスト購入方法】オンラインでお申し込みください。

受講をお申し込みの皆様に受講票をお送りする際に、テキストを**特別価格¥2,600(税込)**(通常価格¥2,970円〔税込〕)・**送料無料**でお求めいただけるクーポンコードと書籍販売ウェブページをご案内します。4月1日(水)までのお申込みですと、セミナー前にご指定の宛先にお届けできます。当日の販売は行いませんので、ご購入ご希望の方は予めお申し込みください。

若き創造者たちへ

「第73回青年技術者顕彰」のご案内

日本建築協会では、昭和29年（1954年）から「青年技術者」を表彰してきました。これは、35才以下の優秀な設計者、技術者、研究者等を対象とするもので、若手建築技術者のいわば登龍門として定着しています。

今年も、青年技術者選考委員会を設けて、計画・設計・構造・設備・施工管理およびその他の分野について青年技術者を表彰します。

選考は有識者による選考委員会が行い、選出された方は、本会総会での表彰、「建築と社会」への掲載等を予定しています。建築界の様々な分野で活躍されている皆様の積極的なご応募をお待ちしています。

応募提出規定

1. 応募できる人は満35歳（2026年3月31日現在）以下の本会個人会員に限りです。
2. すいせん者を併記し、すいせん者1名につき被すいせん者（青年技術者）1名とします（同一すいせん者が複数の応募者をすいせんすることはできません）。すいせん者は被すいせん者の勤務する組織の上司か上長とします（組織の代表者や所属部署の長でなくとも構いません）。すいせん者が学校教官である場合はこの限りではありません。本人が組織の代表者である場合は自せんとします。
また、組織内で専門分野ごとのすいせんは1名のみとし、複数名のすいせんは不可とします。ただし、組織内の同一分野であっても職種が異なる場合はそれぞれのすいせんは可能です（例：設備分野における「設計」と「施工」、設備設計分野における「電気設備」と「機械設備」、施工分野における「現場での施工管理」と「店社での技術開発・施工計画等」など）。組織の単位は支店もしくはそれに類する営業所を1単位とします。
3. 応募分野は特定しません（建築に関するあらゆる分野を対象とします）。応募者は、たとえば計画、一般設計、住宅・インテリア設計、構造、設備、施工管理、技術開発、行政、情報、コーディネート等の分野にあって、成し遂げたすぐれた実績について、下記の提出資料をPDF形式とし、期日までに申込先のメールアドレスへご提出ください。
なお提出資料の返却は行いません。
応募資格・応募分野に関して不明な点があれば本会事務局までお問い合わせください。
4. 提出された資料は「青年技術者選考委員会」において選考します。
5. 「青年技術者選考委員会」において選出された青年技術者は本会総会において表彰し、「第73回青年技術者特集号」（2026年7月号予定）に掲載します。
6. 提出資料（下記の順に資料を構成すること）

■応募用紙

本会事務局で発行、またはホームページからダウンロードしてください。



■略歴・業務経歴（A3版1枚／書式は任意）

本人の顔写真、氏名、生年月日、最終学歴、保有資格、業務経歴等を記載してください。

■選考資料

A：青年技術者の思い（A3版1枚／書式は任意）

青年技術者の思いを端的に表すタイトルを記載してください。また、本人の建築、都市、環境などに対する考え方、取り組み姿勢と将来展望等についてまとめてください。文字だけでなく必要に応じて図表、写真等も用いてもかまいません。ただし、応募者本人の執筆に限ります。

B：業績資料（A3版1枚／書式は任意）

これまで関わったプロジェクトや取り組みについて概要をA3版1枚にまとめてください。各プロジェクトは時系列にまとめ、概要や特徴を端的に記載するほか、プロジェクト毎に本人の関わり方や果たした役割について明記してください。

C：特に注力したプロジェクトに関する資料（A3版4枚以内／書式は任意）

Bに記載したプロジェクトのうち、本人が中心となって特に注力したものを1または2選定し概要をまとめてください。プロジェクトにおける本人の立場や役割のほか、特に貢献した、力量が活かされたと思われる成果について詳細に記載してください。

※A～Cの資料について書式は任意としますが、鮮明な写真、配置図および主要平面図、概要、設計要旨、概念図等を用い、プロジェクトや計画の内容がはっきりわかる表現としてください。

7. 選考基準

提出資料をもとに、これまでの業績に対する評価と共に、本人がどのように貢献し、力量を発揮したか、どのような姿勢や想いで取り組んだか。また、本人の建築、都市、環境などに対する考え方、取り組み姿勢や将来展望を総合的に評価します。

8. 提出期限 2026年3月31日（火）

9. 申込先 （一社）日本建築協会「青年技術者選考委員会」
〒540-6591 大阪市中央区大手前1-7-31
OMM7F
TEL：06-6946-6981 FAX：06-6946-6984
E-mail：jigyoka@aai.or.jp

10. 提出方法 PDFデータで3月31日23時55分までに送信

11. 青年技術者選考委員会

委員長	三宗 知之／(株)東畑建築事務所本社オフィス大阪副代表
委員	駒井 陽次／(株)Style-A一級建築士事務所代表取締役
	橋本 修／(株)昭和設計理事
	水方 秀也／(株)竹中工務店開発計画本部長（西日本担当）
	安福 健祐／大阪大学D3センター教授
	秋田 智／(株)安井建築設計事務所大阪事務所構造部部长
	瀧野 敦夫／大阪工業大学工学部建築学科准教授
	澤村 晋次／(株)日建設計エンジニアリング部門設備設計グループ副代表
	高橋 満博／清水建設(株)関西支店設備設計部部长
	青木 康造／大成建設(株)関西支店建築部技術室長
	湯浅 肇／(株)大林組大阪本店建築事業部生産技術部部长

2027年より

建築と社会賞

再開します

日本建築協会では、2001年に、協会誌『建築と社会』の趣旨にふさわしい、社会性や環境などに配慮した建築プロジェクト、及び建築に関わる論文・記事などを顕彰する「建築と社会賞」を創設し、2020年まで18回にわたり実施してまいりましたが、その後のコロナ禍により、審査の実施が困難となったため、やむを得ず一時中断となっていました。

この度、再来年2027年に、日本建築協会創立110周年を迎えることから、「建築と社会賞」を再開する運びとなりましたので、お知らせいたします。

選考対象

協会誌『建築と社会』に掲載されたプロジェクトから選考する「プロジェクト部門」と、各号特集記事や寄稿から選考する「寄稿部門」の2つの部門からなり、第19回「建築と社会賞」は、2026年1月から12月号までの協会誌『建築と社会』に掲載されたプロジェクトと各号特集記事や寄稿から選考するものとします。

スケジュール

- ・予備審査：2027年2月度の常任理事会において実施。
- ・本選考：2027年3月（予定）外部有識者、本会会長を含む選考委員会において実施。
- ・発表：入賞者は、本人に通知するとともに、『建築と社会』2027年4月号（予定）で発表。
- ・表彰：6月に開催される日本建築協会2027年度総会で表彰。

表彰内容

プロジェクト部門：最優秀賞1点、その他数点。
寄稿部門：最優秀賞1点、その他数点。
各入選プロジェクト・論文・記事に対し、賞状、記念品を贈呈。

過去の選考結果

第1回から第18回までの受賞プロジェクトおよび論考はこちらからご覧ください。



東海支部会員project 2026

エスパシオ ナゴヤキャッスル

IGアリーナ

津市モーターボート競走場競技棟等

DAITEC SAKAE SoftLab

犬山市立橋五子ども未来園

折兼豊橋営業所

バックスタイル稲沢センター

愛知県立岡崎特別支援学校

知多信用金庫図書館前支店

公益社団法人愛知県看護協会新会館

愛知製鋼白扇寮

KOSAI Battery Park 新居第3工場

川口組テクノセンター

CREDO滋賀竜王

『建築と社会』東海支部特集特別編集委員会

委員長：塩田哲也

特別記事担当委員：中井孝幸、久保久志、鵜飼浩平

project担当委員：山口智三、鵜飼浩平

委員（順不同）：中井孝幸、冨田昌志、篠原佳則、野呂和弘、本梅 誠、水谷考治、福田泰造、鵜飼浩平、夏日欣昇、鈴木豊一郎、山口智三、毛利一彦、小柳英治、今津芳清、加藤武範、川本直義、澤田康司、藤井敬介、芳山明久、久保久志、小杉嘉文、三宅伸幸、松下拓真、佐藤 剛



南側からの朝景^{*1}

エスパシオ ナゴヤキャッスル

建 築 主 株式会社ナゴヤキャッスル
 設計・監理 日建設計
 施 工 竹中工務店

所 在 地 名古屋市西区樋の口町3番19号
 敷地面積 11,283.92㎡
 建築面積 7,355.97㎡
 延床面積 43,674.21㎡
 構造規模 SRC造 一部S造、地上11階 地下2階
 工 期 2021年11月～2024年11月
 撮 影 鈴木文人^{*1}、志摩大輔^{*2}



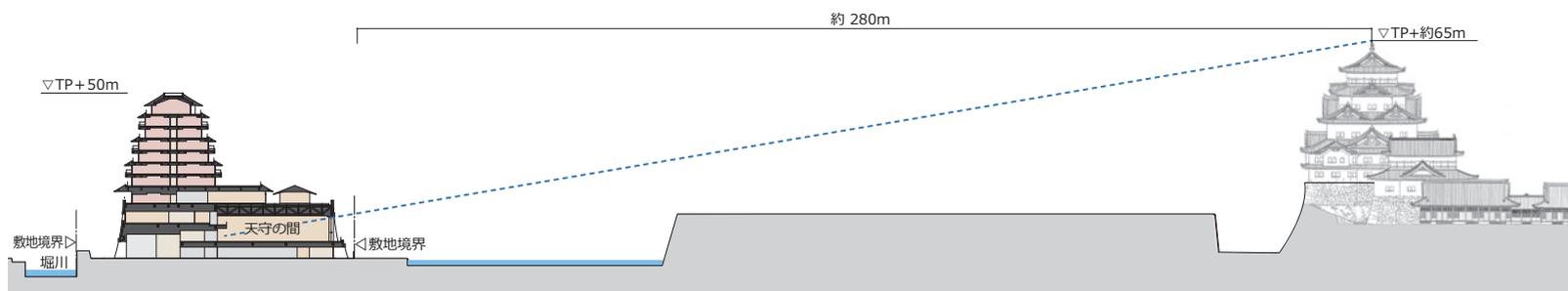
建替前：旧ホテルナゴヤキャッスル

本計画地は、西に堀川、東に名古屋城天守閣を正面に望む特別な場所にあります。

城を眺める存在ではなく、城郭の一部として歴史と文化を体感できる空間を設計しました。50名の作家とのコラボレーションにより、館内には多様なアートが息づき、過去と現在が響き合う体験を創出しています。

この建築は、完成後も時の流れとともに風景に溶け込み、美しさを重ねていきます。屋根は緑青を重ね、石積みには草が生え、風景は静かに変化しながら、この地にふさわしい落ち着きと風格を備えていきます。半世紀にわたり名古屋の象徴であった旧ホテルナゴヤキャッスルの記憶を継承し、新しい物語が生まれ、語り継がれる唯一無二のホテルとなることを目指しました。

(鈴木豊一郎/日建設計)

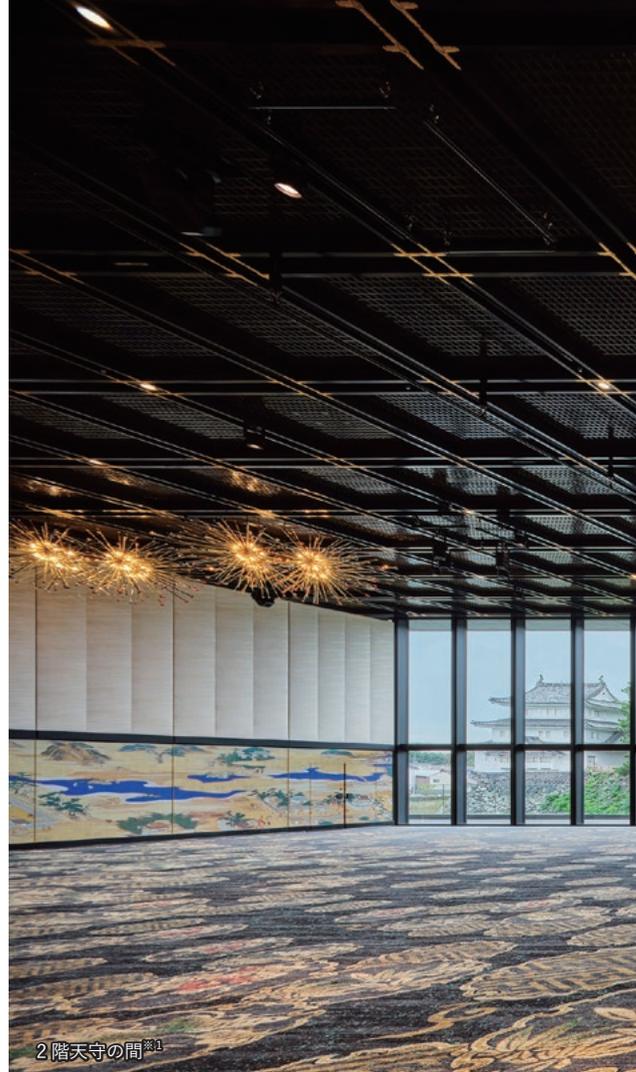




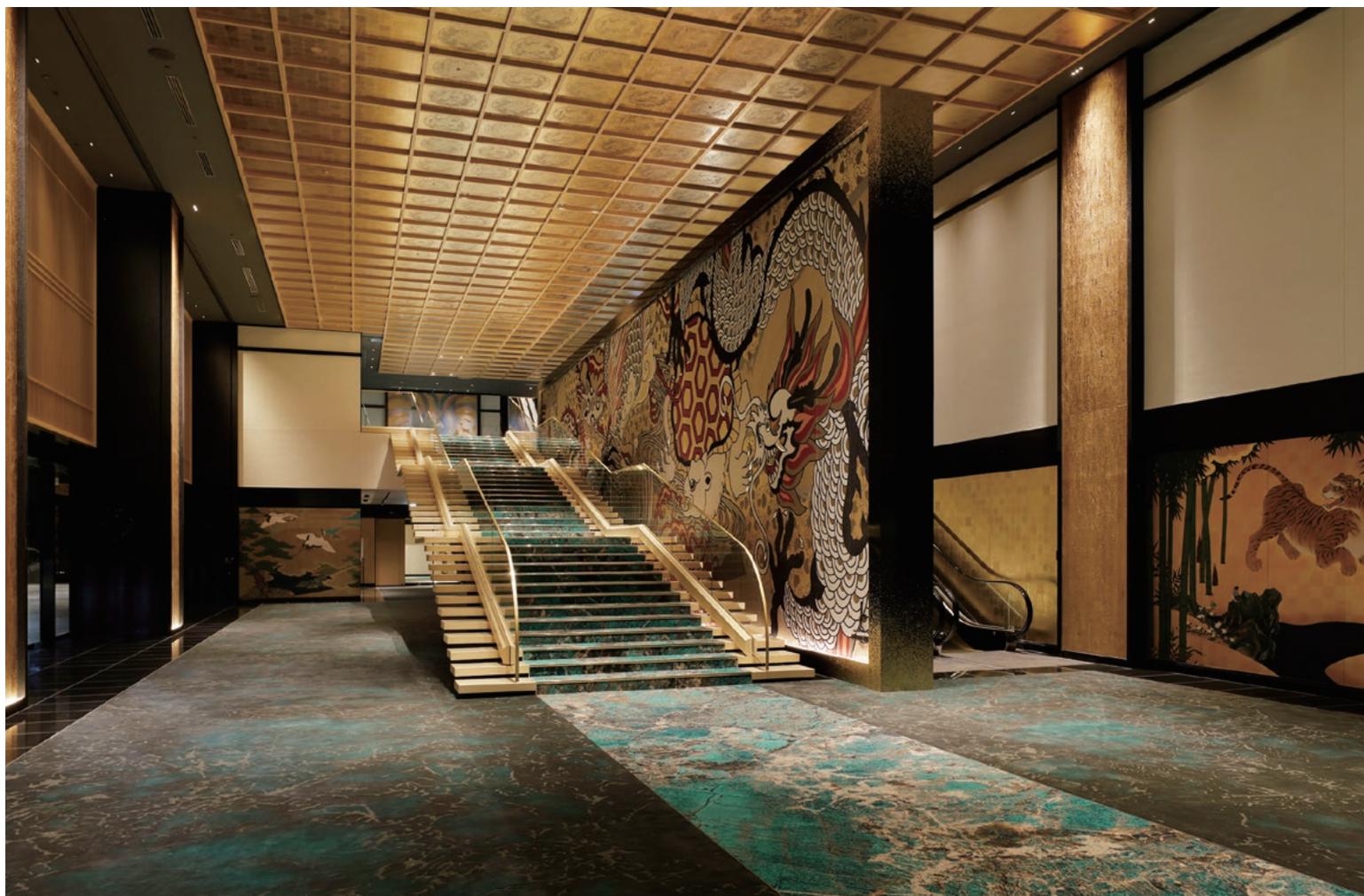
4階ロビー※1



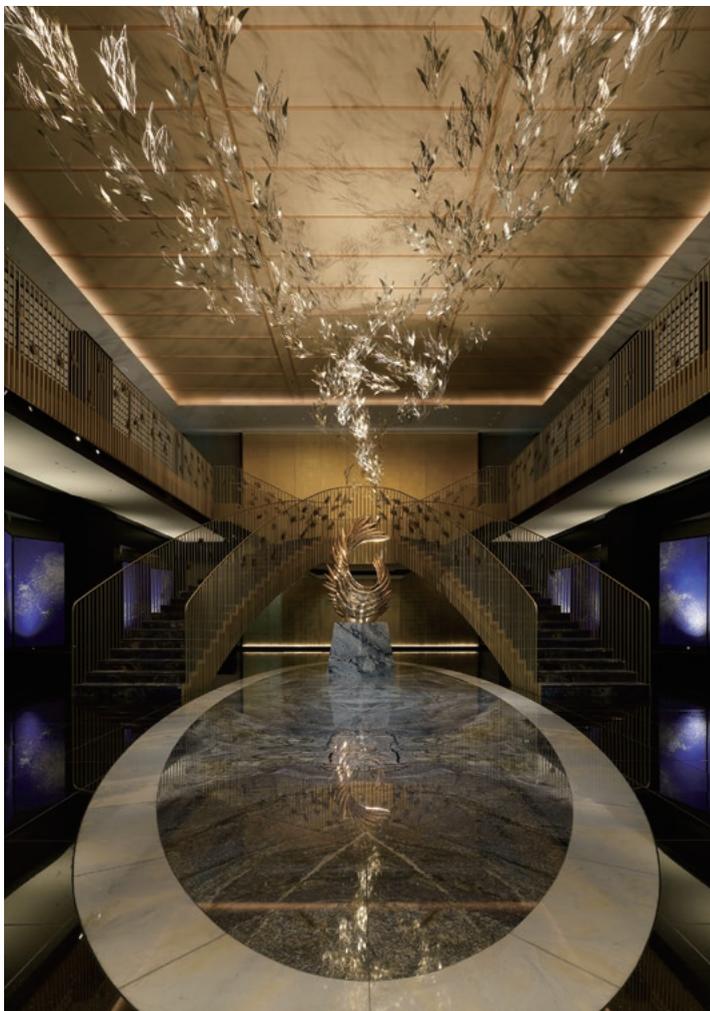
低層部外壁※1



2階天守の間※1



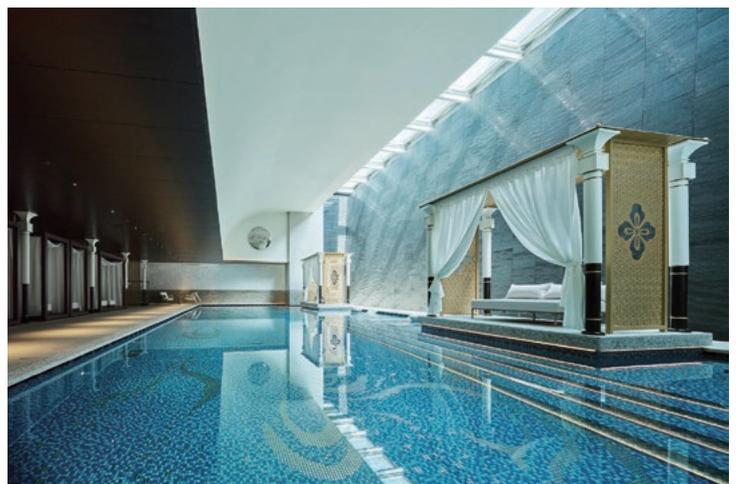
1階エントランスホール※2



1階宿泊者用ロビー※²



11階プレジデンシャルスイート※¹



地下2階プール※¹

IGアリーナ

発注者 株式会社愛知国際アリーナ
事業主体 愛知県
設計・監理 前田建設・隈研吾建築都市設計事務所・大建設計
愛知国際アリーナ設計共同体
施工 前田建設工業

名古屋城がある名城公園内に位置し、大相撲名古屋場所の開催など旧体育館が担ってきた伝統や歴史を更に発展させていく愛知・名古屋のシンボルとなる施設である。大規模な収容力と先進的な技術を備え、日本最大級のハイブリッドエンターテインメントアリーナとして位置づけられる。

収益化を強く意識して整備され、BT (Build Transfer) 方式による設計・建設と、コンセッション (公共施設等運営権) 方式による維持管理・運営を一体化した「BTコンセッション方針」を、国内のアリーナとして初めて採用している。設計段階から設計・施工・維持管理・運営が一体となり運用段階のイメージを構想し、事業を綿密に組み立て機能拡充を図っている。

外観は白い外壁を覆う、立体的な「樹形アーチ」を設け、名城公園の雄大な樹林と連続性を持たせている。正面のゲート前は大きく張り出し来訪者を迎え入れ、実際の木材を用いた樹形状の構造材で覆い、周囲の木々が連なったような表情や温かみのある質感を創出させた。これにより、アリーナ全体が公園景観に溶け込み、連続する緑地の一部として認識される外観を実現している。

来訪者を迎え入れる内部のコンコース空間は、外部から連続した枝葉が頭上に広がるような木組の天井で覆い、自然光を透過させる構成によって木漏れ日のような光環境を「木陰天井」で再現した。これにより、公園内で得られる木陰の安らぎや開放感を内部にも引き込み、利用者が屋外と屋内を連続的に体験できる空間となっている。

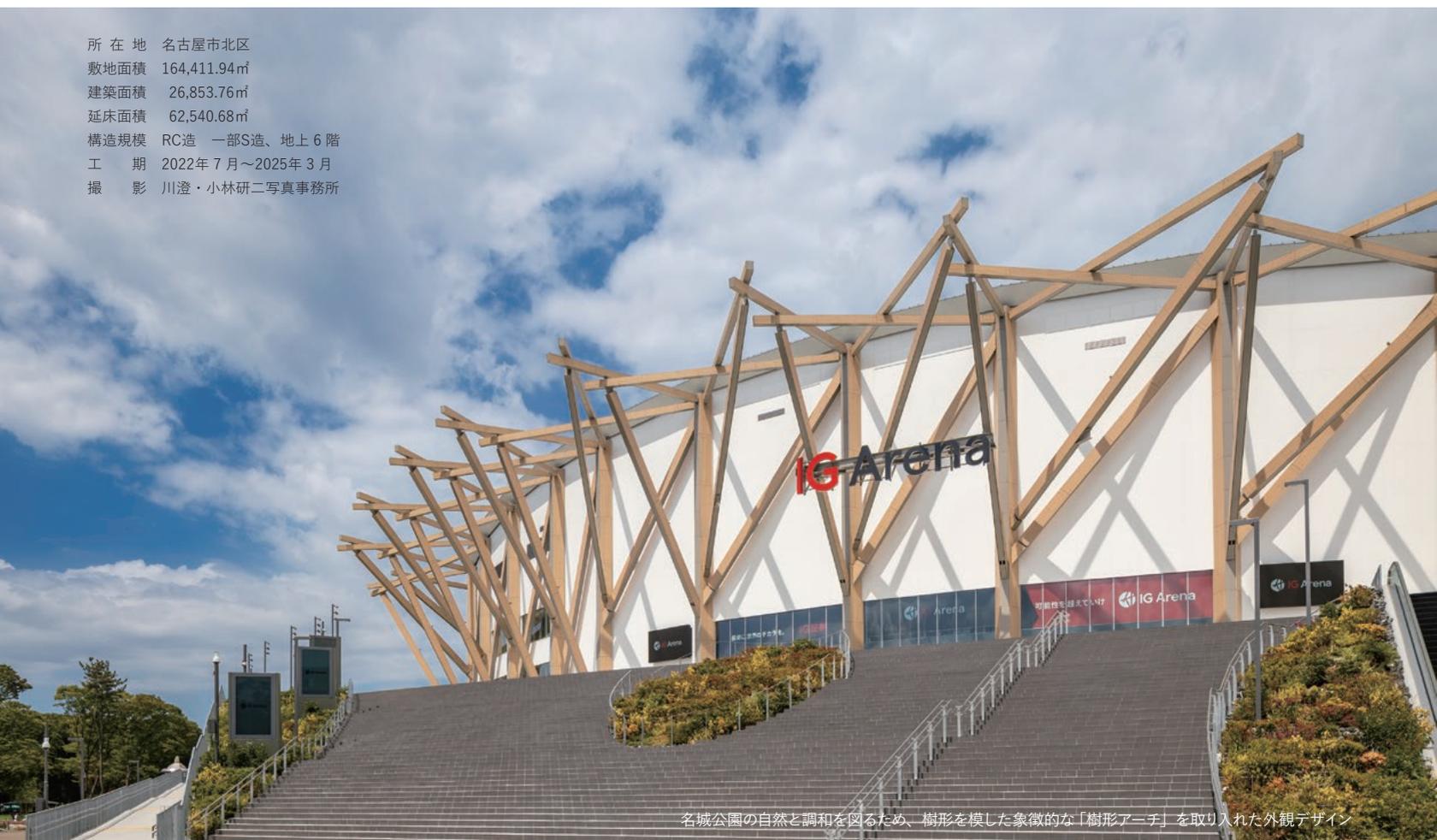


2階メインエントランス
2階に3カ所、1階に1カ所あるエントランスにはいずれも木々の温かみがあふれる



2階メインコンコース 飲食店舗とバーを望む
館内には木組みの「木陰天井」をデザインし、樹形アーチからの連続性をもたせている

所在地 名古屋市北区
敷地面積 164,411.94㎡
建築面積 26,853.76㎡
延床面積 62,540.68㎡
構造規模 RC造 一部S造、地上6階
工期 2022年7月～2025年3月
撮影 川澄・小林研二写真事務所

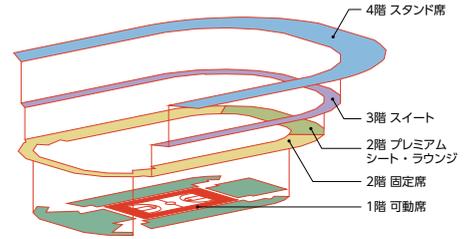


名城公園の自然と調和を図るため、樹形を模した象徴的な「樹形アーチ」を取り入れた外観デザイン

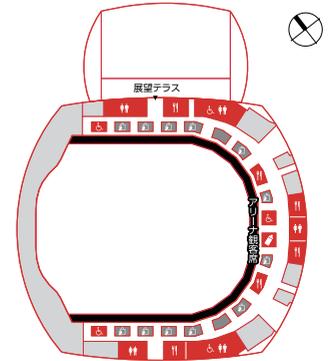


メインアリーナ アリーナ面を望む
スポーツや音楽イベントに適したメインアリーナ、様々な用途に対応でき、最大約17,000人を収容可能

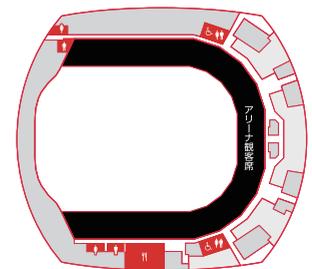
観客席設計



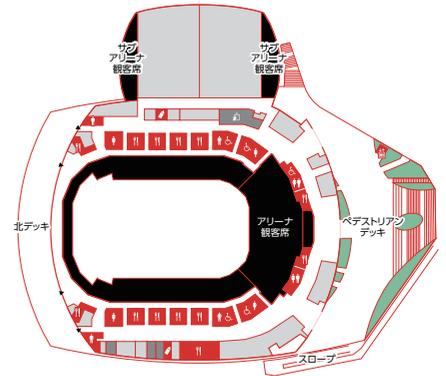
観客席の構成イメージ



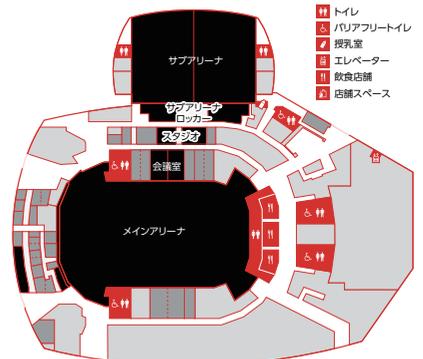
4階平面イメージ



3階平面イメージ



2階平面イメージ



1階平面イメージ



2階「d CARD LOUNGE」
質の高い飲食とイベントを楽しめる



スイートの一例
契約者が好みのカスタマイズを施すことができる



「MUFG Suite」利用者専用のエントランス
来訪者を迎える「大和張天井」の上質な空間



「IG証券ブランド体験ゾーン」
ネーミングライツパートナーの展示イベントスペース

メインアリーナは最大収容人数が約1万7000人で、国内最大級であり、質の高い観戦・鑑賞体験ができる世界水準の施設を目指した。

観客席には、スポーツ観戦に適したオーバル（楕円）型と、音楽イベントなどに適した馬蹄型をを組み合わせた「ハイブリッドオーバル型」で設計し、イベントの種類を問わず、快適に観覧できる環境を実現している。

屋根架構は、全周に支点を設けた立体トラス構造とし、地震力を低減するために制振部材を配置した。これにより、自由度が高い演出を可能とする30mの天井高を確保している。中央には画面高さ4.3mの大型で8面体の「センターハンギビジョン」を設け、内装には世界基準の音響設計に配慮した吸音材をふんだんに設置している。

可動観客席により、バスケットボール国際大会や、フィギュアスケートまでに及ぶ様々な競技に対応できるレイアウトを実現している。また、一部には上下動する機構を有する可動観客席を日本で初めて採用し、様々な競技レイアウトにおいて観客席からの視野を確保した。

スポーツやライブの感動・興奮・共感を最大化するエンターテインメント空間を創出するとともに、ホスピタリティエリアには高揚感を分かち合えるルームやラウンジを配置することで、より特別な体験を提供できるアリーナとしている。

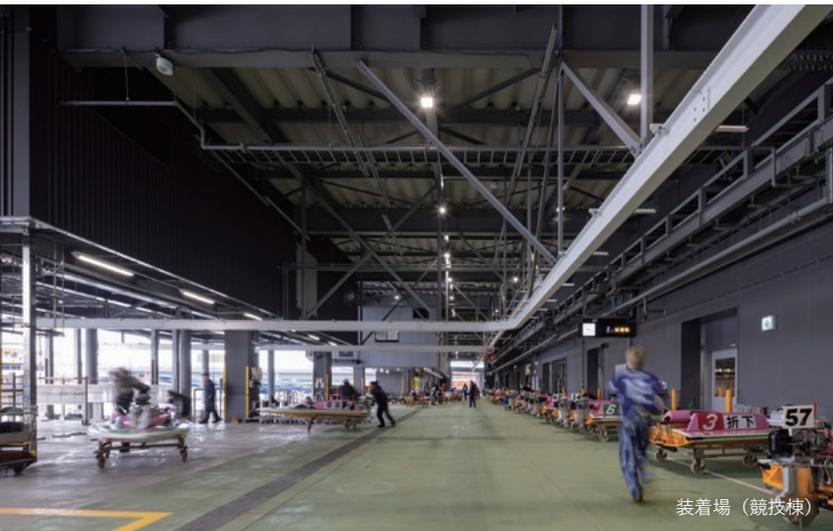
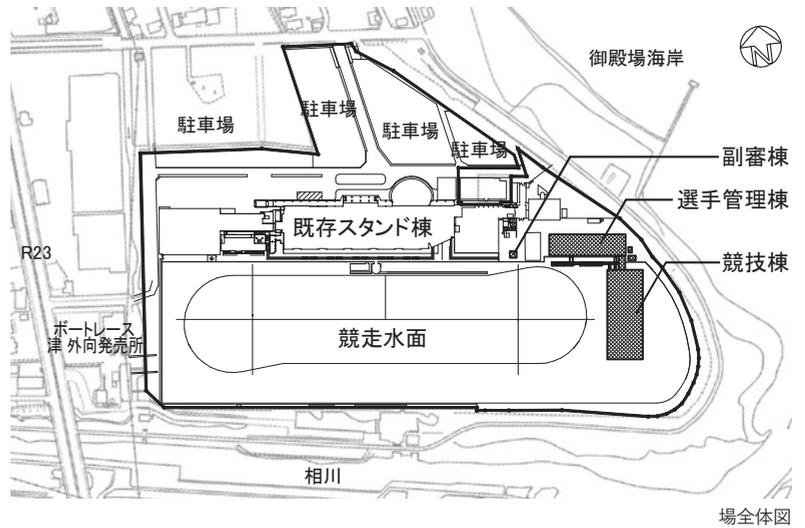
株式会社愛知国際アリーナ



津市モーターボート競走場 競技棟等

建築主 津市
 設計・意図伝達 株式会社安井建築設計事務所
 監理 株式会社中部都市建築設計事務所
 施工 前田・安濃特定建設工事共同企業体

所在地 津市藤方地内
 敷地面積 181,870.81㎡
 建築面積 5,901.47㎡ (今回計画)
 延床面積 5,313.02㎡ (今回計画)
 構造規模 S造 地上2階
 工期 2020年12月～2025年3月
 撮影 エスエス名古屋



装着場（競技棟）



選手ロッカー室（選手管理棟）



新旧施設が調和した水景づくりにより、ボートレース場全体のイメージアップを図る

ボートレース場内における競技用関係施設（競技棟、危険物庫、副審棟）および選手用関係施設（選手管理棟）の再整備事業である。整備対象エリアには新たな建物を建てる余地がなく、加えて工事期間中もレース営業の継続と運用への配慮が強く求められたため、最初に新競技棟を水面上に建設し、次いで旧競技棟の解体跡地に新選手管理棟を、そして副審棟へと、段階的に整備供用する建て替えフローと配置計画とした。

水景づくりからイメージアップを考える

棟ごとの独特の機能や合理性を十分に確保しつつ、ボートレース場のさらなるイメージアップにつながる施設づくりを強く意識した。

既存スタンド棟を含めた新旧施設がつくる景観が全体として競走水面と調和し、競技選手や来場ファンの心に残る印象的な水景づくりを目指した。計画施設のうち来場ファンから認識しやすい水上配置の競技棟は、既存スタンド棟と同調するようなゆるやかな曲面屋根を採用し、優雅なフォルムを水面に描く外観構成とした。競技棟に隣接する選手管理棟にはその伸びやかさを延伸させ、レースを俯瞰する搭状建物の副審棟には競技棟と選手管理棟の水平ラインに対する穏やかなアクセントとなる存在感を意識した。また、施設の色彩計画に抑制を効かせ、選手の鮮やかな勝負服が映える背景となるよう心掛けた。

伸びやかなフォルムを水面に描く施設群を背景に、今日も熱いレースが繰り広げられる。観客席から真っ先に目に入る水上の競技棟がレースの臨場感を盛り上げ、主役である選手が一層映える。競技関係施設としての選手ファーストのみでなく、ファンも魅了するボートレース場全体の雰囲気づくりに貢献できたと感じている。

(川井茂輝、藤村 篤/安井建築設計事務所)



水面に浮かぶ競技棟



伸びやかなフォルムを水面に描く

DAITEC SAKAE SoftLab

建築主 株式会社ダイテックホールディング
設計・監理 安井建築設計事務所
施工 守谷商会名古屋支店

ダイテックは、石油販売業向けSS事業、建築設備業向けCAD事業、注文住宅・分譲住宅向けクラウドDX事業等の開発・販売を行う企業である。名古屋栄の自社ビルに技術・支援部門を集約し、ソフトウェアの開発拠点を創るプロジェクトである。

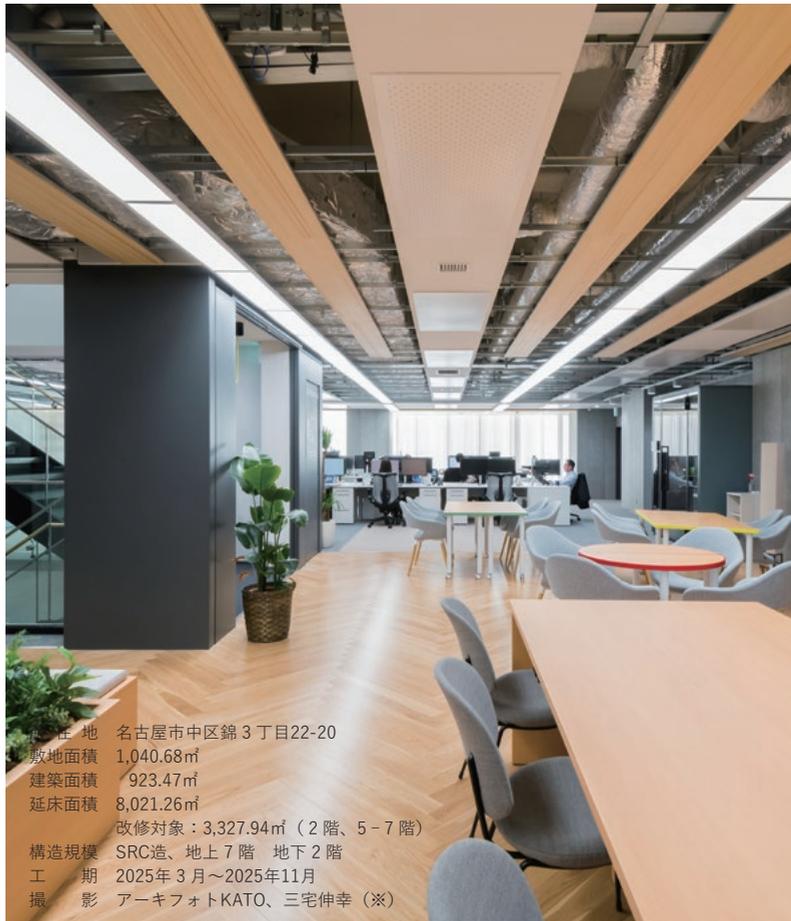
5-7階の執務エリアにおいては、スムーズな移動・連携に配慮し、階を結ぶ内部階段を新たに挿入。中間階の6階には、受付に隣接して多様なコミュニケーションの核となるカフェテリアを配置した。

ソフトウェア開発の業務は、自席での執務が過半を占める。これらの執務が快適な環境となるよう、グレアレスな導光板照明、ドラフトレスな輻射空調、ハイレゾ空間音響等、ウエルビーイングに結び付く設備機器を選定し、これらの機器を在来型LGS天井下地に1.5mモジュールでルーバー状に配置した。こうして出来るルーバー天井の光景は、現しのダクトや配管・配線が従業員の体験の学びとなるのをはじめ、LAN配管・配線に見立てたサインや、企業ロゴをモチーフとした造作家具と共に、空間全体が企業特性を表象するブランディングとなることを意図したものである。

スケルトン改修の本プロジェクトにおいては、サーキュラーエコノミーを念頭に、タイルカーペットやセメントボード等の仕上げ材は、リサイクルに特化した既製品を選定。合わせて、突板クロスや木毛セメント板等、カーボンニュートラルにも配慮した。

都心部での空地のない工事ヤード、EV・階段による限られた資材搬出入ルート、限られた工期、居ながら改修等、様々な制約がある条件にて、一般的・普遍的な構法と一般流通の既製品を基軸に、企業特性に結び付くアレンジにより、建築主固有のオリジナルなオフィスを創出した。

(三宅伸幸/安井建築設計事務所)

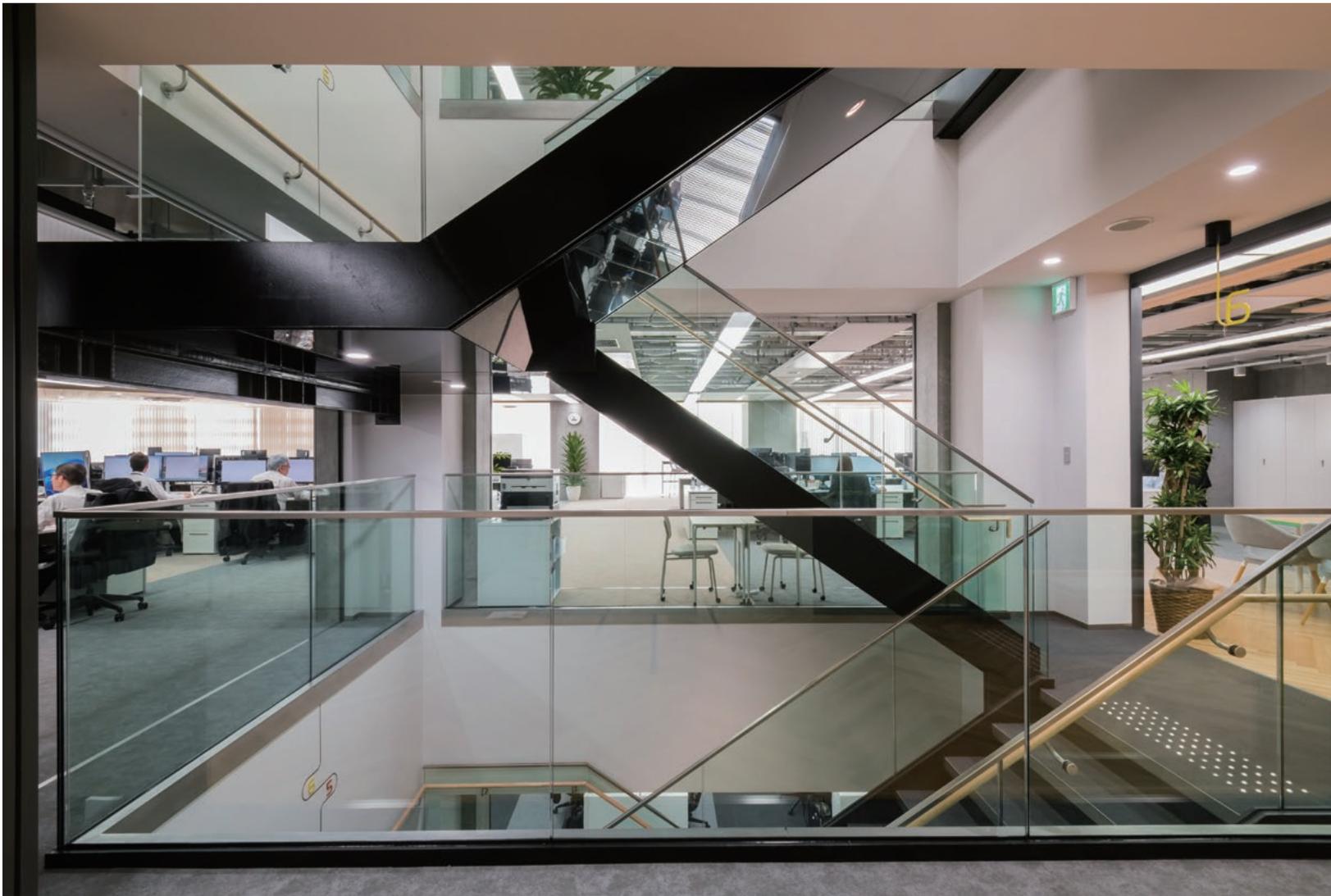


所在地 名古屋市中区錦3丁目22-20
敷地面積 1,040.68㎡
建築面積 923.47㎡
延床面積 8,021.26㎡
改修対象: 3,327.94㎡ (2階、5-7階)
構造規模 SRC造、地上7階 地下2階
工期 2025年3月~2025年11月
撮影 アーキフォトKATO、三宅伸幸 (※)

6階カフェテリアから執務エリアを望む (1.5mピッチで照明・空調を設けたルーバー天井)



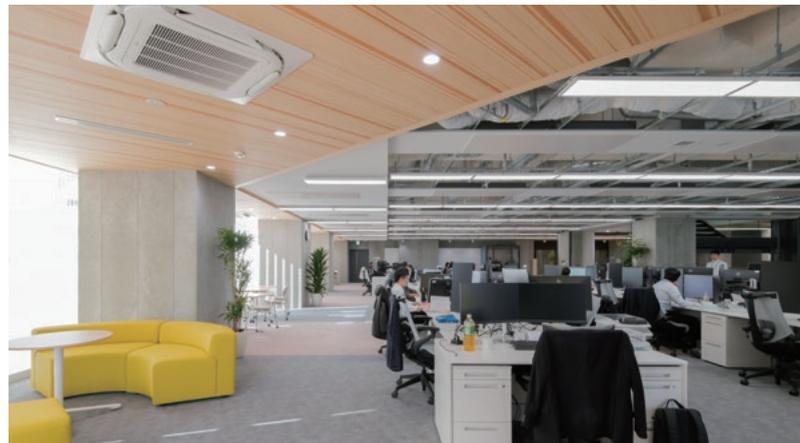
6階受付 (EVホール) からカフェテリア・執務エリアを望む



6階内部階段（ササラ・段板等を単一パーツで構成した、現地で組み立てた階段）



6階カフェテリア（企業ロゴをモチーフとした造作家具を配置）



6階執務エリア（ペリメーターのリフレッシュ・打合せコーナーに多様な家具を配置）



2階ホワイエからホール1・2を望む



EV 各階案内サイン



MWC ビクトサイン（※）



犬山市立橋五子ども未来園

建築主 犬山市
 設計・監理 安井建築設計事務所
 施工 矢作建設工業・シンエイライフJV

本園は、既存の2園を統合して新設された、犬山市で約40年ぶりとなる公立保育園である。周囲の穏やかな山並みやのどかな田園風景と調和する大らかなフラットルーフの下で、屋内外の多様な遊び・学びの場が途切れることなくつながる平屋建て園舎の計画とした。

水平基調のフラットルーフからは、建物内に光や風を導くゲートルーフがいくつも立ち上がり、その一部は展望テラスや設備危機置場といった機能も有している。景観との調和や環境との共生を尊重したシンプルながらも立体感のある外観デザインにより、ここで育つ子どもたちが楽しみやワクワクに満ちた時間を過ごすことのできる、「ヒミツ基地」のような保育園の実現を目指した。

本園では、外壁や屋根面の外断熱化、高断熱サッシ・Low-E複層ガラスの採用、自然換気システム・照明自動制御システムの導入、大容量ソーラーパネル（80kw）の設置など、様々な環境メニューをバランスよく取り入れることで、愛知県初となる「フルZEB園舎」を実現している。軒天や内装の積極的な木質化も行っており、ZEB化と合わせてカーボンニュートラルに寄与する、人にも環境にもやさしい計画を行った。

（奥村幸生、小田祐司、加藤駿一／安井建築設計事務所）

所在地 愛知県犬山市橋爪東1丁目77番地
 敷地面積 5,948.28㎡
 建築面積 2,795.17㎡
 延床面積 2,514.97㎡
 構造規模 RC造 一部S造、地上1階 塔屋1階
 工期 2023年12月～2025年2月
 撮影 海老原 一己／GlassEye inc.



園舎中央に設けた洞穴のような絵本コーナー



テラスを介して中庭と園庭につながる



田園地に建つ「ヒミツ基地」のような保育園



ゲートルーフから差し込む光や県産木材による木の温もりに包まれた遊戯室

折兼豊橋営業所

建築主 株式会社折兼ホールディングス
設計・監理 株式会社東畑建築事務所
施工 前田建設工業株式会社



所在地 愛知県豊橋市東細谷町
敷地面積 10182.00㎡
建築面積 3958.55㎡
延床面積 4713.46㎡
構造規模 鉄骨造、地上2階
工期 2025年2月～2025年11月
撮影 ㈱エスエス

外観北東面

本地区は、国道1号及び国道23号名豊道路豊橋東バイパス豊橋東インターチェンジに近接し、広域幹線道路へのアクセスに優れた場所に建てられた物流機能を持つ新社屋。本計画では、物流の迅速化と効率化を最優課題とした。将来の自動化ニーズに応じた床荷重の確保や有効天井高の確保、柱スパンは広スパン構造を採用し、保管効率の最大化・レイアウト変更に柔軟に対応できる『進化し続ける次世代型物流拠点』を構築。

物流拠点としての機能に加え、働く人の『Well-being』を重視。眺望を活かしたテラスを配置し、木質調素材・デザインを採用することで、リフレッシュを促し、人材確保に寄与する快適な職場環境を提供。作業エリアへの空調の導入により厳しい夏期の作業環境を改善。多様な人々が活躍できる施設を目指した。

屋上太陽光パネルによる自家消費型発電や全館LED照明を採用により、施設内電力を再生可能エネルギーで賄う。外壁・屋根は高断熱材の使用によりライフサイクルコストの低減と周辺環境への負荷抑制を両立させている。

敷地周辺一帯は田園風景が広がっている。外装の色彩は環境色彩ガイドラインに準拠し、低彩度のページジュを基調とし、威圧感を抑えた外装カラー（アースカラー等）を採用。周辺の田園風景と調和する景観形成を図るとともに無機質になりがちな物流施設に温かみを与える色彩計画とした。

(若園慎次/東畑建築事務所)



外観南東面



外観東面夜景



物流作業室



ラウンジ

パックススタイル稲沢センター

建築主 株式会社折兼ホールディングス
株式会社パックススタイル
設計・監理 株式会社東畑建築事務所
施工 前田建設工業株式会社



外観北東面

本地区は、国道155号を介し名神高速道路、東海北陸自動車道、東名阪自動車道及び伊勢湾岸自動車道などの広域交通網への利便性が良い立地に建てられた物流施設。敷地形状を最大限に活かし、大型車両（40ftコンテナ車等）の円滑な通行・転回が可能な配置計画とし、荷受と出荷の同時並行作業を可能とした。高度な自動化設備（ラック式倉庫）と在庫管理を最適化する空間構成を目指した。汎用性と拡張性を考慮し、十分な天井有効高（7.5m）と標準的な柱スパン（約10m×約10m）を確保。床荷重は2.5t/m²を基準とし、多様なニーズに応える計画とした。持続可能な物流拠点を実現するため、屋根面への太陽光発電パネルの設置や全館LED照明の採用、高断熱サンドイッチパネルによる空調負荷減を図り、環境負荷を最小限に抑えた。

災害時の事業継続性として、浸水対策を施した高床式設計を導入。2ヶ所の発電所からの電力供給を可能とし、災害時でも物流を止めない強靱なBCP（事業継続計画）性能を確保した。労働環境への配慮として眺望がよく、自然光を取り入れた開放的なラウンジを確保し、リフレッシュ環境を整備。外観には、金属パネルの質感を活かしたシャープなエッジを際立たせ、装飾を排除し、時代に左右されない普遍的な建築美と維持管理のしやすさを両立させている。

（若園慎次／東畑建築事務所）

所在地 愛知県稲沢市平和町
敷地面積 20647.46㎡
建築面積 7745.79㎡
延床面積 8014.17㎡
構造規模 鉄骨造、地上2階
工期 2023年1月～2024年3月
撮影 (株)エスエス



外観北東面



外観南東面



物流作業室



ラウンジ

愛知県立岡崎特別支援学校

建築主 愛知県
設計・監理 東畑建築事務所
施工 鴻池・角文特定建設工事共同企業体（建築）



外観北西面

肢体不自由の児童生徒が学ぶ特別支援学校の移転整備計画である。小・中・高の各学部を備え一貫した教育相談や支援体制を構築している。

垂直移動を少なくし、横方向への広がりを持たせた2階建てのボリュームは水平ラインを強調した伸びやかなデザインとし、分節化することにより子どものスケール感に近づけた。

大型バス5台が並列駐車できるピロティ形状の広いバスステーションを昇降口前に配置し、天候に左右されることなく車椅子や補装具を利用する児童生徒がスムーズに乗降できる環境を実現している。大型バスと一般車は動線を分離し、それぞれ一筆書きで運用できるようにしたことで、スムーズで安全な車両動線としている。

グラウンドを整備しないため、屋内の体育館、プレイルームとの一体利用ができる屋外活動スペース設けており、一人一人の特性に応じて活動エリアを自由に選べる配置としている。

コミュニティモールを学校の動線の軸とし、そこから各教室へ移動する明快な動線計画と、行き止まりがない回遊性を確保することにより、移動の円滑化と教職員の連携強化を図るとともに、生徒児童が安心・安全に利用できる学校を目指した。

特別支援教育の学びの場としての役割を担い、充実した学校生活となるよう願っている。

(寺尾達也、谷口ひとみ/東畑建築事務所)



所在地 愛知県岡崎市美合町
敷地面積 14,495.91㎡
建築面積 6,135.92㎡
延床面積 9,234.30㎡
構造規模 鉄骨造、地上2階
工期 2022年10月～2024年2月
撮影 (株)エスエス



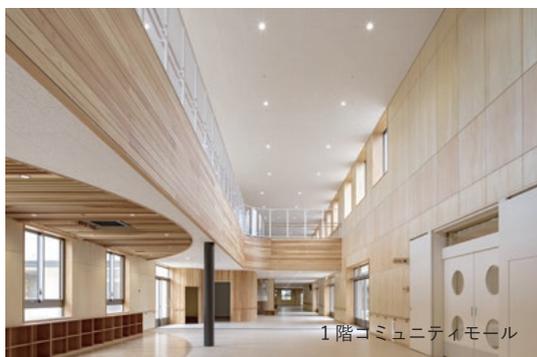
外の広場



バスステーション



1階プレイルーム



1階コミュニティモール



体育館



知多信用金庫図書館前支店

建築主 知多信用金庫
設計・監理 伊藤建築設計事務所
施工 沢田工務店

市立図書館・博物館に近接し、半田市内でも文教地区にあたるエリアに立地する支店の建替計画である。

雁行した形状の敷地を最大限に活用するため、建屋を敷地の中央寄りに配置し、駐車場は建屋を挟んで東西に分割する配置計画とした。東西いずれの方向からもアクセスしやすいよう、両駐車場を繋ぐ全長約18mの通路状のエントランスホールを計画し、その中にATMコーナーを配置した。さらに、エントランスホールの中央には展示用のガラスケースを設け、地域の作家の作品を紹介するギャラリーとしての機能も持たせた。

本支店は平屋建でワンフロア完結型のプランとなっているが、ロビー空間は自然の光や風を取り込むため中央部の天井を折り上げ、ハイサイドライトを計画した。ハイサイドライトの外周部にはアルミ製のエキスパンドメタルによるスクリーンを設け、直射日光を遮りながら拡散した柔らかい光を内部空間に届けている。また、エントランスホールにもトップライトを設けて自然採光を確保し、閉鎖的な印象にならないよう配慮している。

(富田昌志、松本拓也／伊藤建築設計事務所)

所在地 愛知県半田市桐ヶ丘四丁目
敷地面積 1,515.89㎡
建築面積 541.03㎡
延床面積 516.93㎡
構造規模 S造、地上1階
工期 2024年1月～2025年8月
撮影 センターフォト



ハイサイドライトのあるロビー



ギャラリーの機能を持つエントランスホール



公益社団法人愛知県看護協会新会館

建築主 公益社団法人愛知県看護協会
設計・監理 伊藤建築設計事務所
施工 名工建設

所在地 愛知県名古屋市中区大曾根三丁目 1706-2、1707、1708、1709
敷地面積 1,374.03㎡ (415.64坪)
建築面積 1,019.16㎡ (308.30坪)
延床面積 4,846.29㎡ (1,466.00坪)
構造規模 鉄骨造 地上5階、地下1階 耐火建築物
工期 2023(令和5)年1月~2025(令和7)年5月
撮影 トロロスタジオ

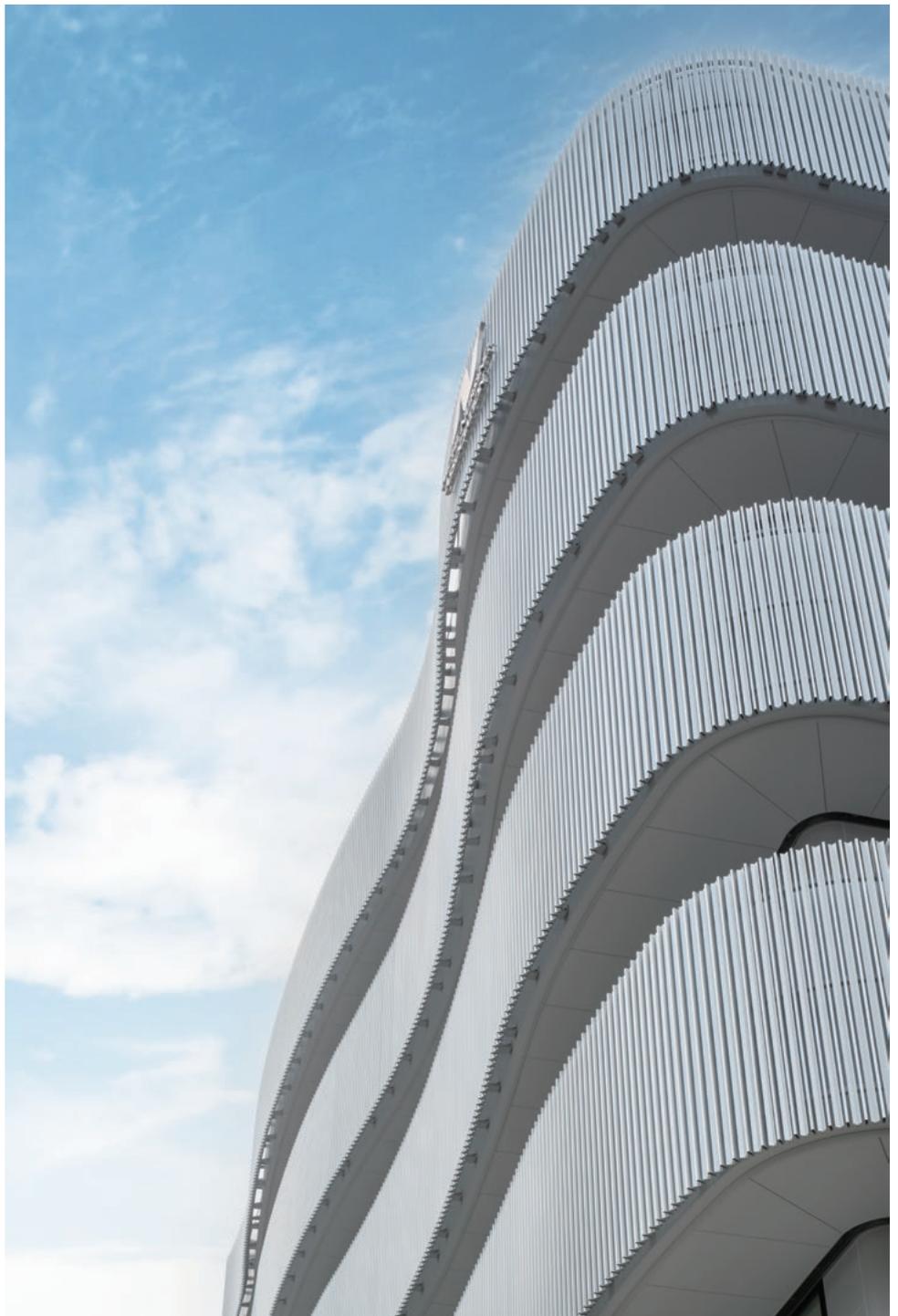
旧会館が約半世紀を経て老朽化が進んだことに加え、会員数の増加に伴って研修室などが手狭になったことを受け、新会館建設を計画することとなった。コンセプトは、「出会いや学びを通し、全ての看護職が感動を分かち合い、チャレンジ精神を持って、自らの人間性を高め、県民の健康と幸福に繋がる看護の心を発信する場所である」とし、主要な言葉の英語の頭文字をとり、「e-AICHI」と名付けた。この理念のもと、看護の心を発信し、人と人との出会いや感動を分かち合える“つながり”の空間を目指して設計した。

外観は周辺環境との調和を前提としつつ、曲線による柔らかなフォルムで存在感のあるデザインとした。北側ファサードには、各階で曲率を変えたアルミルーバーを計画し、柔らかさと包容力を表現した。街並みに埋もれない個性を持ちながら、公共性を備えた外観となるよう配慮した。また南側テラスには中高木を植栽し、癒しの効果を兼ね備えた緑豊かな外部空間を創出した。

伊藤建築設計事務所 犬飼高嘉 稲垣志聞 鈴木里美



外観写真（北側）



ルーバー部分写真



ドローン写真



外観写真（南側）

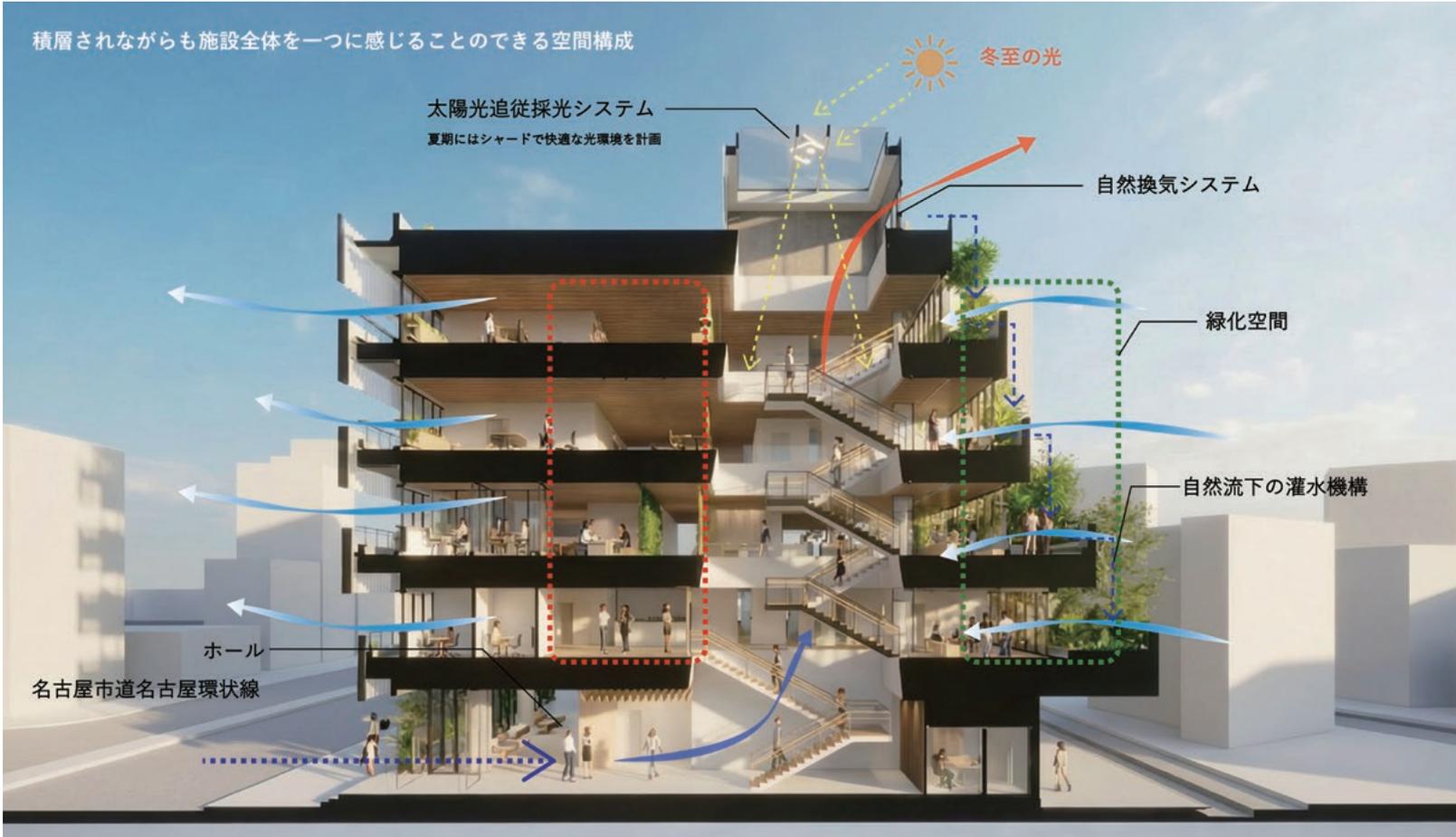


外観写真（夜景）

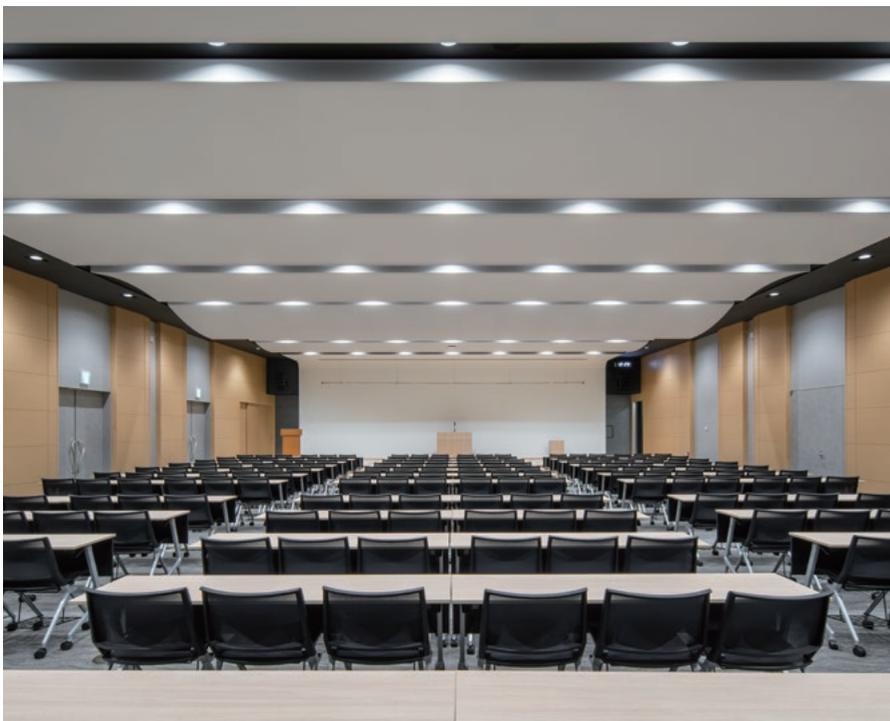
建物中央には吹抜階段を設け、上下階をつなぐ動線の核とすると同時に、自然光が降り注ぐ明るく開放的な空間をつくった。階段の周囲には屋外テラスやラウンジを設け、訪れる人々にやさしく居心地のよい場所を提供する。学びの前後に生まれる滞在の時間や偶発的な出会い、感動の共有を支える“居場所”としての質を重視した。環境配慮の面では、屋根にトップライトと太陽光追従採光システム、換気窓を設置し、昼光利用と自然換気を組み合わせた室内環境を実現した。時間帯や季節の変化に応答しながら、快適性と環境性能の両立を図った。構成は、1階に多目的イベントホール、2階に協会事務室、3階にライブラリーとナースセンター、4・5階に研修室・実習室・シミュレーションセンターを配置した。学習・研修機能に加えて、交流と情報発信の機能を重ね合わせ、多様な活動を受け止める立体的な構成とした。各階には明確なコンセプトを与え、設計・内装においても統一感と階ごとの個性の両立を意識した。また、防災・BCPの観点から非常用発電機を設置し、耐震性能を有する構造体とすることで、災害後の業務継続や一時避難場所としての対応力を確保した。



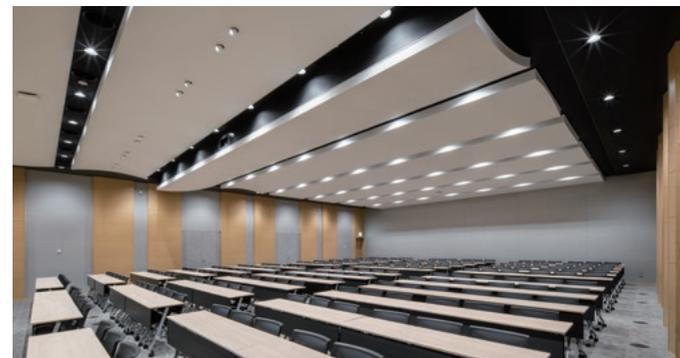
太陽光追従採光システム



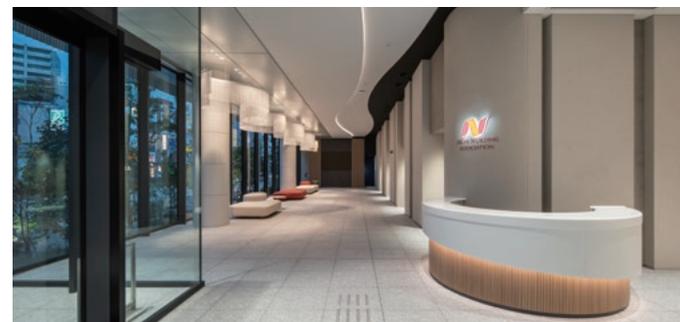
断面パース



ホール



ホール



エントランス



道路側緑化スペース



ライブラリー半屋外スペース



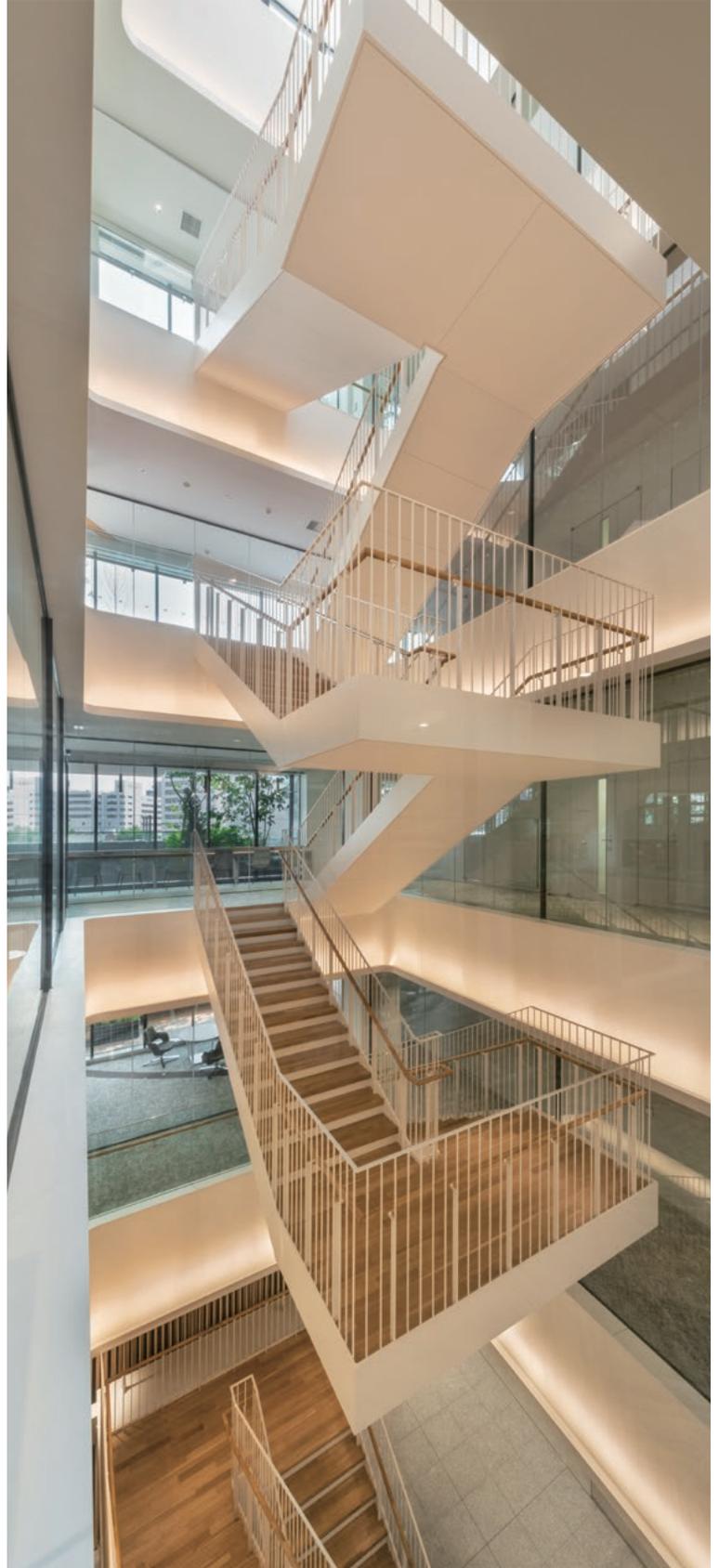
ライブラリー



5階ラウンジ兼研修スペース



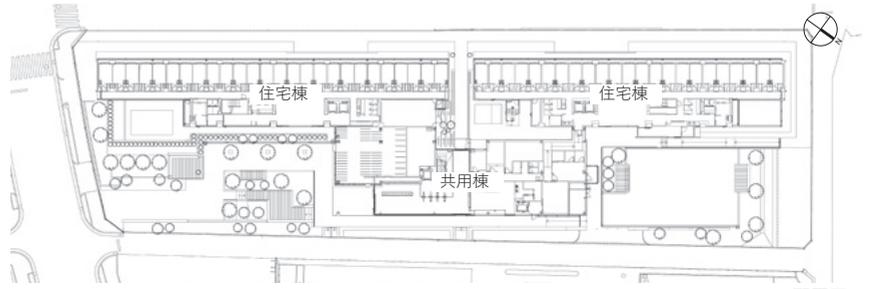
エレベーターホール



階段室

愛知製鋼白扇寮

建築主 愛知製鋼株式会社
設計・監理 竹中工務店
施工 竹中工務店



配置図

若手社員を中心とする企業寮の計画である。学生から社会人へと環境の変化が大きくなる生活の中で、集まって住むことで豊かに所有できる共用スペースと周辺環境とつながる前庭を設けた。工場が多く外部環境の自然の豊かさを感じづらいエリアにおいて、緑あふれる堀のない開放された前庭を設け、周辺住民が利用できる公園のような居場所を用意した。シフト勤務制の昼夜問わず人の出入りがある企業寮として、生活風景や明るさが、街ににじみでる施設となっている。

(吉田 敦/竹中工務店)

所在地 愛知県東海市
敷地面積 4,887.07㎡
建築面積 1,533.94㎡
延床面積 5,551.57㎡
構造規模 RC・S造、地上7階
工期 2023年10月～2025年2月
撮影 彦坂武徳/エスエス名古屋



地域にも開放された緑豊かなランドスケープ

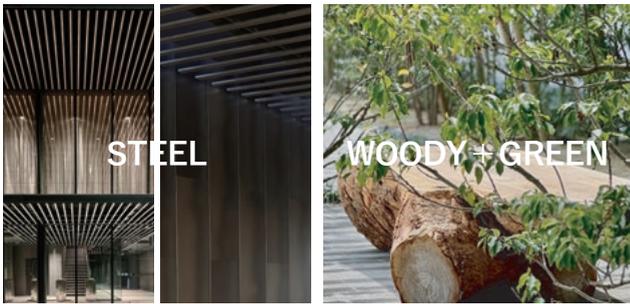


生活に豊かさをうむ インテリアマテリアル

企業家としての生活の豊かさを育む材料計画を考えた。製鉄企業のブランディングを兼ねて素の姿で過ごす場所に素地の鉄質材を用いた。空間体験の中でも印象深い、大きな天井面や長い壁面に反射感を持ち込むことで内部でありながら外部空間にいるような屋外感覚をつくり、公園の一部にいるようにラフなコミュニケーションを促す空間を目指した。一方、人が触れたり長居したくなる場所としての鉄質のネガティブさを対比的に木質と緑化でフォローした。無機質空間の中の有機的な雰囲気が、温かさを演出し生活の中で長い時間を過ごす場所として快適さをつくりこんだ。

時間や自然の変化を映す鉄 心地よさに触れる 木材と緑

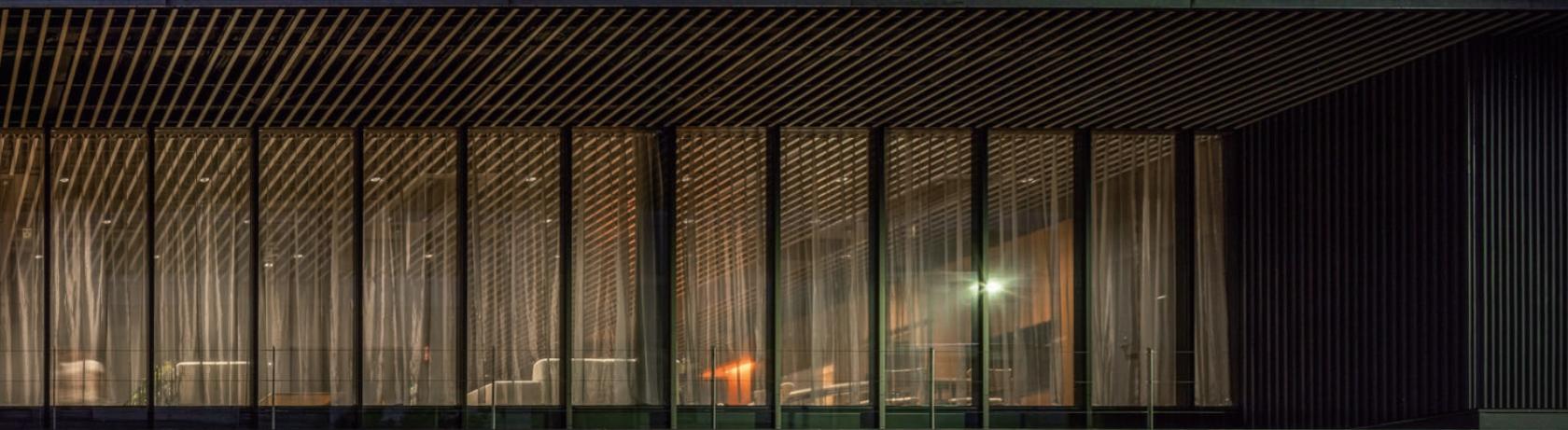
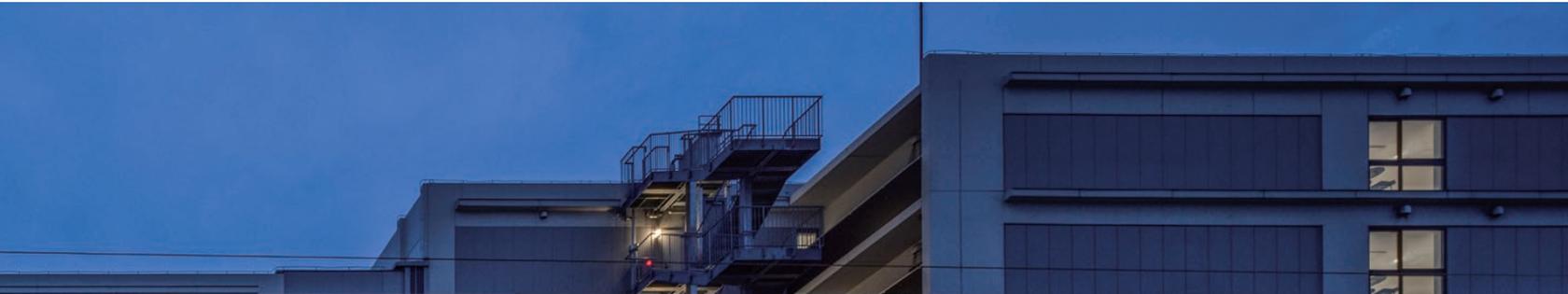
ステンレスや黒皮鉄と 無機質な鉄材と対比的に用いる
いった鉄の素地表情を生 ことで居場所としての温もりや
かしながら一日を通して 優しさをつくり出す材料
周辺の情景を映す材料



コーポレートカラーと企業の生業である鉄素材を取り入れたゆとりあるコミュニケーション空間



金属質の反射感を生かし周辺の自然環境の心地よさをインテリアに引き込む社ルート（エントランス）



街に昼夜をとわずシフト勤務の寮生の生活や賑わいがにじみ出るファサード

KOSAI Battery Park 新居第3工場

設計・監理 株式会社大林組名古屋支店一級建築士事務所
施工 大林組・トヨタ T & S 建設共同企業体



所在地 静岡県湖西市新居町内山浜名湖西岸土地区画整理事業2-187街区
敷地面積 195,895.17㎡
建築面積 65,269.23㎡
延床面積 114,763.76㎡
構造規模 S造、地上2階
工期 2023年10月～2025年3月
撮影 (株)エスエス

電気自動車用のバッテリーを量産する工場の計画である。

■コンセプト：自然とのグラデーション

3期目となる本プロジェクトは第1、2期工場の自然（森の緑）を共用部へ滲ませる「グラデーション」のコンセプトを継承し、より広域な地理でグラデーションを読み解き、浜名湖を望む第3工場は「湖」を、最もヒューマンスケールで、工場の玄関口となる厚生棟は「大地」をテーマに其々のデザインへと昇華した。

■工場棟：グラデーションが単調な移動空間に彩りと変化を与える

工場の移動空間は単調になりがちである。2階の130mを有する共用廊下は水がゆらぐように素材を内/外に跨がせることで境界を曖昧にし、湖との繋がりを強化しつつ、時間・天候による空間の変化を楽しむことができる。外部化したテラスは新幹線からの高速で流れる視線に耐えるため、複雑なデザインではなく、シンプルなりニアなデザインを追求した。1階の280mを有する共用廊下は地理的なグラデーションと地域生態系・カラーをリンクさせたサインにより、空間に彩りを与え、愛着心を育む仕掛けを施した。装飾で終えず、安全対策に寄与するデザインとし新たな価値を見出した。

■厚生棟：隆起する大地のような有機的な建築

新居工場の玄関となる厚生棟では「大地」というテーマを建物形状からサイン計画に至るまでスケールを横断して表現した。外部からも各工場棟からもアクセスしやすい三角形の敷地に平屋建ての建物を配置。敷地形状を活かし、隆起した大地の稜線のような線形の平面計画とする事で、3つの異なる機能が独立して運営を行えるゾーニングと豊かな外構計画を実現した。

(齊藤克弘、高橋春那、豊島浩太郎、三田雄貴/株式会社大林組)



厚生棟：工場群に向けたピロティとランドスケープ

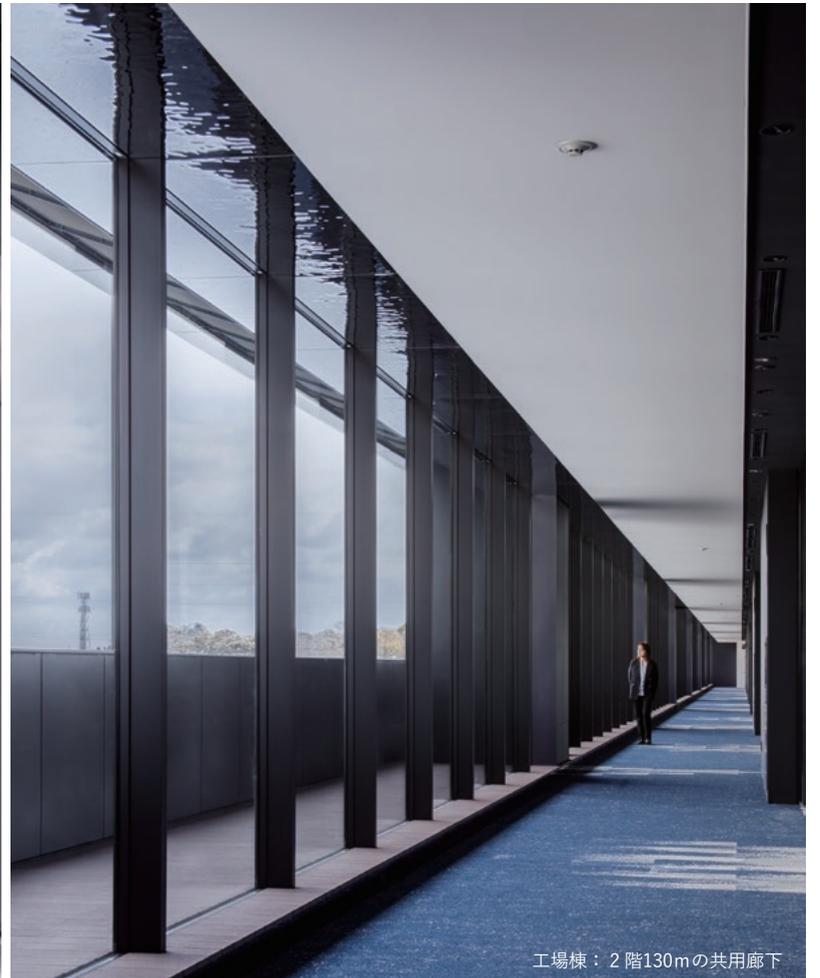


厚生棟：従業員のための食堂空間

工場棟：北面メインファサード



工場棟：1階280mの共用廊下



工場棟：2階130mの共用廊下

川口組テクノセンター

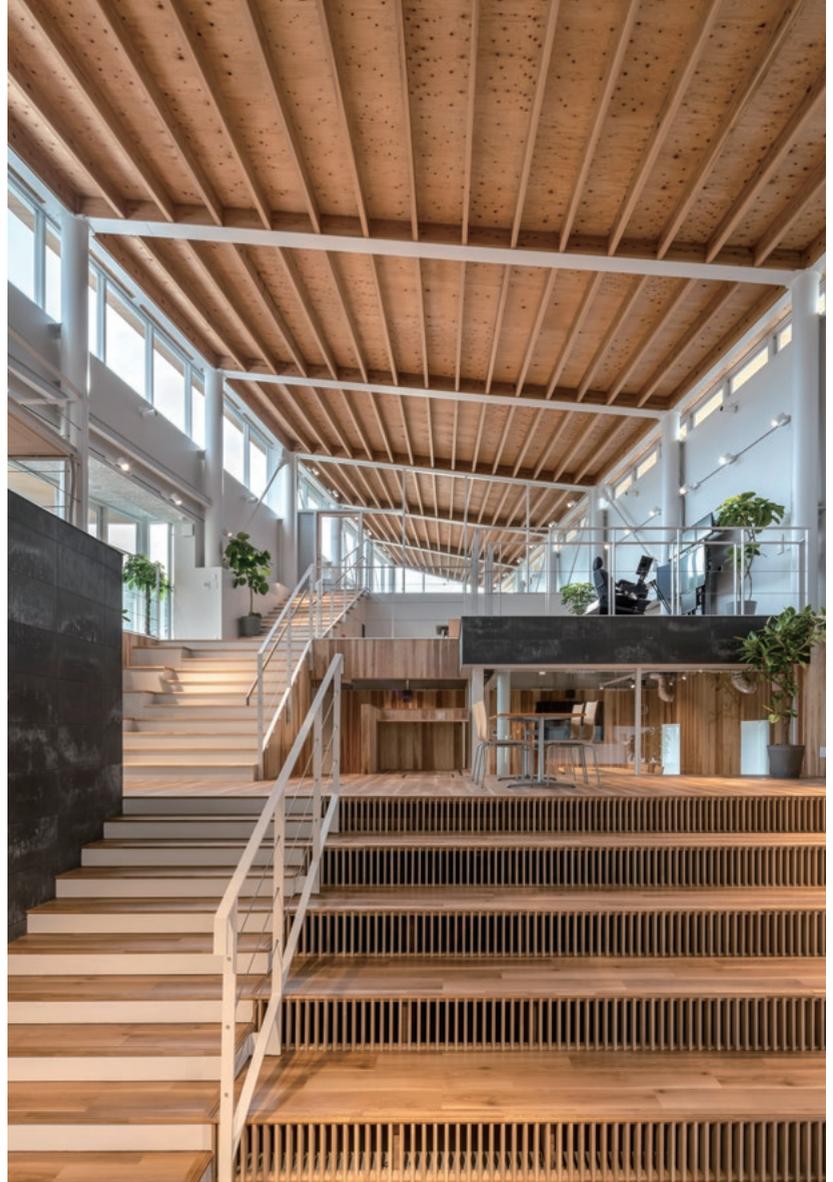
建築主 株式会社 川口組
設計・監理 withU architects 一級建築士事務所
施工 株式会社 中村組

愛知県瀬戸市に建てられた事務所・重機整備・資材倉庫の複合施設は、土木管理を生業とする技術開発と整備の拠点である。敷地を重機が自在に走行するため、1階をセットバックし、2階を大きく張り出し、まちに向かって力強い表情をつくり出している。鉄骨と愛知県産スギを組み合わせた大屋根は、10.8mのキャンチを合理的に実現しながら、木の温もりを外へと滲ませ、まちに大らかな景観をもたらしている。自然の風景の中に住宅と工場が肩を並べてきた瀬戸の地。その記憶を受け継ぎながら、「木を魅せる」建築として新しい文化を刻む。無機質な構造の力強さと、木が醸し出すやわらかな表情が共存し、この地に新しい風景を刻んでいる。

(鵜飼浩平 / withU architects 一級建築士事務所)



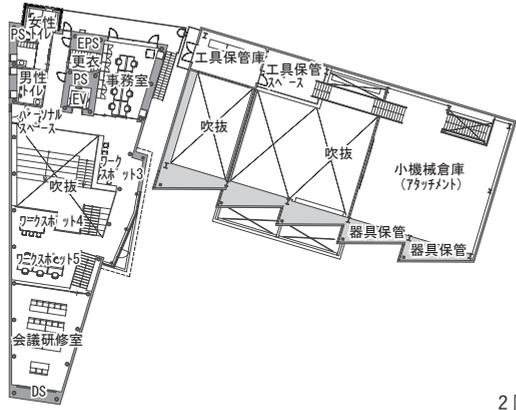
所在地 愛知県瀬戸市
敷地面積 2,514.46㎡
建築面積 972.21㎡
延床面積 1,436.59㎡
構造規模 S造（一部木造）、地上2階
工期 2024年8月～2025年7月
撮影 ToLoLo studio



事務所内観：建物の先端に向けてねじれのあるシェル構造の屋根が有機的に空間を包む



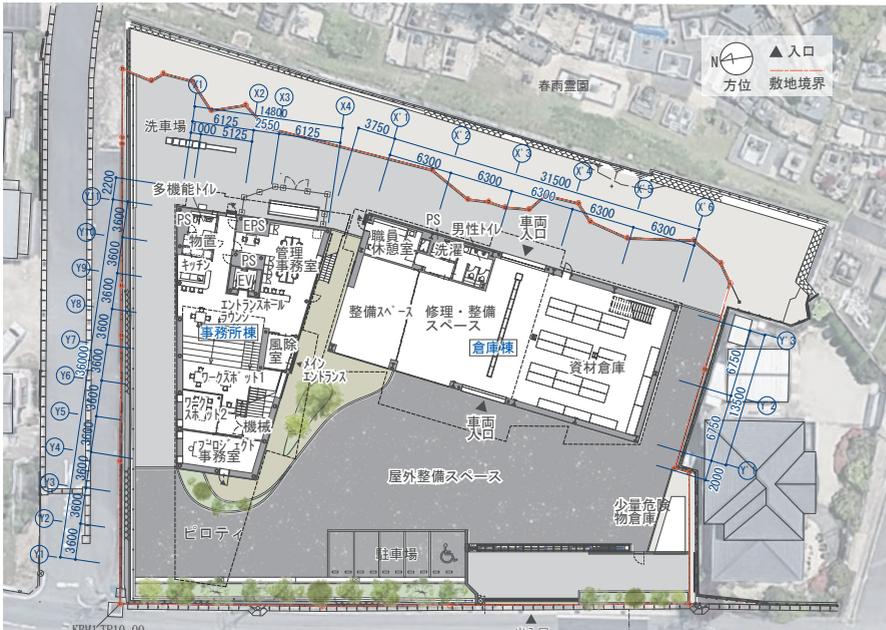
南側近景：木の架構と軒裏の表情が、まちにやさしい陰影を描き出す



2階平面図 S=1/750



事務所内観：段々構成のワークスポットを木屋根がおおらかに包み込む



1階平面図 S=1/750

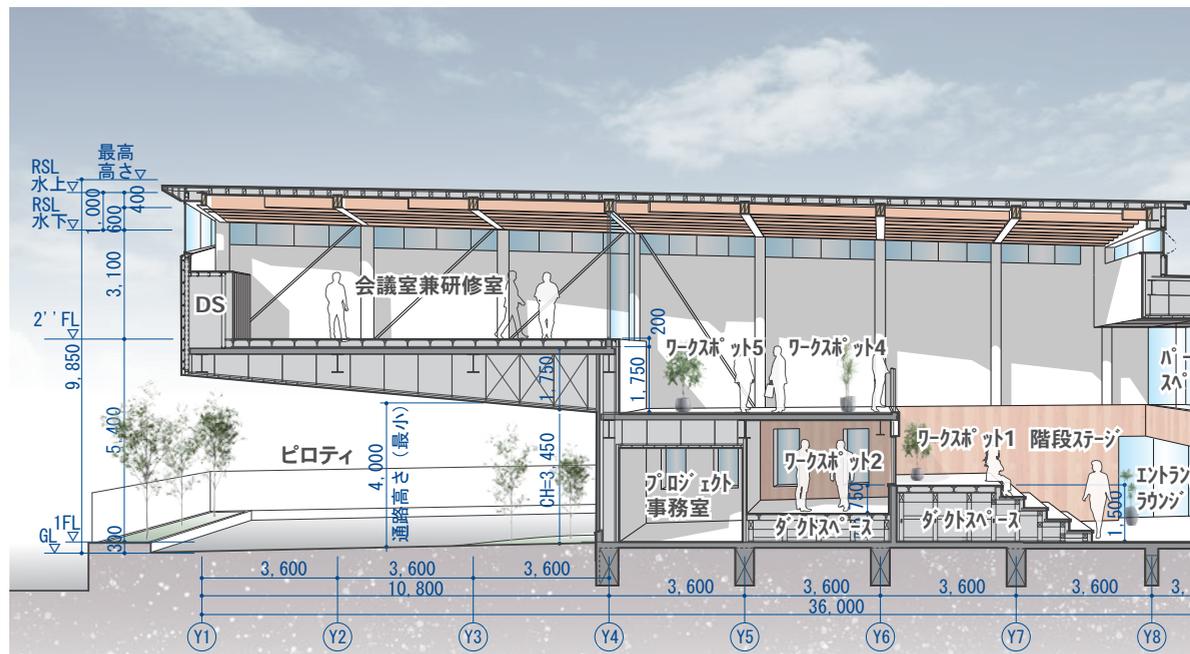


倉庫内観：ハイサイドからの自然光で素材感を魅せる立体的な空間

重機の走行に支障をきたさない高さにキャンチレバー状の床を設け、そこから1階へとスキップフロア形式でワークスポットを連続させている。視線の高さを段階的に変化させることで、空間を緩やかに分節しながらも全体としての一体感を確保し、社員同士の関係性が自然に育まれるオフィス空間を構成した。技術開発における議論の場として、シチュエーションに応じて選択可能な多様な居場所が、社員の創造性を引き出していく。



西側近景：力強い構造がまちに動きをもたらす



断面図 S=1/200

CREDO滋賀竜王

建築主 滋賀竜王特定目的会社
設計・監理 西松建設一級建築士事務所
施工 西松建設中部支社





外観北西面 鳥瞰

本施設は名神高速道路「竜王IC」至近に位置する3階建てマルチテナント型物流施設である。近畿・中部・北陸の中間地点という地理的優位性を生かし、まとまった台数のトラック待機場やドライバー専用休憩室を設けるなど物流結節点としての機能性を重視した設計とした。倉庫エリアは最大10テナントに対応した汎用性の高い設えとし、スロープを使って1、2階の各バースにトラックが接車できる計画としている。

高速近傍かつ竜王町の玄関口である竜王ICに隣接しているという立地条件から、シンボリックな外観となるよう、外壁はCREDOコーポレートカラーの青（信頼構築）・紫（事業創造）・緑（環境配慮）の3色をボーダー状に配し、高速道路からも一目でそれとわかる印象的なデザインとした。また、建物内部に来訪者を導くようゲート状に構成したエントランスは緑豊かな近隣景観と物流施設の先進性を掛け合わせた空間とした。

また、本施設で働く方々が快適に過ごせるよう、眺望のよい最上階に「ツリーハウス」をデザインモチーフとした80席のカフェテリアを設置したほか、「クレドの森」と称した屋外親緑空間を設けている。「クレドの森」についてはかまどベンチや非常用コンセントを計画し、BCP面も重視した設計とした。

環境面では太陽光発電システムの導入や高効率設備機器の採用により、CASBEE認証AランクおよびBEI=0の「ZEB」を達成している。

（片山研、鉄川与志雄、山内悠斗／西松建設一級建築士事務所）

所在地 滋賀県蒲生郡竜王町大字小口字ノ川原1038番 1外14筆

敷地面積 61,794.04㎡

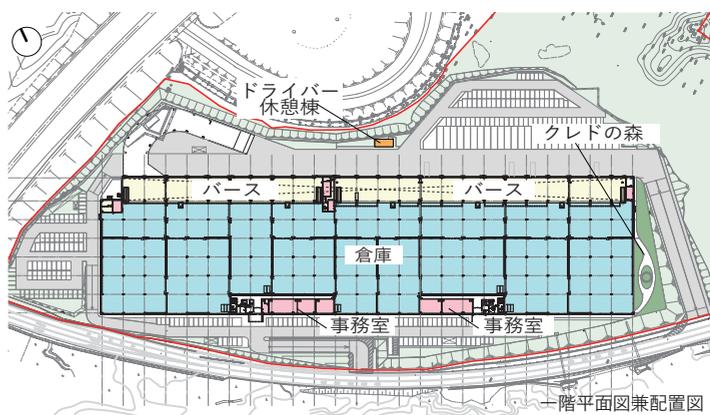
建築面積 22,701.15㎡

延床面積 63,928.98㎡

構造規模 S造、地上3階

工期 2024年4月～2025年6月

撮影 (株)エスエス



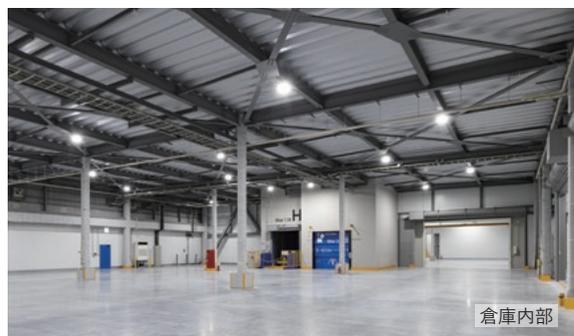
一階平面図兼配置図



カフェテリア



エントランス



倉庫内部



パークコート覚王山山門町

設計 ㈱竹中工務店
施工 ㈱竹中工務店

所在地：愛知県名古屋市千種区山門町1丁目37番
敷地面積：1,886.22㎡
建築面積：809.81㎡
延床面積：5,778.21㎡
構造規模：RC造、地上9階、地下1階
工期：2023年6月～2025年5月



エンパイヤ自動車株式会社 名古屋営業所

設計 ㈱伊藤建築設計事務所
施工 太啓建設㈱

所在地：愛知県名古屋市昭和区高辻町13-20
敷地面積：1,922.13㎡
建築面積：1,194.98㎡
延床面積：2,226.60㎡
構造規模：S造、地上2階
工期：2024年4月～2025年3月



学校法人愛知児童文化学園 ひらしば幼稚園

設計 withU architects 一級建築士事務所
施工 ㈱竹内工務店

所在地：愛知県豊田市
工事内容：改修
延床面積：1,820㎡
構造規模：RC造、地上2階
工期：2021年7月～2022年3月
写真撮影：ToLoLo studio



農事組合法人東濃ミートセンター 新本社工場

設計 安井建築設計事務所
※設計協力 熊谷設計
施工 宮島建設㈱
電気・空調：ミリオン電気㈱
衛生：五十嵐工業㈱

所在地 岐阜県中津川市かやの木2679-1 他26筆
敷地面積 10,079.89㎡
建築面積 2,303.58㎡
延床面積 2,435.68㎡
構造規模 S造地上2階建
工期 2024年6月～2025年10月

特集 東海支部

「東海の建築と社会 新しいミカタ」

昨年の万博開催や政権交代を背景に、東海地区でも「成長志向」と「地域主導」の機運が確かな広がりを見せています。投資と人材が域内で循環し、産学官民の連携によるプロジェクトも着実に具体化してきました。加えて、私たちが共有したい近年の社会変化を四点挙げます。第一に、人間中心への転換です。快適さや回遊性、余白、滞在時間の質といった身体で感じる体験価値が計画目標として重みを増し、対象は建築から都市スケールへと広がっています。第二に、多様性と包摂（D&I）が企画から運用までの前提となり、建築計画へ具体的に反映される局面が増えています。第三に、シミュレーションとAIの実用が環境影響や感覚的要素の可視化を後押しし、関係者が同じ前提で議論を始めやすくなりました。第四に、省エネ適合義務化が「我慢の省エネ」から脱し、健康・安全・運用価値までを初期段階から統合的に検討する実務を一般化させつつあります。

こうした変化を、私たちはどう自分たちの「見方（観点・価値観）」に取り込み、建築文化を育てる「味方（仲間）」へと変えていけるか。それが本特集「東海の建築と社会 新しいミカタ」の出発点です。

特集Ⅰは、創立65周年を起点に次世代の活動を見据える五か年計画の取り組みを紹介します。東海の建築と社会の間にある魅力を「まだ見ぬ索引」として掘り起こし、当地区の建築業界にまだ見ぬミカタを集める試みです。

特集Ⅱは、若い力の実践に光を当てて、変化し続ける職能や協働の可能性を提示します。

特集Ⅲでは、都市・地域・まちの記憶を手がかりに、建築が人と場所をつなぎ直す具体的プロセスを追い、新しい建築と社会の関わりを報告します。

「東海の建築：居心地」では、新しい切り口で、日常を心地よくする設計の実例を示します。

ミカタを増やすことは、視点を増やし、仲間を増やすこと。本号を通じて、東海の建築と社会の今を前向きに捉え、皆さまと共に次の一步を考えていきたいと思えます。

（東海支部特集特別編集委員会 塩田哲也）

■特集Ⅰ 青年委員会

納まり切らない建築と社会への想い

久保久志

have not been, INDEX

～日本建築協会東海支部65周年記念事業—建築と社会の再接続に向けて～

日本建築協会東海支部青年委員会＋おどり場

■特集Ⅱ インタビュー

建築の新しいミカタ～東海地域の若手がみる「これから」～

今和泉拓、大木宏隆、斉藤孝治、山口智三、山田淳司、西田英央

■特集Ⅲ 建築がつなぐ都市、地域、まちの記憶（第9回）

名古屋市・「コトづくり研究所」

中井孝幸

常を彩る仕組みから考える商店街再生 ～コトづくり研究所という実践～

植村康平

みんなで、たのしいコト、あたらしいコト、おいしいコト、したいコト、をつくる「コトづくり研究所」

橋本雅好

まちをつなげる多機能融合型の居場所づくり ～「コトづくり研究所」～

中井孝幸

東海の建築：居心地

SLOW ART CENTER NAGOYA／安井建築設計事務所、愛知大学豊橋キャンパスCenter Bldg.／日建設計、

愛知製鋼白扇寮／竹中工務店、NGK Collaboration Square DIVERS／日建設計、

SOUPタウン／ナノメートルアーキテクチャー・withU architects一級建築士事務所

納マリ切らない建築と社会への想い

東畑建築事務所名古屋オフィス設計室主管 久保久志

■納マリ倶楽部での活動がもたらしたもの

「同世代の設計者が集まって建築の話をもっとしたいよね」という居酒屋談義からはじまり早や8年。2018年から、日本建築協会に所属する東海圏の当時30代の組織設計事務所・ゼネコン設計部のメンバーが集まって、青年委員会内に「納マリ倶楽部」という場をつくり活動を続けてきました。

コロナ禍を挟みながらも、オンラインとリアルを併用し、見学会や意見交換を重ねてきました。同じ設計者という枠組みでありながら、立場の違うメンバー。それぞれの竣工したプロジェクトを見学し合う場では、お互いにちょっとした緊張感もあって、同じ職場とはちょっと違う、ざっくばらんに批評し合える環境はとてありがたいものでした。今思い返すと、同じ時期に、同じような環境で設計に向き合う仲間と活動を共にすることで、自分の立ち位置や思考を問い直す時間を持つことができたし、その相対化のプロセスこそが、設計を続けるための大きな支えの一つだったと感じています。

■新たなチャレンジへのパートナー探し

8年が経ち、私たちは設計者であると同時に、組織や社会の中で、どう振る舞うかを問われる世代になりました。集まって話す話題も、これまでの建築の良し悪しといったものだけではなく、組織の中での人材育成やマネジメントの難しさ、自己のプロジェクトの社会的な意義や価値についてなど、建築単体にとどまらないより広い視野が求められる話題が多くなり、その立場と役割の変化を感じています。

今回、日本建築協会東海支部65周年事業という節目のタイミングに関われるということは、決して偶然じゃないと感じています。今だからこそ、もう一度少し引いたスケールの視点で、自分たち自身と、そして建築と社会との関係を考える場をつくりたいと思いました。

新たなチャレンジに際し、納マリ倶楽部のメンバーだけではなく、建築業界やその周辺分野に広く精通し、イベント開催やHPなどプラットフォームづくりに実績のある外部デザイナー「おどり場」の皆さんと協働し青年委員会を中心として進めることとしました。「おどり場」の皆さん（桂川大・小出一葉・春口滉平（山をおりる））は、建築・彫刻・映像・写真・編集・デザインなど領域を横断した主体で構成されたクリエイター集団であり、不確かな風景の現在を模索する活動を精力的に続けられており、まさに今回の私たちが目指す建築と社会の関係を改めて考え直すパートナーに適任でした。

■建築と社会との関係を改めて考え直すこと

昨年の秋頃より、65周年事業企画はもちろん、これからの青年委員会（ひいては日本建築協会東海支部）の目指すべき方向性も合わせて考え

るミーティングを重ねてきました。最初のミーティングで出たメンバー間共通の想いが、「建築は社会の要請に応える存在でありながら、議論は業界内に閉じがちになり、（私たち自身への自戒も込めて）私たちの活動は社会に届いているだろうか」といった問いかけでした。特に65周年事業企画では、建築と他分野を横断的につなぐような、業界内外の人々にも開かれた対話と体験の場を提供し、建築と社会との関係を考える取り組みを始動していきたいと考えています。

さらに、日本建築協会東海支部の強みと課題についても改めて考える機会になりました。強みとしては、規模や社会的意義や価値の大きな建築へのコネクションがあること、設計事務所やゼネコン、各種メーカー等幅広い横のつながりがあること、会員に大学が入っていることなどが主な意見でした。課題については、協会の活動が見えにくく会員がメリットを感じにくい状況にあること、イベントがアーカイブ化されておらず、協会内外へのアピールが弱いこと、建築にルーツがある人との繋がりに偏りがちであること、協会の会員属性に偏りがちで学生会員が少ないこと、様々な就職先の選択肢があることを見せられていないことなど内容は多岐に渡りました。次頁以降では、これらの議論を踏まえた具体的な企画提案を行います。会員の皆さんと共に、『建築と社会との関係を改めて接続することは可能だろうか』、このいまだ答えのない旅に出かけたいと思います。



メンバーでのミーティングの様子



くぼ・ひさし

1980年 奈良県生まれ/2005年 三重大学大学院修了後、同年 東畑建築事務所入社/現在 同社設計室主管/愛知工業大学・名城大学・愛知淑徳大学・高知林業大学学校にて非常勤講師

have not been, INDEX

～日本建築協会東海支部65周年記念事業—建築と社会の再接続に向けて～

日本建築協会東海支部青年委員会+おどり場

■はじめに「建築と社会」の現在地を問い直す

「建築と社会」—この言葉は、日本建築協会の機関誌の名前であると同時に、私たちが108年にわたって問い続けてきた根源的なテーマでもあります。

かつて建築は、社会のさまざまな要請に応え、人びとの暮らしや都市のあり方を形づくる存在でした。建築家や建設に携わる専門家たちは、社会の課題に向き合い、その解決策を空間として提示してきました。しかし今日、建築と社会の関係性は、かつてないほど希薄になりつつあるのではないのでしょうか。

建築がコンテンツを格納する単なる「箱」として扱われることが増え、建築をめぐる議論は業界内に閉じたものになりがちです。一般の人びとが建築の意義や魅力に触れる機会は限られ、私たち建築団体の活動も広く届きにくい状況にあります。

こうした現状を踏まえ、日本建築協会東海支部は65周年という節目を迎えるにあたり、あらためて「建築と社会」というテーマを正面から掲げ、建築と社会の再接続を試みる新たなプロジェクトを始動します。

それが「have not been, INDEX」です。



日本建築協会『建築と社会』Vol.31 (1951)

■「have not been, INDEX」とは何か

●プログラム名の由来—「いまだ経験していない」という姿勢

「have not been」は、英語の現在完了形で「過去から現在までに継続して経験されていない状態」を表します。「have not been + 過去分詞」として用いられ、「いまだ～されていない」という意味を持ちます。

わたしたちは、これからの建築と社会のありうべき関係性を、まだ経験していません—そのように仮定してみましょう。

その可能性を、複数の行動をとおして模索し、アーカイブし、新たな経験を生成していかなければなりません。このプロジェクトは、まさにその挑戦の出発点となるものです。

●5か年計画の複合プログラム

「have not been, INDEX」は、単発のイベントではありません。2030年までの5か年計画として構想された、複数種類のプログラムを組み合わせた複合的な企画です。

「建築と社会はまだ接続されていない」—この仮定のもと、年2～3回の頻度でさまざまなプログラムが企画されます。各プログラムは「have not been」を冠し、それぞれのテーマにあわせて「まだ経験されていない未来」を描くものとして展開されます。

たとえば、以下のようなプログラムが想定されています。

- have not been TALKED (まだ対話していない)—シンポジウム
- have not been (Re)PRESENTED (まだ表象していない)—展覧会
- have not been FORMED (まだつくっていない)—ワークショップ

これらのプログラムは、建築と社会のありうべき関係性を知り、実践するための「インデックス (索引)」として機能します。5年間の活動とおして蓄積された知見は、共有可能なアーカイブとして形成され、プロジェクト終了後もAAJのプレゼンスを保持し、建築と社会を接続するプラットフォームとして継続的に機能することを目指します。

■なぜ今、AAJがこのプロジェクトに取り組むのか

●課題認識—タコツボ化する建築業界

近年、建築と社会の関係性は希薄になりつつあります。

かつて建築は社会の要請に応える存在でした。都市の発展、産業の成長、人びとの暮らしの変化—こうした社会の動きに呼应しながら、建築は常に時代とともに歩んできました。建築家や建設に携わる専門家たちは、社会との対話のなかで新たな空間を生み出し、都市のかたちを更新してきたのです。

しかし現在、建築はしばしばコンテンツを格納する単なる箱として扱われることが増えています。建築そのものの価値や意味が問われる機会は減少し、議論も業界内に閉じたものになりがちです。

その結果として生じているのが、いわば「タコツボ化」とも呼ぶべき状況です。建築の専門家たちは専門家同士で語り合い、一般の人びとが建築の意義や魅力に触れる機会は限られています。建築団体の活動も、会員や業界関係者には届いても、広く社会には届きにくい状況にあります。

建築と社会のつながりは、これまでになく希薄になっています。

この状況を打開するためには、建築の外側の言葉で、しかし建築自体について語る必要があります。建築の専門用語や業界の論理に閉じることなく、社会に開かれた言葉で建築の価値を伝え、対話の場をつくることが求められています。

●解決策—建築と社会の再接続

「have not been, INDEX」は、日本建築協会東海支部65周年記念事業として、AAJの機関誌名でもある「建築と社会」をあらためてテーマとして掲げ、多様なプログラムを展開します。

このプロジェクトでは、建築と他分野を横断的につなぎ、業界内外の人びとに開かれた対話と体験の場を提供します。建築の専門家だけでなく、アート、デザイン、社会学、心理学など、さまざまな領域の実践者や研究者との協働を通じて、建築と社会の新たな関係性を模索します。

2025年度はそのキックオフイベントを実施し、建築を社会に再び接続する取り組みを始動します。

●社会的インパクト—AAJが開く建築の文化

本プロジェクトは、建築を専門家だけのものから、社会全体に開かれた文化へと位置づけ直すことを目指しています。

一般市民に建築への関心を喚起するとともに、AAJの存在意義を広く伝え、会員拡大や次世代への継承につなげます。また、建築と社会の新たな関係を提示することで、未来の都市や暮らしの可能性を示すことが期待されます。

AAJ東海支部の65周年という節目である2025年度は、社会に向けて団体の存在意義をあらためて示す絶好の機会です。建築と社会の関係が弱まりつつある現状を踏まえれば、「建築と社会」を標榜してきたAAJが、建築と社会を再接続する場を創出することは、まさに喫緊の課題とも言えるでしょう。

さらに、建築以外の他領域の専門家や一般市民との交流を試みることで、会員基盤の拡大や多様なステークホルダーとの関係構築にもつながります。5年間の活動をアーカイブ化することで、プロジェクト終了後もAAJのプレゼンスを保持し、建築と社会を接続するプラットフォームとして継続して機能することを目指します。

■キックオフイベント「have not been CONNECTED」

●開催概要—建築と社会の接続はいかに可能か

5か年計画のスタートを告げるキックオフイベントとして、「have not been CONNECTED—建築と社会の接続はいかに可能か」を開催します。

開催予定時期：2026年6月頃

建築と社会はいまだ接続されていない—この結びつきはいかに可能か。

AAJが建築と社会の接続のプラットフォームとして運営する「have not been, INDEX」のキックオフとして、複数人のゲストを招聘し、これまでの建築と社会の関係性について再描写しながら、これからの活動に求められる視点や行動について公開で相談します。

また、AAJ会員企業による「建築と社会の接続」をテーマにした展示など、複数プログラムを同時開催します。

●イベントの特徴—双方向に学びあう場

このキックオフイベントは、従来のトークイベントとは一線を画すものです。

複数の人たちとともに考え、実践するために、一方向的にナレッジを教授／享受する形式ではなく、双方向に学びあう状況を生み出すことを目指します。

知識の一方向的な伝達ではなく、参加者全員が対話に参加し、ともに考え、悩み、可能性を探る—そうした場を創出することが、このイベントの核心です。

■プログラム1：公開相談会

●コンセプト—悩みを共有し、ともに考える

キックオフイベントのメインプログラムは「公開相談会」です。

専門領域と社会の接続を試みている実践者をゲストに迎え、それぞれの実践を開示してもらいつつ、私たちが今後の活動を進めるうえでの方向性について相談します。

特徴的なのは、ゲストからも活動における困難を共有してもらい、ほかのゲストに相談する機会を設けることです。一方向的な講演やパネルディスカッションではなく、登壇者と聴衆、そしてゲスト同士が互いに相談しあう関係性を構築します。

会場構成も従来のイベントとは異なります。舞台と客席の垣根をなくし、相談がおこなわれるテーブルを中心に配置。参加者は周囲を回遊しながら相談内容を聞くことができ、より親密で開かれた対話の場を実現します。

●ゲストについて

公開相談会には、建築・都市、アート、デザインの各分野の第一線で活躍するゲストをお招きする予定です。

それぞれの専門領域において、社会との接続を実践的に試みてきた方々に登壇いただき、建築と社会の再接続に向けた視点や方法論につ

いて相談します。建築とは異なる領域からの知見を得ることで、私たちの活動に新たな視座をもたらすことを期待しています。

ゲストの詳細については、決定次第、本誌およびウェブサイトにて告知いたします。

■事前ワークショップ—公開相談会に向けた準備

●AAJ会員とともに考える

公開相談会の開催に先立ち、参加を希望するAAJ会員の皆さまとともに事前ワークショップを実施します。

このワークショップは、公開相談会をより実りあるものにするための準備として位置づけられています。単にゲストの話聞くのではなく、私たち自身が「建築と社会の接続」について深く考え、問いを持った状態で当日を迎えることを目指します。

●自己洞察—自身と社会の関係性を問い直す

ワークショップでは、参加者一人ひとりが、自身や所属組織と社会の関係性について深く洞察する時間を設けます。

- 自分自身の仕事は、社会とどのように接続されているのか
- 所属する組織は、社会のなかでどのような役割を果たしているのか
- 建築を通じて、どのような社会への貢献が可能なのか

これらの問いに向き合うことで、公開相談会においてゲストに投げかけるべき問いや、自分たちが抱える課題を明確にします。

●ゲストへの事前取材

ワークショップ参加者は、公開相談会に先立ち、ゲストへの事前取材にも関わる機会があります。

自分たちの問いをもとにゲストに質問を投げかけ、当日の相談内容をより深いものにするための準備を行います。この過程を通じて、参加者自身も「建築と社会の接続」という課題に主体的に関わることができます。

●ワークショップへの参加

事前ワークショップへの参加を希望される方は、追って告知される申込方法をご確認ください。公開相談会への参加のみも可能ですが、ワークショップから参加いただくことで、より深い学びと対話の機会を得ることができます。

■公開相談会の構成

公開相談会は、以下の3つのパートで構成されます。

●前提共有—建築と社会の関係性についての問題意識を共有する

まず、現在の建築と社会の関係性についての問題意識を共有します。

- いま建築と社会の関係はどのような状態にあるのか
- そうではなく、どのような関係性を築けたほうがよいのか
- なぜそうした関係性が必要なのか

これらの問いを参加者全員で共有することで、議論の出発点を明確にします。

●議論・相談—そうした問題に対してアプローチする方法を学ぶ・相談する

前提を共有したうえで、具体的なアプローチ方法について議論・相談します。

- これからそうなるためには、どういうことをしたらよいか？
- 方法がわからないから、いろんな人と相談しながら進めたい
- 建築やその他の領域で社会との接続を試みている人に、悩みを含めて聞いてみる

ゲストの実践から学びつつ、私たちが今後取り組むべきことについて、率直に相談します。

●発信—まだわからないものについて試行錯誤する過程そのものをコンテンツ化する

相談内容は、そのままコンテンツとして公開します。

まだ答えが見えないものについて、試行錯誤する過程そのものを可視化し、共有することで、より多くの人びとがこの探求に参加できるようになります。完成された知識を一方向的に発信するのではなく、模索のプロセスを開くことで、建築と社会の再接続という課題を社会全体で考える契機を創出します。

■プログラム2：展示

●AAJ会員企業によるパネル展示・パネルディスカッション

公開相談会と同時に、AAJ会員企業による展示を開催します。

建築と社会をつなぐ試みのひとつとして、建築に関する展示をおこないません。AAJ会員企業に協力を依頼し、「建築と社会の接続」をテーマにしたコメント等を展示します。

●展示の内容

AAJ会員企業の若手社員を対象に、共通の質問を投げかけ、その回答を展示します。

質問例として、以下のようなものを想定しています。

- 「現在あなたの企業と社会の接点はどこにありますか？」
- 「65年後（2090年）のあなたの企業と社会の接点はどこにありますか？」

これらの質問は、現在の建築と社会の関係性を問い直すとともに、遠い未来を想像することで、建築が社会のなかでどのような役割を果たしうるかを考える契機となります。

●事前ワークショップの成果展示

展示では、AAJ会員企業によるパネル展示に加え、事前ワークショップの成果も展示します。

ワークショップに参加した会員が、自身や所属組織と社会の関係性について洞察した内容、ゲストへの事前取材を通じて得られた知見などを、視覚的にまとめて展示します。公開相談会に至るまでの思考のプロセスを可視化することで、当日参加される方々にも、ワークショップでの議論や発見を共有します。

これにより、公開相談会は単発のイベントではなく、事前の準備段階から積み重ねられた対話と思考の集大成として位置づけられます。

●対話の場としての展示

展示は単なる情報の提示にとどまりません。回答者と対話できる時間を設け、企業間や学生らとの交流の場とします。

展示を通じて、AAJ会員企業の若手社員同士、あるいは会員企業と学生、一般来場者との対話が生まれることを期待しています。建築と社会の接続は、こうした日常的な対話の積み重ねからこそ生まれてくるものです。

■5か年計画のロードマップ

●2025-2026年度：キックオフ

- 5か年計画の企画策定
- ホームページ公開、広報活動の開始
- キックオフイベント「have not been CONNECTED」の開催

●2027年度：プログラム展開

- 各企画の実施（シンポジウム、展覧会、ワークショップ等）

●2028年度：中間評価

- 各企画の実施
- 5か年計画の進捗確認・フィードバック

●2029年度：発展

- 各企画の実施
- これまでの活動の振り返りと今後の展望

●2030年度：クロージング

- クロージングイベントの実施
- 5年間の活動を総括した書籍化

■AAJ会員の皆さまへー参加のご案内

●キックオフイベント・事前ワークショップへのご参加

2026年3月中旬に開催予定のキックオフイベント「have not been CONNECTEDー建築と社会の接続はいかに可能か」およびその事前ワークショップに、ぜひご参加ください。

建築・アート・デザインの第一線で活躍するゲストとともに、建築と社会の再接続について考える貴重な機会です。一方向的な講演ではなく、参加者全員がともに考え、対話する場として設計されています。

●展示への参加

AAJ会員企業の皆さまには、展示への参加をお願いいたします。

「建築と社会の接続」をテーマに、貴社の取り組みや若手社員の声を発信する機会として、ぜひご活用ください。詳細は追って事務局よりご連絡いたします。

●5か年計画への継続的な参加

「have not been, INDEX」は、2030年まで継続する長期プロジェクトです。

今後5年間にわたり、さまざまなプログラムが企画されます。シンポジウム、展覧会、ワークショップなど、多彩な企画を通じて、建築と社会の新たな関係性を模索していきます。

AAJ会員の皆さまには、これらのプログラムへの積極的なご参加をお願いいたします。参加者として、発表者として、協力者としてさまざまな形で関わりを歓迎します。

■日本建築協会の使命と本プロジェクト

●創立時の志を現在に

1932年、『建築と社会』第1号の巻頭言において、創立委員の片岡安は次のように述べています（現代語訳）。

>私たち建築界は、まさに未曾有の難局に直面し、進退きわまる状

態にあると言っても過言ではありません。私たちは、この難局にあたり、ただ悲鳴を上げて救済を求めてみても、何ら打開策を見いだすことはできません。だからこそ、建築界の堅固な団体として、知恵と力を結集し、この困難を乗り越える方策を真剣に研究しなければならないのです。

日本建築協会の使命は、まさにこの一点にこそ集中されるべきであります。

世界恐慌の余波のなか、建築界は深刻な困難に直面していました。しかし片岡は、ただ嘆くのではなく、団体として知恵と力を結集し、困難を乗り越える方策を研究することこそがAAJの使命であると説きました。

今日、私たちが直面している状況は異なります。しかし、建築と社会の関係性が希薄になりつつあるという課題は、かつての経済的困難と同様に、AAJが正面から向き合うべき問題です。

建築と社会

昭和七年一月一日第十五輯第一號

高層建築

1254-1

1

日本建築協会

1-3

昭和七年を迎へて

工学博士 片岡安

新春の初頭に我建築界の前途に幸多かれと祈るは毎年の慣例であるが、本年は例年と全くその情勢を異にする場面に臨むが故に、唯簡単に従来の如き努力の延長を希望するを以て事終れりとなすことは出来ないのである。今や世界を挙げて生産過剰を極め、農産物に於て、農産品に於て、又一般製造工業品に於て、未だ嘗て誰もが想像せざりし程度に強大なる滞貨を生じ、金融は梗塞し、物價は大脱落の一路を辿り、その結果事業は萎縮衰退の惨状に陥り、失業者の甚出相繼ぎ、経済界の大深淵と共に社会生活の不安は益々深刻ならんとして居る。加ふるに獨逸の國情の不安より招來せる賠償金のモラトリアム案を始め、英吉利が急遽しき金融難に陥りたる等世界の財界變動は益々激しく、到底尋常一様的手段にては收拾の途がな

いような情勢にある。かゝる世界

の對窮乏に際し我國の經濟界のみが獨り超然たり得る筈はないので、むしろその惨状は部分的には歐米のそれよりも甚しきものであるのも當然である。

我建築界は數年來漸く鈍重の進展を繼續し來り、やゝともすれば退縮萎縮の傾向を呈する程度であつた。然るに國際的及國內的の一般經濟界のこの急激なる不振の連つた。著しく萎縮衰退の情況となりつゝあるのも蓋し當然であつた。しかもその情況は日に益々深刻化せんとして居る。その結果建築關係の幾多の産業は殆んど凡て倒産に瀕し、十數萬の熟練職工は失業の苦惱を嘗みつゝあるの窮状を披露し、何等その救濟策の講ぜられたるを聞かねるのである。又全國十數萬の建築業者は從來の事業を極度に縮小せねばならぬ苦境にあることも想像するに難くはな

い。建築界幾多の學者及技術家中には亦それと雖も去つて空しく不運を聊つものが多いとであらうと思はれる。この現状を綜合的に見れば我建築界は今や古今未嘗有の難局に臨み、退却難れざるの情況にあると言つて差支はないのである。吾人はこの難局に臨み、唯徒らに悲鳴を擧げ、救済を叫んだとて何等打開の途を見出し得るものではない。此に於て我々建築界の堅固なる團體は本智全力を挙げ互に協力しこの難局打開策を講究せねばならぬのである。我日本建築協会の使命は正にこの一點に在るべきである。

この非常の難局に際して會員が一致團結、互にあひ協力しこの打開策の講究に當らば、恐らく相當効果を擧げ得ること、信ずる。非常時に處するには異常の決心を要するのである。

片岡安「昭和七年を迎へて」日本建築協会『建築と社会』Vol.15-1 (1932)

●設立の目的を現在に

日本建築協会は、建築設計事務所、建設業をはじめ建築材料、建築設備、機器メーカー、官公庁・教育機関等建築関係の各分野から参加する幅広い会員の連携協力によって、建築に関する学術、技術、事業の進歩発展を図るとともに、建築を通じて広く社会に貢献することを目的とする一般社団法人です。

「建築を通じて広く社会に貢献する」—この設立の目的を今日の文脈で読み直すとき、建築と社会の再接続は、まさにAAJが取り組むべき中核的な課題であることが明らかになります。

●会長の言葉から

指田孝太郎会長は、AAJの使命について次のように述べています。

>今年で創立108年となる当協会ですが、昭和100年を超える歴史の重みを感じつつ、令和の現在からその先に待つ未来に向け、膨大な知財の蓄積を有益に活用できる「アーカイブ」の拡充が、協会の重要な使命のひとつと捉えています。そして、その実現のためには、世代と専門領域を超えて集い、知恵を出し合える環境の整備と継続更新が必要です。

「have not been, INDEX」は、まさにこの会長の言葉を体現するプロジェクトです。

いまだ知らない未来に向けて、知財を活用できるアーカイブを充実させること。世代と専門領域を超えて知見を共有する環境を整備し、継続的な実践を重ねていくこと。本プロジェクトは、これらの課題に正面から取り組みます。

■エピグラフスーザン・ソントグの言葉

> *Many things in the world have not been named; and many things, even if they have been named, have never been described.*
— Susan Sontag, "Notes on 'Camp'" (1964)

>この世には名づけられていないものがたくさんある。そしてまた、名づけられてはいても説明されたことのないものがたくさんある。
>—スーザン・ソントグ『《キャンプ》についてのノート》(1964)

建築と社会の関係性もまた、まだ名づけられていないもの、名づけられていても十分に説明されていないものに満ちています。

「have not been, INDEX」は、そうしたまだ見ぬ可能性を探り、言葉にし、共有していくための試みです。

■おわりに一とともに模索する5年間へ

「have not been, INDEX」は、答えをあらかじめ持っているプロジェクトではありません。

建築と社会の関係性をどのように再構築すればよいのか—この問いに対する明確な回答を、私たちはまだ持っていません。だからこそ、多様な領域の実践者や研究者、そしてAAJ会員の皆さまとともに、5年間かけて模索していきたいと考えています。

模索のプロセスそのものを公開し、共有することで、より多くの人びとがこの探求に参加できるようにします。完成された知識を一方向的に発信するのではなく、試行錯誤の過程を開くことで、建築と社会の再接続という課題を社会全体で考える契機を創出します。

建築と社会は、いまだ接続されていない。

この仮定から出発し、新たな接続の可能性を探る5年間が始まります。AAJ会員の皆さまのご参加を、心よりお待ちしております。

■実施体制

●主催

日本建築協会東海支部・青年委員会

●企画・運営

おどり場 (Land-ing)

おどり場は、美術・デザイン・建築・都市のためのクリエイティブ・プラットフォームです。多領域のクリエイターとともに、不確かな現在を模索するためプロジェクトごとにチームを編成し、事業に合わせた先進的な取り組みをプロデュースします。

■お問い合わせ

日本建築協会東海支部事務局

(詳細は追って本誌およびウェブサイトにて告知いたします)



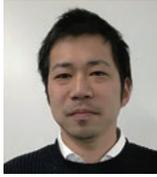
久保久志
くぼ・ひさし
1980年 奈良県生まれ
2005年 三重大学大学院工学研究科建築学専攻修了
2005年～東畑建築事務所



小杉嘉文
こすぎ・よしふみ
1981年 静岡県生まれ
2006年 早稲田大学大学院修了
2006年～竹中工務店



佐藤 剛
さとう・たけし
1985年 静岡県生まれ
2011年 東京工業大学大学院修了
2011年～大林組



松下拓真
まつした・たくま
1982年 埼玉県生まれ
2008年 名古屋工業大学大学院修了
2008年～東畑建築事務所



三宅伸幸
みやけ・のぶゆき
1982年 愛知県生まれ
2006年 三重大学大学院工学研究科建築学専攻修了
2012年～安井建築設計事務所名古屋事務所

■おどり場について

おどり場は、アートとデザインのためのクリエイティブ・プラットフォームです。

さまざまな領域のクリエイター集団が、多様化・複合化するプロジェクトごとにチームを編成し、先進的な取り組みをプロデュースします。

また、展覧会と出版行為を組み合わせた自主プロジェクトを実施し、アートプロジェクト自体の領域を拡張し、表現とアーカイブのあたらしいかたちを模索します。

●What/How we do

アートとデザインがより自由で、サステナブルで、動的でありつづけるために、多角的なアプローチでプロジェクト固有の成果を生みだします。

アートプロジェクトの事業企画・実現・運営まで。一貫したプロデュースを提供します。

1. アートプロジェクト・展覧会などの事業企画
2. メディアプラクティスの制作サポート
3. 写真・映像メディア制作サポート
4. 企業の新規製品開発/支援
5. 新規事業開発・R&D
6. アーティスト等の支援
 - (ア) アートブックフェアの企画・運営
 - (イ) アートブックアワードの運営
 - (ウ) 地域芸術祭の企画・運営

●メンバー

- 桂川大 (建築家) 企画/空間設計
- 小出一葉 (アートマネージャー) 企画/アートマネジメント
- こはま ふみお (映像作家) 写真・映像撮影
- 豊島鉄也 (彫刻家) 作品制作/R&D
- なかむら まゆ (写真家) 写真撮影
- 山川陸 (アーティスト) 作品制作/ストーリーテリング
- 山をおりる (エディトリアル・コレクティブ) 編集/デザイン

■おどり場のプロジェクト事例

●AICHI ART BOOK FAIR

AICHI ART BOOK FAIR (AABF) は、愛知で実施されるはじめての大型アートブックフェアです。国内外の専門書店・出版社・クリエイターを招聘し、地元の企業やフードクリエイターと協働した多分野が

交わる新しいアートブックフェアです。

おどり場は、AICHI ART BOOK FAIR実行委員会の一員として、全体企画・運営・クリエイティブの制作・広報など、企画から運営まで一貫したプロデュースをおこないました。



●運河の森 アートセンター

中川運河の東支線沿いにある中川運河ギャラリーの改修、新築部分の設計を現在進めています。エリア全体の基本構想も思考中です。

また、旧マルト住建事務所、中川運河ギャラリー、PALET.NUで開催されるイベント「Canal Farm 2026」では、おどり場は旧マルト住建事務所「運河の森 準備室」と題し、プロジェクトの内容や作品、トークイベントを企画しています。

●風景：いる／みる／みえる

2023-2024年にかけて実施するリレー形式の鑑賞を企画しました。「鑑賞の場とはなにか？」をテーマに、運動体参加アーティストたちが応答を試みました。1期「風景：いる」では一つの場所でコレクティブメンバー5名の展示をおこない、2期「風景：みる」では会期中に不定期に届く図録コンテンツを作品に見立て鑑賞のオルタナティブを模索し、最後の第3期「風景：みえる」では第1-2期をとおり

て作家たちが発見・生成した成果を那古野エリアで展示しました。商店街の空き店舗を利用したガイダンスセンターから始まり、ビルの一室、堀川沿いの木材屋など、展示場所を巡ると同時にしぜんと街の風景も鑑賞できるように計画しました。その中に登場するファブリックや植栽を使ったサインも設計し設置しました。自身／対象の存在をどのように確認し（いる）、「鑑賞の場とはなにか？」という問いをどのように解釈するか（みる）、その不確かさを来場者とともにあらためて鑑賞できる企画です。



写真：網島卓也



写真：今井隆之

●これからの風景 -世界と出会いなおす6のテーマ-

2025年7月5日から9月23日に開催された静岡県立美術館の所蔵展「これからの風景 -世界と出会いなおす6のテーマ-」のデザイン・会場構成を担当しました。玄関のサインからはじまり、床の一部張り替え、展示室内サイン、什器の設計をしました。ハンディキャップを持つ方のための展示や、鑑賞後のアウトプットスペースなど、それぞれの作品に込められた風景をなぞるように鑑賞する学芸さんのアイディアが詰まった展示内容や動線が活かせるよう、設計しました。



写真：なかむら まゆ



おどり場は、アートとデザインのためのクリエイティブ・プラットフォームです。さまざまな領域のクリエイター集団が、多様化・複合化するプロジェクトごとにチームを編成し、先進的な取り組みをプロデュースします。

文責：春口滉平（おどり場・山をおりる）

建築の新しいミカタ～東海地域の若手がみる「これから」～

2025年は大阪・関西万博の開催を背景に、建築が改めて社会の関心を集める一年となった。また、AI技術の急速な普及により、「AI生成」という言葉が日常的に用いられる時代を迎えている。こうした大きな社会変化の中で、建築はいま何を問い、どこへ向かおうとしているのだろうか。本企画では、東海地域で設計・研究の両面から活躍されている愛知工業大学の今和泉拓先生をインタビュアーに迎え、若い施工者、研究者、行政職員、メーカー技術者への視点を通して、建築を取り巻く「今」と「これから」を読み解いていく。

施工者の視点

人・技術をミカタに、Win-Winの建築を。

静岡県浜松市に拠点を置き、東海地域を中心に建設事業を展開する株式会社中村組。「円満なる事業の遂行」を社是に、誠実なものづくりを続けている。30歳という若さで現場代理人を務める大木氏は、施主や設計者だけでなく、現場に関わる職人一人ひとりが力を発揮できる環境づくりを重視し、関わるすべての人が納得できる建物づくりに日々向き合っている。

■ 個人差が顕著な仕事の効率化

今和泉 働き方改革が進んでいるが、いっこうに楽にならない。効率化はされているが、やらなければならない事が次々に増えている印象がある。現場でも同じような状況なのですか？

大木 その通りで、確かに効率化はされているけど、書類作成や事務作業が増えていて、働くことに対して大きな変化を感じない。特に法律の改正となると、それを学ばなければならないし、中々労働から解放されない。

今和泉 人間は狩猟を主としていた頃は1日4時間程度の労働でよかったと言われている。その後、農耕が始まり1日8時間まで拡大した。実は効率化と労働時間の短縮は繋がらないとも思っています。

大木 私が入社してから、タブレット支給があり、ペーパーレスや電子化が進み、効率化はしている。しかし、特に会社として使い方の指導があったということではなく、会社に突然渡されたような状況だったので、使いこなせれば効率化だけと、そうでなければ負担になってしまうという、現場では特に個人差を感じるものでした。

今和泉 学生指導においても、学生によっては先生に聞く前にAIに聞いてきました、という学生が出てきています。積極的に使う方が良いのかなと思う反面、学生によってはAIに使われてしまう、悩ましく思っています。

大木 使っているようで、使われてしまっている、個人の能力によって、今後はもっとそれが顕著に現れてくるのかもしれないね。

インタビュアー

今和泉 拓 氏

1985年 三重県生まれ
2011年 名古屋大学大学院修士課程修了
2011～2024年 日本設計
2024年 名古屋大学大学院博士課程修了
2024年 愛知工業大学 講師



施工者

大木 宏隆 氏

1995年 静岡県生まれ
2018年 株式会社中村組 入社



Hiroki Ogi

■ 情報過多のAIと経験の照らし合わせ

今和泉 現場ではトラブルがつきものだと思うのですが、そういった際にAIを使ったりはしているのですか？

大木 現場でのトラブルは突発的なものが多いので、その対応にAIは活用していません。現場だからこそ、なのかもしれませんが、AIに解決できないことは絶対にあると思います。

今和泉 AIによって一般化された情報は入手しやすくなりました。しかし、情報過多で、人のキャパシティを超えてしまっています。

大木 現場ではやはり上司の意見も含め、「経験」に頼ることが多いです。AIを活用することになると、多くの情報を経験と照らし合わせながら、取捨選択することが重要になると考えています。



川口組テクノセンター：大木氏が現場監督を務めた事務所と倉庫の複合施設

今和泉 業務を効率化する一つなのかもしれませんが、BIMへの取り組みや現場活用の現状はどのようなのでしょうか。

大木 会社に専門部署があり、積極的な活用を進めています。しかし、現状としては、使える社員が少ないため、全現場に導入しているという状況ではありません。また、協力会社がBIMを使えない場合が多い事も課題だと考えています。

■新技術開発と必要な時期のズレ

今和泉 他分野に比べて、建築業界は実は技術革新が進んでいるように遅れているように思えます。実感としてはどのようなのでしょうか。

大木 個人的な意見ではありますが、私も遅れているように思えます。常にアイデアはあるのですが、どうしても具体的にすると止まってしまう。

今和泉 現場ならではの気づきをリアルタイムで情報を展開して、新技術で課題解決なりに取り組むというのが大切ですが、どうしても次の現場で取り入れようということになってしまう。

大木 そうなんです。新技術ということになると、時年単位の時間がかかってしまい、技術が完成された頃には特に必要のない技術になってしまっているというタイムラグによるズレが生じます。

今和泉 新技術はすぐにアイデアを展開して、トライして、修正していくというスタンスが必要なのかもしれませんね。

■将棋のように敵味方の枠組みを替えながら取り組む

今和泉 現場では色々な職人さんを味方につける必要があると思うのですが、意識していることはありますか。

大木 私は自分を技術屋だとは思っていません。なので、職人さん達のような専門家とコミュニケーションをとる事で、生まれてくるものを大切にしています。言い方は良くないですが、設計者さんを使わせて頂いて、共通の敵とすることで、チームとして一体感をつくるという方法を使う事もあります。

今和泉 将棋の駒のように敵味方が入れ替わりながら、目的を達成するというのと同じなのかもしれませんね。全体の目標がある中で、敵味方のコミュニティを枠を入れ替えながら事業を進めていくというのは、コラボが多いという、今の考え方なのかもしれませんね。

■外国人の職人とのコミュニケーション

今和泉 現在、労働力不足が深刻化していて、社会問題にもなっています。影響を感じることはありますか。

大木 職人さんがいないというのは、前からずっと問題になっています。急に少なくなったという事ではなく、以前からずっと不足しているという印象も持っています。

今和泉 だからという訳ではないですが、外国人の方も増えています。どのようにコミュニケーションをとっているのですか。

大木 川口組テクノセンターの鉄骨建て方の職人も外国人でした。しかし、彼の場合は日本語を流暢に話すことができるので、コミュニケーションは全く苦勞する事はありませんでした。実は全く日本語が話せない外国人の職人に対して日本語ができる外国人の職人さんが間に入って来て翻訳をしてくれることもあり、助けて頂くケースもあります。

■聞き専として本音を引き出し形にする

大木 私はおしゃべりですが、実はしゃべっているつもりはないのです。施主にせよ設計者にせよ職人にせよ、コミュニケーションをとり、聞き専として本音を引き出し、形にしていくという事が大切だと思っています。ひとりひとりの声を聞く事で、関わる人たちが皆がWin-Winの関係になり、満足できるものづくりを行っていきたくと思っています。

今和泉 大学教員として教える立場になってわかるのですが、一方的な言葉だけでは意図を理解してもらえない事があります。主体性を引き出すことで、同じ方向を向くということは大事なことです。



■インタビュー後記

「聞く」ことを重視したコミュニケーションは、関わる人の主体性を引き出し、現代の教育にも通じる手法だと感じる。新技術に伴うタイムラグという視点も示唆的であった。建築では、既存技術を現場のアイデアでいかに活かすかが重要なかもしれない。

(今和泉／編集部・鶴飼)

利用者をミカタに、深まる使い方を。

昨年、小堀哲夫氏の設計により完成した名古屋大学・Common Nexus (ComoNe) は、大学の新たな中心施設として、学生に限らず地域を含めた広域的な交流と学びの場として活用されている。齊藤孝治氏は、研究者として公共施設マネジメントを研究しながら、新たな公益の在り方を探求してきた。大学という学びの場の中核施設として、完成後のComoNeがどのように使われ、どのような展開を見せていくのか。その実践を通して、新しい公益の可能性を模索している。

■行動観察の研究の意義

齊藤 新たな大学の中心施設としてつくられたComoNeですが、行動観察調査は絶対にやらなければならないと思っています。計画していた行動、当初の使い方と時間の経過による使い方の変化を大学の施設で行うのはとても意義があると考えています。

今和泉 私の専門のオフィスの計画もそうなのですが、設計上の強い思いで、こうした方がよいと作るのですが、その意図がユーザーに伝わらないと、結果として結構普通な感じになってしまうのですよね。そういった意味で、使われ方のデータを蓄積・解析をきちんとして使い方をアップデートしなければならないと思っています。

山口 そうですね、ココがうまくいっている、ココがうまくいっていないということを分析して、じゃあこっちのエリアを広げようと思えていかないと、結局空間が使われない。

齊藤 公共施設も同じことが言えますね。学校とかも結局新しいものを提案しても、教育と合わなくて段々違う方向に進んでいく。きっとここも新しい試みだから、成功しているところもあれば、実際失敗しているところもありそう。それを間仕切りや家具のレイアウト変えながら、考え続けて実践することが大事だと思っています。ここはモニタリングして実験しながら出来ます。



同じ大学出身の日建設計・山口氏(左)と共に歴史を振り返りながら語る。

研究者

齊藤 孝治 氏

1993年 名古屋市生まれ

2017年 4月～2023年 2月

(株)久米設計 (2019年 4月～2021年 3月

トヨタ自動車(株)出向)

2024年 6月 名古屋大学大学院博士(工学)

2023年 4月～ 名古屋大学特任助教

2024年 3月 特任助教任期終了

2024年 8月～ 助教に着任



Koji Saito

今和泉 継続的に出来る環境であることが良いですね。動的にプランニングするということもできる。つくり続けるというのは、とても必要な事だと思います。

齊藤 運営の変化は激しいので、きちんと追いかけないと結局定点的に終わってしまう。運営者に苦勞が募ってしまうというのが良くあることなのですが、研究によってフォローできるのはとても素晴らしいですね。

■多分野が刺激しあえる「常に実験」の場

齊藤 1階に3Dプリンターが並んでいる工房があるのですが、オープンなようで、形式的に閉じてしまっています。横にある階段裏を使ったりすると場の雰囲気が変わると思うのですが。

山口 3Dプリンターを使って家具をつくり、こんな家具をつかったら効果があったみたいな感じで実験をすることも出来ますね。

今和泉 常に実験というのが良いのかなと思っています。航空等の分野の人達の風洞実験等も、他の分野から見れば驚きに満ちているので、ここで行えば良いと思います。

山口 確かに、専門こそオープンにしていくという考えは大切なかもしれませんがね。企業もそうですが、閉じこもらないでオープンにすることで、コラボやイノベーションを起こしています。

今和泉 今回のテーマであるミカタに結び付けると、建築の力によって、人の活動が代わり、新しい見方ができるようになり、生活様式が変わる。そういった建築の力を信じたいと思っています。

山口 智三 (日建設計/日本建築協会東海支部編集委員)

1984年 愛知県生まれ

2010年 名古屋大学大学院 修了

2010年 日建設計 入社

2021年 同社 設計監理部門設計グループ アソシエイト

■愛される建築をつくる利用者の主体性

斉藤 実験といった時に、1人ではダメですよ。関わっている色々な主体が変わっていく意識みたいなものを持っていないと実験は生まれえないと思うのです。

今和泉 使う人たちが味方にならないと、建物は良くならないと思います。使っている人たちが主体的に使いこなす余地みたいなものを見つけてくれる人が必要だと思っています。使っている人たちが全員仲間というか、そう思わせる建築には愛がそれなりに必要だと思っています。

斉藤 人の主体性を生み出すためには、愛は必要ですよ。自分が中心的にいるみたいな状況にあると、それを取り上げてくれるキーとなってくれると言われてますよね。主体性を生む建築は使う人と愛がある関係が築けるか、というのが大事なかもしれません。

■自分事の空間で利用者を味方にする

山口 利用者をどう味方につけるかを考えた時、人に置き換えれば、その人を助けてあげたいとか、良いなと思うと味方になりたくりますよね。その感覚って建物にも必要な気がします。

斉藤 公共施設マネジメントを研究していると、維持管理には使っている人の能動的な維持が必要だと感じます。そのためには、居場所というか、自分事になった空間があることが大事だと思います。

山口 公共建築の代表である市役所は、本来ならば誰もが自由にきて、何か活動ができるという場所だと思うのですが、今の市役所は市のサービスを行う場所となってしまって、来る人が固定化されてしまっている。半公共的な大学という施設も、本当は目的のない人がフラッと集まって何か活動することによって、自分事の空間が増えて良い循環に繋がると思っています。

■主体性を生み出す人の本能にアプローチする建築

山口 香山先生の建築意匠講義という本の中で柱・暖炉・水・家具などが空間の中心を確定する力を持っているという話があります。この

空間の中心が自然とコミュニケーションを生む場所になっていくのでしようね。

斉藤 本能的に集まると、勝手に集団意識が芽生えるのかなと思います。本能に基づいてコミュニケーションが発生しやすい状況になると、人は集まるのかなと。例えば、すごく景色の良い場所があって、そこに立ち寄った人達に同族意識が生まれるような感覚です。

今和泉 建築で主体性を生み出すというのは、とても難しいですね。主体性を見つけてください、と強要するものでもないですし。

斉藤 動機づけというか、ゆるいナッジというか、自分で選択したんだという思いが生まれる事が重要な気がします。

今和泉 そこはフリースペースではないですね。必ず行動を誘発するけれど、選んだという主体性が残るみたいな感じですね。100%つくり込みすぎずに、余白を計画する事も大切な手法になりそうですね。逆に、意図せずにセレンディピティが起きるカオスな空間ということなのかもしれません。

■動物的本能をコントロールする光・温熱環境

山口 最近、光のコントロールを以前に増して、考えるようになってます。自然光が差し込む場所をコントロールし、時間によって主役の場所が変わっていく様をイメージしながら設計するのは結構大事だと思っています。

斉藤 ComoNeもできそうですね。光のシミュレーション図も見たことがあるので、改めて考えると面白いですね。恐らく、ムラが生じる事が大切なかもしれませんね。明暗の好みは人それぞれです。

山口 宗教観や国によっても光の入れ方が違うという事も居場所の設計と絡めて計画すると面白いかもしれません。

今和泉 学生時代に名大の環境の授業で教わったと思うのですが、変化に対して気持ち良いと思える積極的な快適性と、このままでよいという消極的な快適性があり、そういった環境のコントロールを取り入れるのも、本能にアプローチできるのかもしれない。

■インタビュー後記

大学の中心施設であるComoNeならではの、研究成果のフィードバックによる運営の更新や、実験的な取り組みによる建築の使われ方の広がりなど、変化に应答しながら利用者をミカタにつけて建築の力を引き出すという議論は、今後の建築の捉え方として興味深かった。

(今和泉／編集委員・鶴飼)



地域のために、きちんと「攻める」

都市部から山村部まで広大な市域を有し、多様な歴史と環境を内包しているため、それらを一括して「地域」と捉えることはできない。山田淳司氏は、建築住宅課、公共建築課で「つくる」、開発審査課、建築相談課で「まもる」、資産経営課で「いかす」という三つの立場を経験してきた稀有な若手職員である。こうした経験を背景に、豊田市の多様な地域性をいかに活かし、地域に愛される建築を実現していくかを日々模索している。

■常に挑戦し続ける「攻めの姿勢」

今和泉 豊田市は以前より木質化、木造化に積極的に取り組んでいます。その流れの中で意識されていたことなどはあるのですか。

山田 最初は木質化から始まり、続く木造化への取り組みの初期には、木材を沢山使っているにも関わらず、法規制で内装に制限がかかり、木が全然見えないという課題に直面しました。その後、木の見せ方を意識するようになり、構造や法の解釈の仕方等、設計士さんと一緒に考えてきたという流れがあります。より良い建築を目指して新しいチャレンジをする気質が豊田市にはあるかなと思っています。

今和泉 それはトヨタ自動車があるという土地柄なのですか。ある種の「攻めの姿勢」の様に感じます。もしくは地域をリードしていく立場的なものなのかもしれませんが。

山田 他の自治体と比較できないので、わかりませんが、豊田市は山林を抱えているので、木材利用に関して他人事ではないことも要因の一つかもしれません。そういった背景があるからこそ、豊田市産材の先行発注等の、仕組みを変えるという事も積極的に行ってきたと思います。

今和泉 現状に甘えずに、これまでのやり方を見直して、次に繋げていくという積極的な姿勢を感ずますね。

山田 前例が正ではなくて、常に良いものを目指して、新しいことも個別できちんと検証しベストを尽くすという姿勢は確かにあります。

今和泉 一般的な行政は先行事例を安心材料にして、右ならえというやり方で進めてしまいがちですが、話を聞いていると、それと全く逆の姿勢を取られている。それは豊田市の特徴なのでしょうね。

山田 入庁した時に、本市には有名建築家とつくった豊田市美術館や豊田スタジアムがあって、すごいまちに来てしまったという感覚がありました。公共施設でありながらチャレンジングな姿勢というのは、そういった豊田市の建築文化が培ったものなのかもしれません。

行政職員

山田 淳司 氏

1990年 京都府生まれ
2013年 豊田市建築住宅課
2017年 豊田市公共建築課
2018年 豊田市開発審査課
2020年 豊田市建築相談課
2024年 豊田市資産経営課

Junji Yamada



■公共施設の複合化・多機能化による新たな可能性

今和泉 市町村合併によって広大になった市域にある施設をマネジメントする中で、例えば統合したり合併したりする事が多くなったと思うのですが、こういったアプローチで実践しているのですか。

山田 近年、再編が動き始めているところです。市の方から維持費や利用率を理由に施設を無くす、といったネガティブなアプローチではなく、地域の声を丁寧に聞きながら、地域の新たな魅力や価値の創出に向けて再編するというポジティブなスタンスを大切にしています。

今和泉 複合化して新しくしていく中で、新しくもたらされる価値やどのような工夫が必要になるとお考えですか。

山田 これまでの公共施設は1施設1機能で、年代や属性で区切られた施設が多かったのですが、これからは1施設多機能が主流になり、人口減少における多世代交流を促進する公共施設が必要になっていくと思っています。そのためには、ハード面では共有できる機能や場所が必要になり、ソフト面では人や活動をコーディネートしながら、包括的に施設を管理するような運営体制を構築しなければならないと考えています。

今和泉 1施設1機能の施設と1施設多機能の複合施設ではどちらが管理する方としては楽なのですか。

山田 現状の運営体制で言えば、1施設1機能の施設の方が楽です。



豊田市役所展望会議室

機能によって所管課も違いますし、修繕の際にはどの部分をどちらの予算で直すのか、責任範囲はどうするのか等の行政ならではの問題も生じてきます。

■フィードバックによる更新文化

今和泉 それでも複合化を目指すというのは、やはり攻めの姿勢なのだと思います。建築が先行し運営を変えていくような印象を持ちます。

山田 そういう見方もあると思います。まずは一部の施設を複合化したことで、良い点を把握し、出てきた課題は解決していくという形になっているのかもしれない。

今和泉 実践し、効果を検証した上で、全体に展開しようという流れが出来ているというのは、IT開発のアジャイルに近いのかもしれない。更新を前提としたバージョン3.03みたいな感じです。

山田 常にフィードバックし、課題をピックアップして次につなげていく流れは、これまでの先輩たちが継承してくれた文化だと思います。

今和泉 かと言って公約数的になるのではなく、豊田市博物館のように、ちゃんとチャレンジしている。それがすごい事だと思います。

■公共建築だからこそ、徹底してベストを尽くす

今和泉 木材利用に関して、仕組みにもアップデートを加えていると話がありました。そういった発想に何故なれるのですか。

山田 細かい話ですが、以前に国産木材の利用率を上げるため、国産ヒノキ合板を選定しようとした際、想定よりも高い見積金額が出てきたことがありました。その時に感じた違和感をそのままにせず、直接材料を卸している会社まで行ってヒアリングをし、一般に流通している合板と金額が変わらない事がわかり、設計に反映できたということがありました。公共建築だからこそ、きちんと検証することは大切にしています。

今和泉 普通の行政で考えると、そこまではしませんよね。これまでのフィードバックを活かし、きちんと検証してベストを尽くすというのが、チャレンジを曖昧なものにしていない仕組みなのかもしれません。

■行政職員として「できないこと」を真摯に考える

今和泉 法規制の立場として意識されていたことはありますか。

山田 法規制においては、前例にない、法文にないことを理由に「できない」ということは簡単なのですが、相談に来られる方は、できないという結論を求めている訳ではありません。だからこそ、事例調査や内部調整をし、労力はかかりますが、「どうすれば実現できるか」という視点で考える姿勢を大切にしています。

今和泉 その姿勢は、法規制に限ったことではないかもしれません。可能性を簡単に摘むのではなく、一緒に考えて道を探るという姿勢で取り組むというのは素敵な事だと思います。

山田 相談に対して真摯に向き合うことが大切だと考えています。

■民間企業と共に豊田市を支える

今和泉 PPP等の取り組みも進められるようになり、公共建築のつくり方や維持管理の方法もかわってきました。

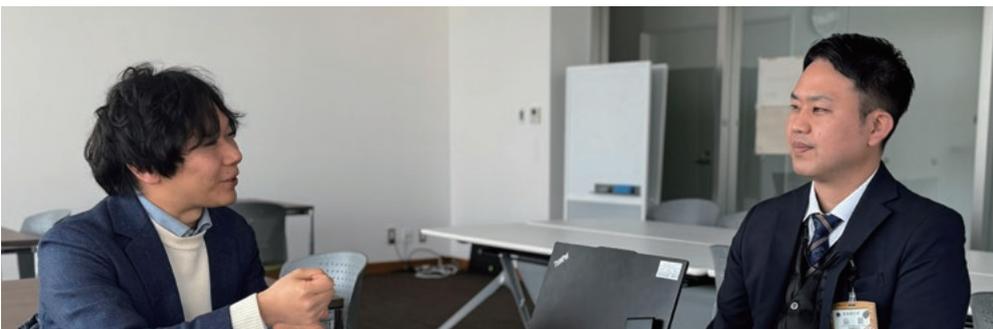
山田 豊田市でも、民間ノウハウを活用したより良質なサービスを提供するため、多様な公民連携手法を導入しています。ただ、全てを民間ノウハウに頼るのではなく、公共として大事なところは内部で熟考するということが大切にしています。この切り分けは今後公民連携が進む中で、重要なポイントであると思います。この姿勢を失うと、私たち行政の建築職員の存在意義はなくなってしまいます。

今和泉 PPP等の取り組みにあたり、苦慮している部分はありますか。

山田 民間の企業がどこに利点を置き、どういう案件に魅力を感じているのかを把握することが難しいと感じています。

今和泉 もしかすると、公共事業の魅力は単に収益性の話だけではなく、付加価値や企業ブランディングのようなものかもしれません。

山田 なるほど、そのあたりの理解を深めて民間の企業の技術力や知見を最大限生かして頂ける魅力的な公共事業を実現したいです。また、施設の建設や維持、そこで提供するサービスの向上のためには、民間企業の力が不可欠だと考えているので、共に豊田市を支える仕組みをつくりたいですね。



■インタビュー後記

東海地域をリードする自治体として、「攻めの姿勢」を重視している点が印象的であった。それに加え、フィードバックや継続的な改善の仕組み、行政職員の意識など、今後の公益を考える上で重要な姿勢が随所に感じられた。（今和泉／編集委員・鶉飼）

三現主義を大切に、声を形にする。

1917年の創業以来、日本の水廻りの発展を牽引してきたTOTO株式会社。トイレをはじめ、キッチン、壁材、床材まで幅広い商材を手がけ、日々新たな建材の開発が進められている。西田英央氏は開発技術者として、床材や壁材といったパブリック向け商材の開発に携わっている。設計者や施主へのヒアリングを自ら行い、現場・現物・現実という三現主義を重視しながら、開発の立場から社会課題の解決に向き合う姿勢を大切にしている。

■直接声を聞き、開発に活かす

今和泉 技術開発をしていて、現状のものからアップグレードする際に、技術更新等が要因になることもあると思うのですが、その他にどんな事があるのですか。

西田 現在、小便器下に設置する床タイルの開発をしているのですが、数年前までは無地しかありませんでした。営業と一緒にお施主様や設計者の方にヒアリングに行った際に、ご要望を伺い、今の大理石柄を発売した経緯があります。最近でも色のバリエーションが欲しいなどの話を聞いています。小便器の下という限られた場所なのですが、空間との調和の事を考えているのだと改めて知る事が出来ました。また、設計者の方が小便器下タイルのバリエーションに不満を持ちながら採用されているという声も聞かれ、現場の声を聞く事の大切さを実感しました。

今和泉 検討を重ねていく時にこれはダメだという時もあると思うのですが、こういった事がネックになったりするのですか。

西田 先程の床タイルの話なのですが、タイルは焼き物なので、焼く前と後で色の変化が激しく発生します。何度も繰り返し試作して、設計者の所に行ってアドバイスをもらうこともありました。ただ、安全には絶対に妥協できないので、TOTOは高い安全基準を設定していると思います。すこしでも安全に不安がある、自社の基準をクリアできない場合はそれこそ開発を止めるくらいです。



TOTOテクニカルセンター：商品だけでなく技術についても知る事ができる

メーカー技術者

西田 英央 氏

1993年 福岡県生まれ

2019年 TOTO株式会社入社

環境建材開発部に所属

Hidechika Nishida



今和泉 リアルユーザーの意見はどのように反映しているのですか。

西田 住宅商材はもちろん、ユーザーにアンケートを取らせて頂いたり、直接お話を伺ったりすることができるのですが、私が携わっているパブリック商材は中々難しく、設計者やお施主様へのヒアリングを通じて意見を聞かせて頂いているような状況です。

今和泉 私も設計をするので、メーカーの開発者の方と話をする機会があるのですが、カタログでは分からないリアルな話を聞けると、色々なアイデアが出てきます。開発者の方が設計者や施主、リアルユーザーと関わる機会は大事だと思います。

■社会課題の解決につながる商材の開発

今和泉 開発する際に、近年の社会の変化などがテーマになる事があると思います。気にしているテーマはありますか。

西田 人手不足の問題です。施工される方が少なくなっているため、現場で経験が少ない施工者でも短期間で施工できる等、省施工の観点はとても大切だと考えています。併せて、清掃員の方も減っているため、メンテナンス性も今後更に重要になってくると考えています。環境という側面からは、LCAの義務化があげられます。

今和泉 省施工という観点は印象的です。そしてLCAの観点。超高層等の規模の大きな施設になると、数が多くなるため、付加価値がコスト比較以上になる可能性もありますね。

西田 躯体が大きな割合を占めているので、商材がどのくらい影響あるのかはわかりませんが、重要な視点になると思っています。

■「誰もが使う」という難しさ

今和泉 万博ではトイレがピックアップされることも多く、世間でも賛否両論の意見が交わされました。社内ではどんな印象だったのでしょうか。

西田 万博のトイレは、現場事例が社内でも共有され、社員も皆注目

していました。特に「誰でもトイレ」については、注目されていたと思います。万博ではもちろんですが、それに限らずインバウンドなど外国から来られる方が増えていて様々な背景を持つ方がパブリックトイレを使うことが多くなっていると思います。それに加え障がい者の方等、様々な特性をもった方を尊重するという「誰でも」という視点は今後の社会で重要になってくるという印象を受けました。万博以前の事ですが、女性の上司と誰でもトイレを視察したことがありました。その際に、便器に尿垂れがあり、嫌な顔をしていた事を覚えています。「誰でもトイレ」では座って使用する等、使う側のリテラシーの問題が重要だと感じました。「誰でもトイレ」だけの話ではありませんが、パブリックトイレをいかに綺麗に保つかという点においては、リテラシーが広まる事は大事だと思います。

今和泉 以前、会社の上司に、汚垂石は黒御影石を選ぶと尿垂れの際に尿が虹色に光ってしまうので注意が必要という話を聞きました。

西田 石は水分を吸収しやすいので、そういった事がありますね。汚れを目立たなくするという事は、汚れに気づかないということですから、知らぬうちに汚れを踏んでしまうということもある。ユーザーによっては、その方が不快に思われるかもしれないという観点もあります。

今和泉 パブリックトイレ床材の開発ならではの深い視点ですね。誰もが使うからこそ、異なる衛生観念にアプローチしなければならない難しさを感じます。

■AIを活用した暗黙知と形式知のサイクル

今和泉 AIが広く使われるようになっていますが、現在使われている事や、可能性を感じている事がありますか。

西田 製造の話にはなってしまうのですが、機械学習を活用しています。TOTOマテリアで生産している小便器下のタイルであるハイドロセラフロアPUは大きな陶板に色を付けるのですが、インクジェットで印刷する際に、温度や湿度等のその日の条件に結構左右されてしまう。今までは経験豊富な技術者の勘みたいなものに頼って時間をかけて先発試験というのを行っていたのですが、今は機械学習によってインクジェットの出力をコントロールしています。

■インタビュー後記

社会変化の影響を多く受ける技術開発の分野において、AIや機械学習等を積極的に取り入れながらも、現地で得られる経験や意見を大事にしている姿勢がとても印象的であった。職人気質が息づくものづくりが、今後の技術進展と共にあり続ける未来を感じる事が出来た。 (今和泉／編集委員・鶉飼)



今和泉 AIを活用すると、それっぽい答えのようなものが提示されて「おっ」と信用してしまう。これまでの技術者の勘とAIの情報をどのように合わせているのですか。

西田 全てをAI任せにしないという事は注意していますね。きちんと人の目で見ながらというところは重視していると製造からは聞いています。開発分野で可能性を感じているのは、社内の過去の技術検討やデータをラグ等で管理して、AIで回答ができるようにする仕組みです。社内の属人的な経験や勘等のようなものも、データと一緒に共有できることが開発という視点においても大きなメリットになります。

今和泉 技術者の世界は、暗黙知として知られていたものを形式知に持って行って、そこから暗黙知がまた生まれるというサイクルのようなものがあると思うのですが、暗黙知がAIによって形式知にすることで使えるようになるというのは、とても面白いですね。

西田 「三現主義」というのですが、「現場」「現実」「現物」に答えがあると、よく上司からも言われています。AIによる効率化も大切ですが、三現主義のような、人ならではの感覚を残した上でAIと組み合わせていくという事が重要であると思います。

■丁寧な対応でファンを増やす

今和泉 TOTOさんはアイドルで例えるなら、地下アイドルとは一線を画する王道アイドルグループのようなイメージをもっています。王道アイドルがシェアだけでなく、3Dプリンターのような技術で顧客の個別のニーズにアプローチして丁寧なファンサービスをしたら、それこそ「最強のアイドル」になるのかなと思います。

西田 TOTOのファンを増やしたいというのは、私の願いでもあります。これまでの安全性や品質のまま、個別対応が柔軟になると、より社会に貢献できるのかもしれない。お施主様やご利用される方が満足いただける製品を作っていきたいという思いが根本にありますので、設計者や施工者の方と一緒にあってより深く社会にアプローチしていきたいですね。

今和泉 三現主義の視点や技術者ならではの解像度の高いものの見方がとても印象的で、今後の御活躍に期待しております。

名古屋市・「コトづくり研究所」

愛知工業大学工学部建築学科・教授 中井孝幸

■東海特集号テーマ：

●建築がつなぐ都市、地域、まちの記憶

2017年度から東海特集号で「建築がつなぐ都市、地域、まちの記憶」として、第1回「アクテノン」、第2回「大杉谷自然学校」、第3回「じゅうろくてつめいギャラリー」、第4回「名古屋市東山植物園温室前館」、第5回「鴨江アートセンター」、第6回「岡崎信用金庫資料館」、第7回「桐林館」、第8回「碧南市藤井達吉現代美術館」を取り上げた。

転用を繰り返しながらも使い続けられているアクテノン、廃校になった小学校を地域総合センターとして活用している大杉谷自然学校、銀行支店を地域にギャラリーとして開放したてつめいギャラリー、東海支部と縁の深い一圓俊郎氏が設計に携われた東山植物園温室前館、警察署をアートインレジデンスとして活用している鴨江アートセンター、地域のシンボルとして愛されている岡崎信用金庫資料館、木造校舎を筆談カフェとした桐林館、増改築を繰り返して街並みが形成されている碧南市藤井達吉現代美術館を対象に、文化財としての活動やまちづくり、景観の視点からレポートし、見学記も含めて様々な視点から論考を行ってきた。

●東海支部：愛知、三重、岐阜、静岡

今まで取り上げた施設は、愛知が4回、三重2回、岐阜1回、静岡1回なので、第9回目の施設は愛知県以外でも検討したが、今回は「愛知県」にすることにした。私自身が活用事例に明るくないため、今回は椋山女学園大学の橋本雅好先生と建築家の植村康平氏にご相談させて頂いた。

橋本先生とは日本建築学会東海支部の委員会などで何度も一緒にすることがあり、また植村氏には本学で非常勤講師をお願いしており、以前からよく存じ上げている。お二人とも名古屋市名東区にある西山商店街において、公私にわたり様々なまちづくり活動を実践されており、「建築と社会」東海特集号の「まちの記憶」シリーズをお話したところ、ご自身が企画・設計を担当された、西山商店街の駄菓子屋から転用した「コトづくり研究所」をご紹介頂いた。ここで、ご相談とともに、原稿執筆をご快諾していただいたお二人に深謝いたします。

■コトづくり研究所

●整備の経緯（ニシヤマネガヤからコトづくり研究所へ）

植村氏は西山商店街の一角で取り組んだ「ニシヤマネガヤ」の計画に関わって8年目を迎え、2019年に1階に焼菓子専門店、コーヒーショップ、花屋、2階にキッチン付きレンタルスペース、ショールーム、植村氏の設計事務所が入る多機能融合型の居場所づくりから、この一連の整備が始まったといえる。その翌年に、裏にある既存の倉庫を転用した「未完美術館」、2023年に「駄菓子屋水都軒」を移転して、空いた交差点の角地の店舗跡に「コトづくり研究所」がリニューアルオープンした。

「コトづくり研究所」には、橋本先生をはじめ、地域住民や学生たちもDIYに加わりながら、1階に料理教室ができるキッチンスタジオ、店頭販売ができるカウンターとレンタルスペース、2階にはシェアハウスが整備・計画された。その後も、商店街における多様な居場所づくりは続いており、道路を挟んだ向かい側に、会員制の私設図書館「暮らせる図書館」も開設するなど、現在も増殖中である。



図1 コトづくり研究所・ニシヤマネガヤの外観（2025年8月）

●成長する有機体としての建築群

今まで取り上げてきた作品は、どちらかと言えば、建物の保存が多かったが、西山商店街での取り組みは、まさしく「コトづくり」である。

私の専門の図書館は、「成長する有機体」とよく言われる。西山商店街で実践されてきた取り組みは、地域の外部からだけではなく、内部から生じた小さな活動が連鎖してつながり、まるで生命体のような「成長する有機体」として、多様な居場所の生息域を商店街や地域に広げている。

●様々な立場からの論考

特集号としては、毎回様々な視点から一つの建物を取り上げたいと考えている。今回は、整備に深く関わられた椋山女学園大学の橋本雅好先生と建築家の植村康平氏に、今まで取り組んでこられた実践やまちづくりの視点から執筆していただく。現地取材による見学記などの報告を中井が担当する。地方都市における街中にある建物の増改築による保存活用の実践から、地域の歴史や文化の継承と有機的に広がるまちづくりの取り組みを公共や民間といった枠を超えて、論考していきたい。



なかい・たかゆき

1967年大阪府生まれ/1991年三重大学工学部建築学科卒業/1993年三重大学大学院工学研究科修士課程修了/1993年三重大学工学部建築学科助手/2001年安井建築設計事務所名古屋事務所/2005年INA新建築研究所名古屋支社/2006年愛知工業大学講師/2008年同大学准教授/2016年同大学教授、現在に至る

常を彩る仕組みから考える商店街再生 ～コトづくり研究所という実践～

植村康平建築設計事務所代表／ニシヤマナガヤ管理人 植村康平

■はじめに

コトづくり研究所が位置する西山商店街は、名古屋市名東区の住宅地にある小さな商店街である。昭和36年、名古屋東部の都市拡張とともに誕生し、周辺に広がる集合住宅とともに地域の日常を支えてきた。しかし、生活様式の変化とともに来街者は減少し、空き店舗が目立つようになっていた。

私がこの商店街に関わるようになった背景には、建築に携わる中で、次第にまちづくりや地域との関係性に関心を持ち始めたことがある。建築を単体の建物として完結させるのではなく、使われ続ける過程や運営のあり方まで含めて引き受けることができないか、という問題意識を抱くようになった。その問題意識の延長線上で最初に形になったのが、設計者兼事業者として関わったニシヤマナガヤである。商店街の中に身を置き、実際に場を運営しながら、建築がどのように使われ、更新され、地域の日常と結びついていくのかを実践的に考える経験を積み重ねてきた。

そして、その実践をさらに推し進めるかたちで構想したのが、設計者として関わったコトづくり研究所である。本稿では、西山商店街における一連の取り組みを振り返りながら、ニシヤマナガヤで得られた知見がどのようにコトづくり研究所へとつながっていったのか、そして「コト」から商店街再生を考える試みが、どのような必然性のもとで生まれたのかを整理していく。



名古屋市名東区にある、全長100m程の小さな商店街



2019年に誕生した複合施設「ニシヤマナガヤ」

■ニシヤマナガヤの構想と実践

西山商店街との関わり の 起点となったのが、名古屋市主催の「ナゴヤ商店街オープン」である。空き店舗を活用し、新たな実店舗の立ち上げを実践的に試みるこの企画の第一回開催地が西山商店街に決まっていた。私は当時、同じ名東区に暮らしており、生活圏にある商店街で行われるこの取り組みに、自ら応募するかたちで参加した。

商店街オープンを通じて、空き店舗は単なる余剰空間ではなく、実際の高い活動が入り込むことで、地域の日常と結びついた価値を生み出し得る場であると実感した。一方で、実店舗として立ち上がった活動が、その後どのように商店街の日常の中に根づき、継続していくのかという点には、別の難しさがあることも見えてきた。立ち上げの瞬間だけでなく、その後の時間をどう支えるかという視点の必要性が、次第に意識されるようになった。



第一回ナゴヤ商店街オープン・ワークショップの開催風景



ワークショップ内で提案したニシヤマナガヤの原案模型

こうした問題意識の中で構想したのがニシヤマナガヤである。約140平方メートルの建物を複数の小さな区画に分け、焼菓子屋、珈琲屋、花屋、レンタルスペース、設計事務所など、用途や来訪目的の異なる機能を組み合わせた複合施設とした。単一用途の店舗とするのではなく、関わり方の異なる人々が時間帯をずらしながら集うことで、商店街との接点が日常的に生まれる構成を意図している。

「街のリビング」というコンセプトのもと、ニシヤマナガヤはそれぞれの店や活動への関わりをきっかけに、人が自然と集い、商店街との距離が日常の中で縮まっていく場であることを目指してきた。明確な目的を持って訪れる人だけでなく、用事のついでや何気ない立ち寄りを許容することで、商店街との関係性が無理なく重なっていくことを重視している。

私はこのプロジェクトに、設計者であると同時に事業者、そして管理人として関わってきた。設計と運営を切り離さずに引き受けることで、建築は完成した時点で完結するものではなく、使われ方や関係性の変化に応じて更新され続ける存在であるという認識が、実感として育っていった。



1階には花屋、珈琲屋、焼菓子屋が共存する



1階のイートインスペースは3店舗で共有している



2階は設計事務所とキッチン付きのレンタルスペースが共存する

ニシヤマナガヤ開設以降、商店街では食パン屋や八百屋、カレー屋、音楽教室に加え、本屋、ドッグサロン、私設美術館、私設図書館、ドーナツ屋、中華料理屋など、さまざまな業態の店舗や活動が立ち上がった。中にはすでに姿を消したのものもあるが、それぞれの試みは街の経験として蓄積され、商店街の空気や関係性に確かな痕跡を残している。その過程で私は、いくつかの店舗や活動の設計や立ち上げに関わり、建築を通して事業の初動や運営のあり方を共に考える経験を重ねてきた。こうした関与を続ける中で、個々の店舗を支えるだけでなく、活動同士を緩やかにつなぎ、関わりが循環していくための「次の場」が必要だという認識が明確になっていった。ニシヤマナガヤは、そうした実践の集積として、商店街における次の取り組みへと視野を広げていくための土台となっていった。



2019年に誕生した、倉庫をコンバージョンして作られた未完美術館

■商店街再生を「コト」から考える

コトづくり研究所は、商店街の角地にあった飲食店の閉店と駄菓子屋の移転に伴い空き店舗となったことをきっかけに構想された。商店街の中でも人の流れが集まりやすい場所でありながら、これまでの使われ方では、街に対してやや閉じた印象を与えていた建物である。ここに、ニシヤマナガヤで得られた知見を踏まえ、商店街との関係性をより立体的に編み直す場をつくることを考えた。



改修前の様子



改修後の様子

事業の中心に据えたのは料理教室である。この料理教室は、約一年間ニシヤマナガヤ内のレンタルスペースを拠点に継続的に実施され、参加者や内容の広がりといった点で一定の手応えを得ていた。一過性の企画ではなく、日常の営みとして成立し得る活動であることが確認できたことが、専用の場を設ける判断につながった。

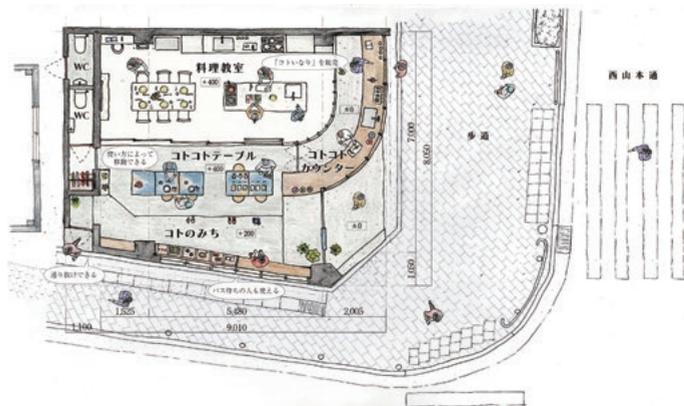
設計にあたっては料理教室という核となる活動を中心に据えつつ、それを取り囲むように複数の関与のレイヤーを重ねていく構成を採用



事業の核であり、プランの中心に配置されたキッチン

ている。

まちなみや商店街に対して閉じ気味だった既存建物に「コトのみち」と名付けた通路を通し、新たな動線をつくった。商店街を行き交う人々を、曲線状の「コトコトカウンター」によって室内へと引き込み、そのまま裏側へ抜けられる構成とすることで、通過と滞在が緩やかに交差する空間としている。



複数の関与のレイヤーが重なり合い、商店街に対して開かれた構成



アール形状のコトコトカウンターが、人の流れを建物内へ引き込む

この「コトのみち」に沿うかたちで、レンタル可能なコトコトカウンターやコトコトテーブルを配置し、その中心にキッチンを据えた。料理教室を行う場であると同時に、ミニマルシェやワークショップなど、外部の人々が短期的に関われる余地を残すことで、関与の入口を複数用意している。また、夜間には角地の建物としてまちなみに明かりを灯し、商店街の風景の一部として振る舞うことも意識している。



キッチンの扉を開放することで、空間を一体的に利用できる

さらに、商店街との関係性を一過性のものにしないため、2階は女性限定のシェアハウスとした。訪れる人、使う人に加えて、暮らす人が加わることで、商店街との接点が時間的にも質的にも重なり合う構成となっている。イベントと日常、外部と内部、活動と生活のあいだを往復できる状態をつくるのが、コトづくり研究所の設計における重要なテーマであった。こうした構成は、既にある日常の延長線上に、ゆるやかな関与の余地を差し込むことを意図している。建物は目的地ではなく、関係が立ち上がるプロセスを支える器として構想した。



商店街に暮らしながら関わる住人たちのシェアハウス「へへへのおへや」

コトづくり研究所は、単に新しい機能を付加する建築ではなく、商店街の中に「関わり方の選択肢」を増やすための仕組みとして構想されている。ニシヤマナガヤで見えてきた、コンテンツごとに異なるファンが生まれるという特性を、より意図的に受け止め、循環させるための次の段階として位置づけられている。

■終わりに

ニシヤマナガヤからコトづくり研究所に至る一連の取り組みは、はじめから明確なゴールや完成像を定めて進めてきたものではない。商店街という日常の場に関わり続ける中で、その時々には立ち現れる課題や手応えに回答しながら、試行錯誤を重ねてきた結果として、現在のかたちに至っている。

その過程で一貫して意識してきたのは、建築を単なる空間の整備として捉えるのではなく、人の関わりや活動が無理なく続いていくための「仕組み」として構想することであった。コトづくり研究所は、商店街に新しい価値を一時的に持ち込む存在ではなく、既にある日常の延長線上に、関与の余地や選択肢を重ねる場として位置づけられている。

また、これらの実践は私一人で成立したものではない。商店街のオーナーや事業者による理解と協力をはじめ、施工を担った作り手、不動産の調整や運営に関わる専門家など、多くの人々の関与によって支えられてきた。さらに、大学の研究室や学生たちも、設計やDIYといった実践を通してプロジェクトに関わっている。なかでも椋山女学園大学橋本研究室とは、さまざまな形で協働し、学生たちは場づくりの実作業を通してプロジェクトを継続的に支えてくれた。こうした複数の立場が重なり合うことで、商店街という日常の場に持続的な変化が生まれてきたと考えている。



継続して商店街の活動を支えてくれている橋本先生と学生の皆さん



うえむら・こうへい

1985年愛知県生まれ／一級建築士／2008年、愛知淑徳大学現代社会学部現代社会学都市環境デザインコース卒業／2015年、植村康平建築設計事務所 開設／ニシヤマナガヤ 管理人／愛知工業大学、大同大学、椋山女学園大学、愛知淑徳大学 非常勤講師

みんなで、たのしいコト、あたらしいコト、おいしいコト、 したいコト、をつくる「コトづくり研究所」

椋山女学園大学生活科学部生活環境デザイン学科・准教授 梶本雅好

■学生たちを主体とした「自主施工」がもたらす効果

2019年の「ニシヤマナガヤ」から始まり、2020年の「未完美術館」、2023年の「駄菓子屋水都軒」、そして、2024年の「コトづくり研究所」に至るまで、4つのプロジェクトに深く関わってきた。これらのプロジェクトに共通する最大の特徴は、すべての施工段階において椋山女学園大学の学生たちを主体とした「自主施工」を取り入れた点である。この取り組みは、単なる施工の省力化やコスト削減を目的としたものではなく、学生たちにとって実践的な学びの場を提供し、地域との関係性を構築することを目指した教育的・社会的実験であった。

具体的には、ニシヤマナガヤでは店内什器の組み立てや床面塗装といった基本的な施工作業を担当し、未完美術館では展示壁面の施工や塗装・装飾までを学生たちが手掛けた。駄菓子屋水都軒では、塩ビパイプを用いた店内什器の設計から施工までを学生たちが一貫しておこない、コトづくり研究所においては、店内設計、床面貼り施工、さらには、ロゴデザインに至るまで、空間づくりの全過程に学生たちが関わった。このように、単なる作業者としてではなく、設計・デザイン・施工のすべ

てに主体的に関わることで、学生たちは建築や空間デザインに関する知識と技術を総合的に学ぶ機会を得ることができた。

さらに、この「自主施工」は教育的効果にとどまらず、西山商店街や地域に対しても大きなインパクトをもたらした。「自主施工」を通じて、学生たちは西山商店街や地域コミュニティと積極的に交流し、それぞれのプロジェクト完成後には学生たち主催のイベントやワークショップを開催するなど、地域に新たな賑わいを生み出した。これにより、従来の来街者層に加えて新しい層の来訪が促され、西山商店街の活性化にもつながった。また、学生たちが地域に愛着を持つことで、卒業後も地域に関わり続ける人材が育成される可能性も高まり、持続的な地域連携モデルとしての価値も見出せた。

この一連のプロジェクトは、建築教育と地域活性化を同時に実現する実践的な取り組みであり、学生たちの創造力と地域の資源を融合させることで新しい価値を生み出すことができると感じさせてくれた。今後は、さらに発展させ、他地域への展開や教育プログラム化を図ることで、地域と大学の協働による持続可能なまちづくりの可能性を広げていきたい。

ニシヤマナガヤ

壁や家具の塗装、テーブル等の制作、建物の案内サインの制作などを、近隣大学の学生と主に行った。



ニシヤマナガヤの自主施工の様子

駄菓子屋水都軒

主に壁や天井の塗装、塩ビパイプと木板を組み合わせた家具の制作を行った。地域の人々に向けた塗装ワークショップも開催。



駄菓子屋水都軒の自主施工の様子

未完美術館

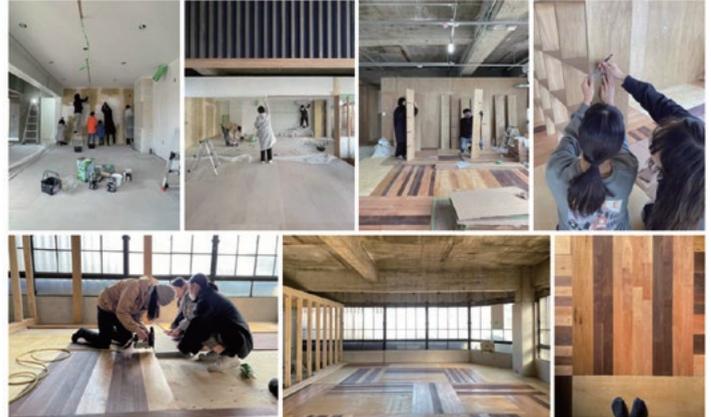
展示空間の壁の下地の組み立てから塗装まで、全ての過程を大学生を中心に行った。



未完美術館の自主施工の様子

コトづくり研究所

1階の壁や天井の塗装、2階の床仕上げ工程を行った。地域の人々と一緒に塗装ワークショップを行い完成後の想像を膨らませた。



コトづくり研究所の自主施工の様子

■コトづくり研究所で生まれている「コト」とこれから

「コトづくり研究所」のコンセプトは、「みんなで、たのしいコト、あたらしいコト、おいしいコト、したいコト、をつくる研究所」であり、2024年にオープンして2年が過ぎ、多彩なアイデアが形となり、地域に新しいにぎわいをもたらしている。

例えば、西山商店街では毎月第一土曜日を「わくわくサタデー」と名付け、各店舗が趣向を凝らしたイベントを開催している。コトづくり研究所の「コトコトカウンター」では、オリジナル惣菜「コトいなり」などを販売し、季節の食文化を楽しむ機会を生み出し、「コトコトテーブル」では、フラワーアレンジメントのワークショップをはじめ、多様なテーマに合わせた体験型イベントがおこなわれている。

他にも、西山学区での夏の盆踊り大会に合わせた飲食販売や、ハンドメイドの小物やアクセサリーの小さなお店が並ぶコトコトマルシェなど、地域の人々が気軽に参加できる企画も多数実施されてきた。また、2025年11月には、西山商店街をメイン会場とした「なごや裏山芸術祭2025」が開催され、「コトコトカウンター」はレセプションとして、2階の「へへへのおへや」は展示スペースとして活用され、地域とアートの融合を実現し、こうした取り組みは、地域の魅力を再発見し、人と人をつなぐきっかけとなっている。

コトづくり研究所は、食・クリエイティブ・アート・コミュニティなどが交差する多様なアイデアを形にする社会実験の場であり、学生たち、西山商店街や学区、クリエイター、地域の人たちが集い、やりたいことを試し、実現できる場所として、多様なニーズに応えていきたいと考えている。

今後、コトづくり研究所はさらに進化し、単なるイベントスペースではなく、地域の未来を共に描くプラットフォームとなっていく。ここで生まれる「コト」は、人と人をつなぎ、地域を元気にし、これからも、みんなで「たのしいコト」「あたらしいコト」「おいしいコト」「したいコト」をつくり続けていく。

最後に、先日あった嬉しいコトをご紹介します。椋山女学園大学から西山商店街へ向かう途中のこと。下校中の西山小学校の児童が、道路の反対側から大きな声で「あっ、コトづくり研究所の人だあ！バイバイ！」と声をかけてくれた。思わず「おー！バイバイ！！」と返したその瞬間、なんだか西山商店街の一員になれたような気持ちになれた。この出来事は、私たちの活動が地域に少しずつ浸透し、子どもたちにも認知されていることを実感できる場面だった。地域連携は、単なるプロジェクトやイベントだけでなく、こうした日常の小さな交流から生まれる信頼や親近感がとても大切であると思う。「コトづくり研究所」では、今後も地域の方々と自然な関わりを重ねながら、西山商店街や大学と連携し、まち全体の魅力を高める「コト」を続けていく。



コトコトテーブルでのワークショップの様子



夏の盆踊り大会に合わせた飲食販売の様子



コトづくり研究所

2024年3月竣工。愛知県名古屋市長区名東本通2-24。
設計：植村康平建築設計事務所＋椋山女学園大学生活環境
ディ残学科橋本雅好研究室
←Instagramはこちら



はしもと・まさよし

1973年 群馬県生まれ／2001年 東京大学大学院博士後
期課程修了／博士（工学）／現在：椋山女学園大学 准教
授、コトづくり研究所 デザインパッサー／2003年 日本
建築学会 奨励賞／2025年 第57回中部建築賞 入選、第
33回愛知まちなみ建築賞受賞

まちをつなげる多機能融合型の居場所づくり ～「コトづくり研究所」～

愛知工業大学工学部建築学科・教授 中井孝幸

●まちに広がるごちゃまぜな居場所づくり

2019年にオープンした「ニシヤマナガヤ」は、何度かお邪魔したことがあるが、「コトづくり研究所」は某審査会のために初めて2025年8月にお伺いした。設計者の植村康平氏と内藤菜氏、椋山女学園大学の橋本先生に建物を案内してもらいながら、活動の様子などの聞き取りを行った。

巻頭でも紹介したが、名古屋市内の西山商店街の角地で、1階が料理教室とレンタルスペース、2階はシェアハウスにリノベーションした建物である。料理教室には固定客が多いため、多様な人が参加できるように、店頭販売や物販ができるレンタルスペースを計画したとのことであった。

2階のシェアハウスは、商店街に関わりを持ちたい女性3人限定でスタートしたが、なかなか人が集まらないとの事で、2025年8月時点で定住者はいなかった。今は学生が貸アトリエのような形で利用しており、今後の活用については、様子を見ながら柔軟に対応していくとのことであった。

●キッチンスタジオが人とコトをつなぐ

この商店街の周辺は、UR都市機構の集合住宅が立ち並ぶなど、転入・転出者の多い地区となっている。隣のニシヤマナガヤ2階のキッチン付きレンタルスペースでも行われていた料理教室が、コトづくり研究所では月に3週間のレッスン、1週間は準備で、週に4～5日開催されている。この料理教室への参加者を軸に、ワークショップや物販などの多彩な活動が、1階レンタルスペースで展開しているとのことであった。

また、交差点の角地に位置しているため、夜は料理教室に明かりが灯ると、ガラス張りの建物内で人の活動している様子が、バス待ちや信号待ちの人たちからもよく見え、優しく街を照らしている。コトづくり研究所の前を通り過ぎる人たちに、視覚と嗅覚で興味と関心のきっかけを与えるなど、人とコトをつなぐ新しい商店街の「顔」となっているといえる。

●地域に愛され続ける居場所として

本施設の隣の1階に焼菓子、珈琲、花屋の専門店、2階にレンタルスペースと設計者自身の事務所が同居する「ニシヤマナガヤ」の計画に8年前から関わっていることが、最も特徴的な取り組みといえる。商店街の一員として「未完美術館」、「駄菓子屋水都軒」、「コトづくり研究所」の計画にも携わり、現在も空き店舗を会員制の私設図書館の「暮らせる図書館」に改修するなど、地域の大人や子どもたちの居場所づくりを実践しながら活動が増殖している。まさに、地域内で「成長する有機体」ともいえる。

昨今、やや奇抜なデザインに偏重した刹那的な建築が多い中、このように地域に建築家と大学教員が深く関わり合いを持ちながら、三位一体となって、地域の課題に一つずつ丁寧に取り組む姿勢を、改めて敬意を持って評価したい。今後、皆様の益々のご活躍を心より祈念しています。



写真1 青いタイルが印象的な出入口 (2025年8月)



写真2 キッチンスタジオから東側の通りを見る (2025年8月)



写真3 帰る・くつろぐ・本がある「暮らせる図書館」 (2025年8月)



なかい・たかゆき
前掲P67

都市に居心地の良い場所を生み出しながらノマドする、新しい都市の新陳代謝モデル 旧教育館跡地暫定活用事業： SLOW ART CENTER NAGOYA

愛知県名古屋市

安井建築設計事務所
杉木勇太

スローアートセンターとは

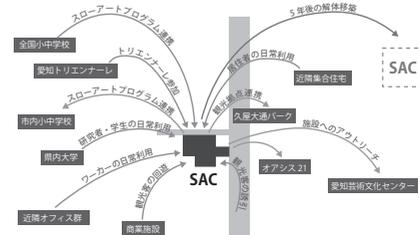
名古屋市栄にある市有地の5年間の暫定活用プロジェクト。アート活動を通じて場の価値や文化を共有し、この場に愛着を持った関係人口を生み出すことで、5年後の再開発事業へ向けた土地の文化継承を目指している。また5年後にはプログラムを継承しつつ建築が都市を移動していくスキームを提案しており、それこそが都市に「居心地の良い場」をつくりだしていく、新しい都市の新陳代謝モデルだと考えている。

解体移設可能なリユース建築

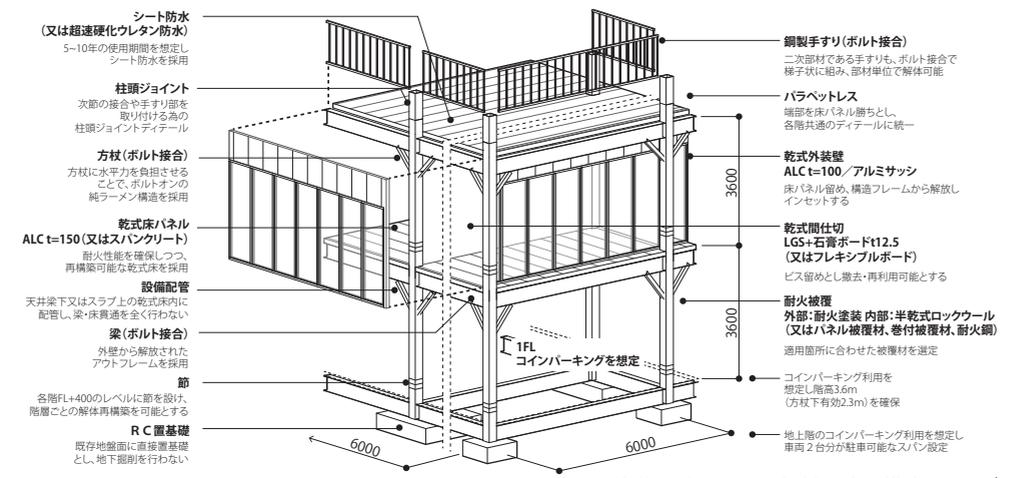
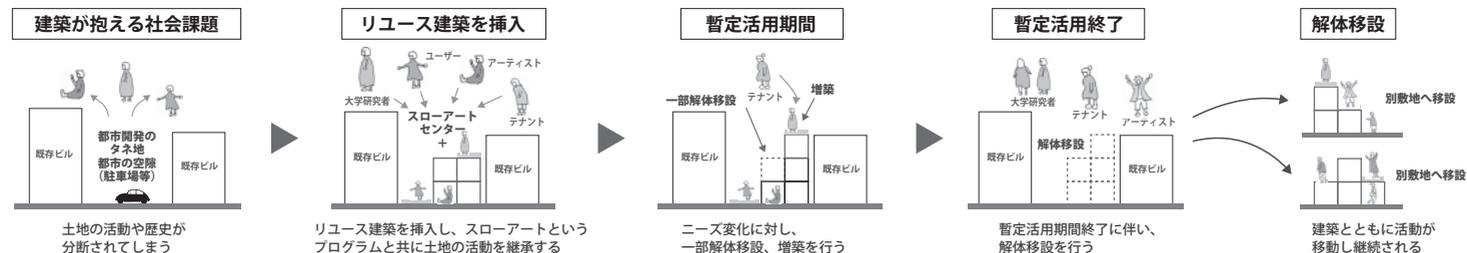
本敷地のように防耐火要件の厳しい都心部で5年～10年というタイムスパンで更新される再開発用地は、仮設建築やプレハブ建築では対応できない。都市更新におけるこれらの課題に対し、土地の形状や大きさに合わせて形を変えたり/分裂したり/統合しながら別の土地へ移動するリユース建築モデルを提案する。具体には、コインパーキングに移設されることを想定した平面・断面スパンの採用、構造躯体の全ボルト接合、外装材や床材の乾式工法採用などである。これらの思想は2次構成部材となる階段や手すり、内装材等にも反映され、建築物全体において部材単位での解体/再構築を可能とした。



多様なアートプログラムが日々展開されている



街の回遊性と循環をつくり、関係人口を増やすモデル



解体移設するための部材選定と構成イメージ



1階レストランのサッシは開放でき、地域との接続を図る



2階スローアートラボで行われるワークショップで地域住民やワーカーとのコミュニティをつくる



ホームとしての居心地 愛知大学豊橋キャンパス Center Bldg.

愛知県豊橋市

日建設計

奥宮由美・岩間 愛・向後美穂

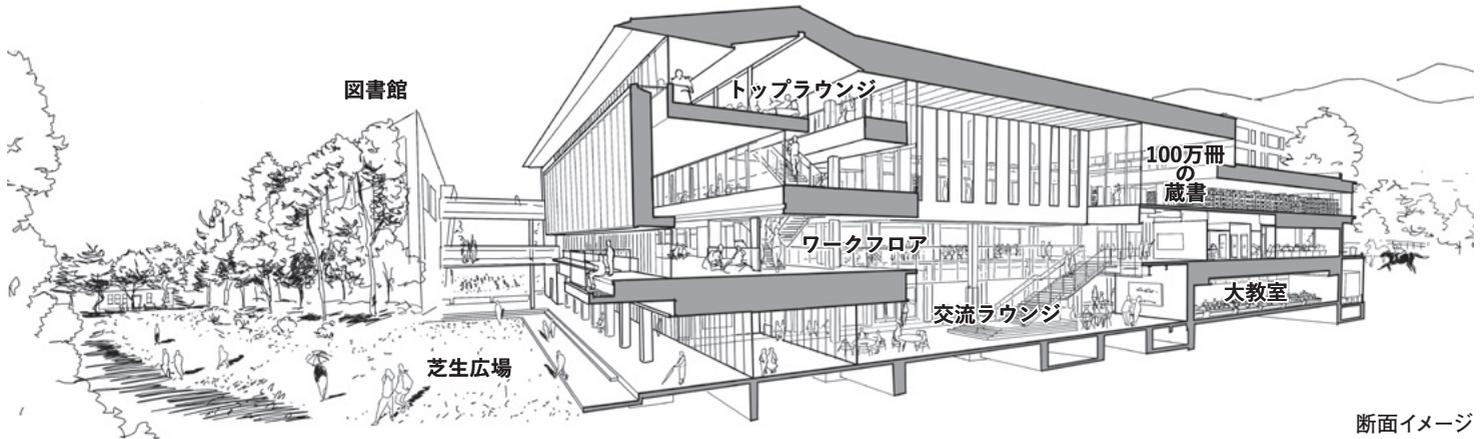


思い思いに過ごす学生達

歴史あるキャンパスの中心に、学生の「居場所」となる複合施設を計画した。図書館と連携する約100万冊の蔵書を3階に持ち上げ、1、2階を芝生広場につながる学びと交流の場とした。1階は多人数が行き交う大教室と交流ラウンジを、2階は情報と言語センターを有するワークフロアを一体的に配した。3階の蔵書空間を見下ろすことができる4階トップラウンジからは、学内外の景観が四周に広がっている。歴史と緑の風景を取り込み連続した空間構成により、キャンパスの全体像を認識する中で、点在していた様々な行為が心地よくシームレスにつながることを意図した。

そして、利用する学生の多様な人格とふるまいの受け皿として、また将来への変容性を可能とするために、本計画では、多様で雑多な状態を抱擁するラフさをベースとし、それらを編集していくデザイン手法を採った。家具や仕上げ材には、解体校舎の造作材料や、キャンパス内の伐採樹木を活用した。場所の記憶を素材の手触りとして継承し、時間の中を持った家具を組み合わせることで、ホームのような多種多様な空間づくりを目指した。1階のトイレは、男女比率の変動や利用形態の多様化に対応しつつ、滞在を許容する居場所として設えた。高い遮音性によって音への不安を低減し、トイレ空間を単なる通過点から、ひとりで過ごし気持ちを整える場へ引き上げている。

結果として、学びの器でありながら、居場所としての確かな安心感「芯のある居心地」を備えるに至った。学生が自分のペースを取り戻し、次の活動へ移行するための、キャンパスの新しい拠点である。



断面イメージ



緑の芝生広場に面した吹き抜け空間

空間尺度と材料の対比がうむ居心地

愛知製鋼白扇寮

愛知県東海市

竹中工務店
吉田 敦

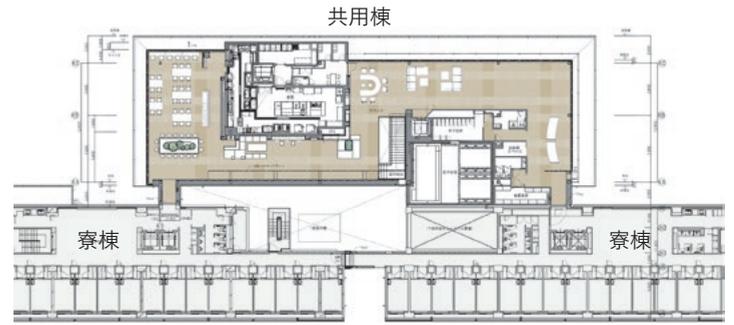
製鉄業を中心とした工場が建ち並ぶエリアに建つ企業独身寮の計画である。自社企業の鉄をつかった企業ブランディングを担う空間であり、一方で若手社員の寮生活の中心となる空間でもある。

寮室はプライバシーを確保するミニマムな個室として最大限計画し、集まって住むことで得られる豊かな共用部を持つことで家の中で公私を自由に行き来するような寛容さを持つ寮を目指した。

寮棟部分に隣接して配置された共用棟には食事や入浴といった生活基盤となる機能がおかれ、そこから派生する自由なコミュニケーションを展開するための余白スペースを豊かに設けた。一つの大きな空間でありながら雁行した空間で場所の個性をつけ、更に多様な利用人数に応じたヒューマンスケールの空間を大きな家具として計画した。

また、隣接する都市公園の自然を引き込むように、人の居場所に木質や緑化を纏わせることで工業的なモノトーンの世界に温かさや優しさを誇張する居心地をつくり込んだ。

空間スケールの対比・材料特性の対比により、この計画ならではの個性を生かした居心地を醸造し、企業寮における生活の豊かさづくりを行った。



共用棟2Fラウンジ平面図



外部空間が引き込まれるように配置された鉄質インテリアの中の木ベンチ



開放的なラウンジ空間に配置された大小様々なヒューマンスケールの居心地をうむビッグファニチャ



タイル目地床吹出しによる居住域空調

NGK Collaboration Square DIVERS

愛知県名古屋市

日建設計

山上直哉・高井智広

外部との協業を促進するイノベーション施設である。本計画では、建物中央に吹抜を設け、上下階の活動が相互に感じられる空間構成とした。吹抜空間の空調には、5mmのタイル目地を吹出し口として活用した床吹出し方式を採用し、意匠性を損なうことなく居住域空調を実現している。床は600mmの二重床とし、床下空間を空調チャンパーとして併用することで、居住域のみを効率的に空調している。

竣工後の実測では、快適性指標であるPMVが±0.5の範囲に収まり、良好な室内環境性能を確認した。

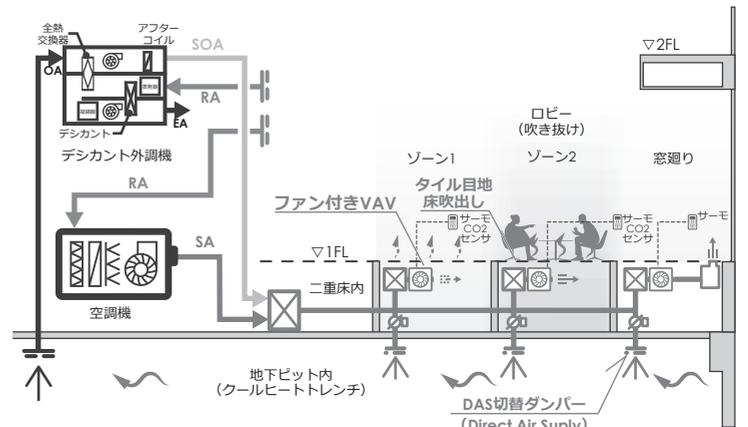
設備計画では、二重床内に設置したファンユニットにより、利用状況に応じてゾーン単位で空調制御できる点が特徴である。さらに、デシカント外調機により効率的に除湿した外気を供給することで、低湿度で快適かつ健康的な環境を維持している。

また、外気が冷涼な季節には、直下のクールトレンチからファンユニットを介して冷たい外気を直接取り込む外気冷房方式を開発し、「Direct Air Supply システム」として提案している。

その他、太陽軌道にあわせた環境ファサードや自然換気の採用等、積極的な環境配慮により、Net-ZEB、BELS☆☆☆☆を達成した。



太陽軌道にあわせてデザインした環境ファサードが特徴的な外観



空調システムフロー図



内部のアクティビティと建物周囲の緑が感じられる吹抜空間は、タイル目地吹出し空調により、床や天井面を可能な限りシンプルに計画

小さな都市のような空間

SOUPタウン

愛知県豊田市

ナノメートル アーキテクチャー
野中あつみ・三谷裕樹

withU architects
一級建築士事務所
鵜飼浩平

SOUPタウン福祉複合施設は、豊田市松平地区の山あい建つ、有料老人ホーム、看多機、就労支援施設、放課後等デイサービスからなる福祉複合施設である。高齢化が進む一方で支援が行き届きにくかった地域において、長年福祉に携わってきた株式会社スマイリングが中心となり、「一つの建物で多世代を支える」という考え方を建築としてかたちにした。

施設は、1・3階に高齢者を対象とした施設、2階に就労支援施設を配置した三層構成とし、敷地のレベル差を活かして2階を地域に開かれた場として計画している。従来は閉じがちな高齢者福祉施設に、周辺環境へとにじみ出る表情を与えた。

市街化調整区域における高さ・面積制限に対応するため、有料老人ホームには中廊下型のプランを採用し、壁面を折り曲げることで共用部に「まち」のような広がりをもたせている。居室を「住まい」、共用部を「まち」と捉え直すことで、建物全体を人の営みが重なり合う小さな都市のような空間としている。

用途や関係性を固定せず、多連引戸による可変的な境界を設けることで、世代や立場を越えた偶発的な交流を受け止める構成とした。SOUPタウンは、福祉施設における新たな空間像を提示している。

建築主	スマイリング	所在地	愛知県豊田市
ディレクター	LifeWork	敷地面積	1,409.26㎡
設計・監理	ナノメートルアーキテクチャー 一級建築士事務所	建築面積	811.73㎡
	withU architects 一級建築士事務所	延床面積	2,111.08㎡
感情環境デザイン	エンプラス	構造規模	RC造、地上3階
外構デザイン	ランドスキップ	工期	2024年1月～ 2025年2月
施工	中村組+栄興建設	撮影	ToLoLo studio
構造設計	木下洋介構造計画		
設備設計	明和技術管理事務所		
照明計画	studio tanbo		
コピーライト・グラフィック	188		



2階のメインフロアに導く大階段と利用者の活動が見えるフリースペース



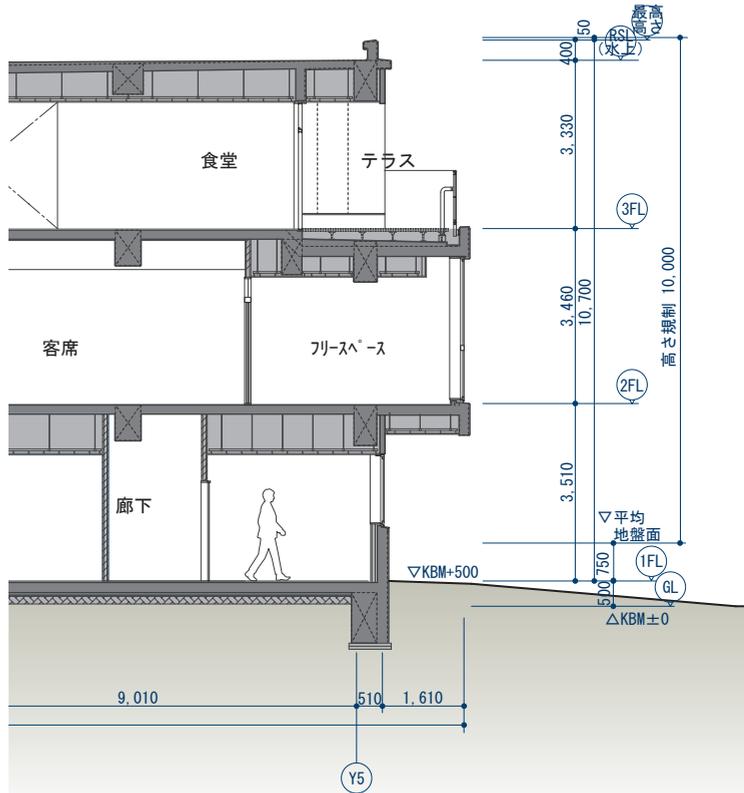
障がい者が主役になる舞台のような厨房(左・中央奥)と多目的な活動ができる客席



1階・3階の有料老人ホームと対比的なまちに開かれた2階就労支援施設



ギザギザに折れ、居室の入居者の個性が「まち」の様に溢れる共用部



断面図 S=1/150

まちを元気にする病院

～医療法人社団恵祐会神埼病院～

株式会社安井建築設計事務所 大阪事務所構造部 平松大知

■はじめに

本プロジェクトは、1960年の開設より佐賀県神埼市で地域に根差した療養病院としての機能を担ってきた神埼病院建屋の老朽化やスペースの狭小化に伴う移転新築計画である。

計画地は神崎市街地と自然豊かな脊振山地の中間地点に位置しており、周辺には田園風景が広がる見晴らしの良い開けた敷地である。その敷地の広さを生かし、階層を抑えワンフロアに関係部門をまとめ、患者サービスの向上を図った。



写真1 北東エントランスアプローチより

■構造計画概要

主体構造は地上3階建ての鉄筋コンクリート造である。長手方向は6.0～6.5mの10スパン、短手方向は7.7m+8.3m+7.7mの3スパンであり、北東に一部3m程度はね出している。明るく眺望のよい空間とフレキシビリティに配慮し、純ラーメン架構とした。

●象徴的なS字外装の支持

建物自体が病院のサインとなるよう伸びやかな外観デザインとした。バルコニーに特徴を持たせたS字外装は、患者とスタッフを花と太陽に模して制作した病院のロゴマークから着想を得た。

上下階でつながるS字のカーブ部分は本体構造の変形に影響しないよう鉄骨造とした。2mおきに鉄骨の片持ち梁を出し、先端に多角に曲げたH形鋼を接合する。片持ち梁部分には外装材の面内変形防止として、振れ止め材を1スパンおきに設けている。



写真2 北側より

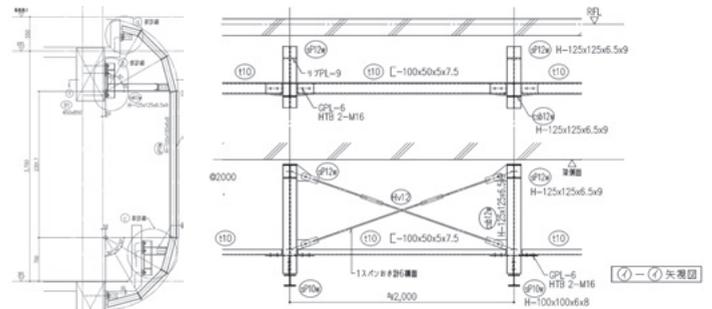


図1 外装受け鉄骨

●視認性・眺望に配慮したリハビリテーション室

2F北東部のリハビリテーション室はスタッフステーションからの視認性に配慮し、中央の柱を無くす計画としている。また、眺望のよい北側に柱芯から3.0mはね出し、その先端に1.5mのバルコニーを設けている。

中央の柱を無くすことで13mスパンとなり、RC梁では天井内に納まらないため、鉄骨小梁で床を支持する計画とした。X10通りの柱がはね出し部を支持する3層の片持ち柱となるため、剛強な片持ち梁とRC小梁で隣接するフレームと接続し、柱の倒れに配慮した。

はね出し先端部のたわみ防止として、開口部の手前に鉄骨柱を設けた。意匠担当者と密な調整を行い、開口部サッシと位置を正確に合わせることで、脊振山地を望む心地の良い空間を実現した。

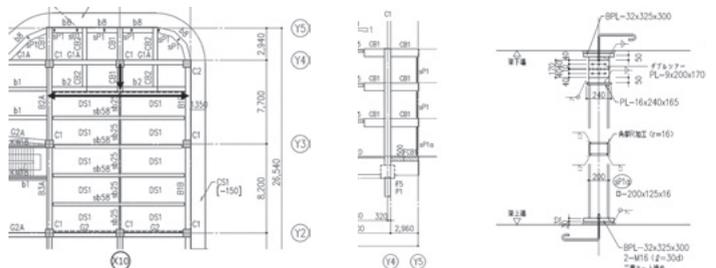


図2 2Fリハビリテーション室の床梁伏図、X10通り軸組図、鉄骨柱納まり図



図3 サッシと鉄骨柱の位置関係

写真3 リハビリテーションより

■おわりに

象徴的な外観と敷地の特徴を生かした心地よい空間を有し、機能的で使いやすい病院が完成した。これからも地域に愛され続け、「まちを元気に」し続けることを願う。

ひらまつ・だいち

1995年生まれ。鹿児島大学大学院修了
2020年 (株)安井建築設計事務所入社

循環型建築を目指す 構造部材リユースの取り組み

株式会社大林組 本社設計本部構造設計部

上級首席技師 岸 浩行・担当課長 寺井千絵

■背景

●はじめに

建設業は、建材の製造から輸送、施工、運用、解体に至るまで、ライフサイクル全体で多くのCO₂を排出している。特にセメント・鉄鋼の製造工程は大きな排出源となっており、業界では削減の取り組みが進められている。今回、当社技術研究所新実験棟「オープンラボ3（OL3）」1期工事では、解体建物の構造部材をリユースすることで、鉄やコンクリート製造時に発生するCO₂を大幅に減らす試みを実施した。

■構造部材リユースの取り組みとその成果

●構造部材のリユースについて

既存建物を残したまま行うコンバージョンやリノベーションは環境負荷低減が期待できるが、柱・梁・床等の構造部材を大きく変更できないため、設計自由度に制約がある。

本計画は、既存建物を部材ごとに解体し、鉄骨やコンクリート部材の形状をほぼ変えずに新築建物へ再構築するものである。解体後の資源リサイクルは広く普及しており、木造建築では伝統的価値の継承を目的としたリユースも古くから行われてきた。しかし、既存建物の鉄骨やコンクリート部材を元の形を活かしたまま新築建物へ転用する取り組みは、日本国内では前例がない。

●OL3におけるリユース材活用事例

本計画は、技術研究所内にある旧実験棟と隣接する鉄工作業場を解体し、両施設の機能を統合した研究棟を新設するものである。リユース材を取り出す対象の既存建物は1993年竣工の旧実験棟である。解体建物から取り出した部材を新築の1期工事範囲（鉄工作業所）に再利用することで、用途の異なる建物間でもリユース材を活用した柔軟な設計・施工が可能であることを実証した。

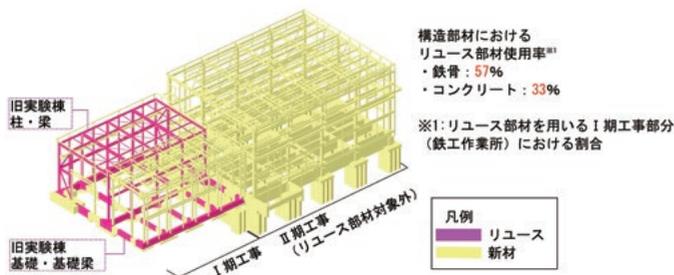


図1 OL3におけるリユース材と新材の割合イメージ図

●リユース対象とリユース材使用率

新築建物では、柱・梁に加えてプレースや小梁などの二次部材も再利用する。コンクリート部材も基礎や構造スラブなどをリユース対象とした。図1はOL3計画の骨組図であり鉄工作業所部分のリユース材使用率は、鉄骨が57%、コンクリートが33%となっている。

●リユース部材の安全性証明と建築確認申請のポイント

今回の申請手続きは一般の建築確認で対応した。リユース材を使用するにあたっては、使用部材が現行の建築基準法に適合していることを示す必要がある。また、審査機関から、部材の取り出し・加工・新築施工に至るまでの一貫したトレーサビリティが求められた。

本計画では、以下の点を確認することで、リユース材が現行基準に適合していることを示した。

- ・建築基準法第37条に基づき、リユース材が現行のJIS規格と同等以上の性能を有していること
- ・リユース元の既存建物について、確認済証交付以降に行われた関連告示の変更内容に対し、リユース部材が適合していること

これらの適合性確認については、いずれも関連資料の精査・照合・対応に手間を要したが、リユース元建物では確認済証・検査済証がそろい、竣工年も新耐震以降であったため、主な確認事項をこれら二項目に整理できた。その結果、建築確認申請を円滑に進めることができた。

なお、本内容は一事例であり、適用可否は計画ごとに異なるため、実際の申請にあたっては所管行政庁への確認が必要である。

●CO₂排出量削減効果

本計画では、リユース部材の活用による資材製造段階のCO₂排出削減を、建築学会LCA指針^{※2}に基づき算定した。鉄工作業所の鉄骨・基礎・基礎梁・コンクリート・鉄筋を対象とした結果、新材使用時135.1tに対し、リユース

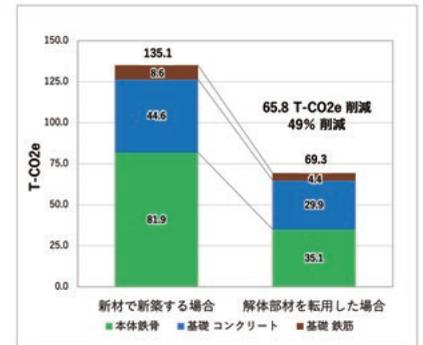


図2 CO₂排出量比較

材使用時は69.3tとなり、65.8t（49%）の削減効果が得られた（図2）。

※2：日本建築学会「建物のLCA指針2013年度改訂版」

■おわりに

今回の計画では、構造部材のさまざまな部位でリユースを行い、材料選定や解体を含む施工方法について総合的な検証を行った。今後は、得られた知見をさらに蓄積し、技術の精度と効率性を高めるとともに、コスト面での合理化も図りながら、建設分野の脱炭素化に一層貢献してゆきたい。

きし・ひろゆき

1990年4月入社、2023年より現職。

てらい・ちえ

2008年4月入社、2025年4月より現職。

3 吉村篤一氏

坂倉準三建築研究所に12年間在籍し、のちに建築環境研究所を設立して大阪・京都を中心に関西の建築界を牽引してこられた吉村篤一先生に、坂倉準三建築研究所の大阪事務所や建築環境研究所での仕事と両事務所の様子などについて、京都・松ヶ崎のご生家・松雲荘でお話を伺いました。

笠原一人
三宅拓也

■坂倉準三建築研究所との出会い

笠原 今回は建築環境研究所の吉村篤一先生にお話を伺います。同席いただいている元所員の駒井三佐さんにもご発言いただきます。吉村先生は1963年に京都工芸繊維大学を卒業されましたが、この大学は、今私たちがお邪魔しているご生家の松雲荘¹のすぐ近くにありますが、

吉村 そうです。私は1940年に生まれてからずっとここに住んでいました。世間知らずでしたから、若い頃に海外をあちこち見に行きました。各地で変わった建築を見たことを覚えています。

笠原 京都工芸繊維大学を卒業したあと、すぐに坂倉準三建築研究所に入所されますね。

吉村 勉強をあまりしない学生でしたが、大学2、3回生の頃から坂倉準三建築研究所の大阪事務所にアルバイトに行っていました。

三宅 それには何かきっかけがあったのでしょうか。

吉村 父の知人に坂倉事務所の模型制作を担当されている方がいて、その方に紹介いただきました²。大阪事務所は、手前に芝生があり、その奥に2階建ての建物がありました³。2階に上がる少し手前に2、3段床が上がっている場所があって、そこで若い所員さんが図面を描いておられました。当時は若い所員さんが4、5人いたように思います。みなさん気さくで、知り合いのお兄ちゃんがいるような感覚でした。仕事場として素晴らしい環境で、この事務所に入れたらいいなと思っていました。アルバイトとして何をしていたのか、はっきりと覚えていませんが、当時はやろうと思っても特に何かできるわけでもなかったと思うので、簡単な仕事を手伝っていたのだらうと思います。

笠原 アルバイトから、どのようにして所員となられたのでしょうか。

吉村 当時の大阪事務所では、アルバイトからそのまま所員になるという雰囲気があり、自分もそうなるのかなと漠然と思っていました。ですが、私が就職する年になって「今年から面接をする」「坂倉先生に見てもらって決める」ということになりました。先輩所員たちに「そんなことをされたら困ります」なんて言ったことを思い出します。実際に坂倉先生が大阪事務所に来られ、面接を受けました。坂倉先生は若い人に対してあまり喋らない人だったという記憶があります。

■坂倉準三建築研究所での仕事

笠原 入所されてからは、どのようなプロジェクトに関わられたのでしょうか。

吉村 入所間もなくして東京事務所に移りました。当時、新宿駅西口広場（1966年竣工）のプロジェクトが進行中で、東京事務所の人手が足りないというので、東孝光さんと同じ時期に大阪から出向したのです。住んだのは千駄ヶ谷だったと思います。まだあの辺りも開発で街が広がっていくような感じがしない頃で、大きな敷地に建つ2階建て



図1 松雲荘 (撮影:三宅拓也) 図2 インタビューの様子 (撮影:駒井三佐)

のアパートの一室に住んでいました。そこからは国立競技場の聖火台が見えていたことを覚えています。同じ敷地の借家には東さんがご家族でお住まいになりました。東さんの娘の理恵さんが、まだ子供の頃の話です。新宿駅西口広場では現場を担当していました。仕上げたタイルを見た坂倉先生が「黒が多すぎる」と言われ、チョークで印をつけて黒いタイルを減らしたということもありました。

笠原 大阪にはいつ頃戻ってこられたのでしょうか。

吉村 新宿駅西口広場のあとです。

笠原 ということは東京におられたのは2年間ほど。年表によれば坂倉事務所への在籍は12年間ですから、残りの10年近くはずっと大阪ということになりますね。

駒井 数年前に京都工芸繊維大学の大学院生が吉村所長についての修士論文⁴を書かれたのですが、そこに大阪に戻られてから担当されたプロジェクトの一覧が掲載されています。これによると、奈良県立青少年野外活動センター（1968年竣工）が最初ようです。神戸市少年自然の家（1973年竣工）なども吉村所長の担当となっています。

笠原 神戸市少年自然の家には、私も幼少期によく訪れました。海の上に建つ大阪府立青少年海洋センター（1975年竣工）もご担当されていますね。外装にコールテン鋼を用いておられるものです。

吉村 あれは私ではなく、太田隆信さんによるものです。

笠原 リストには担当者として吉村先生も記されているようですが。

吉村 それはメンバーとして入っているだけで、メインは太田さんです。当時の大阪事務所では、所員の誰かがメインとなり、4、5名で集まって図面を仕上げていくという形でした。

笠原 太田さんがメインで担当される場合は、デザインはすべて太田さんがなされるということでしょうか。

吉村 担当のうち誰がやると決まっているわけではなかったですが、やはり年長者がまとめていくことになります。年長者が大まかなことを決め、そこへ大阪事務所長だった西澤文隆さんが時々口出しをするという感じでした。坂倉さんは東京におられたから、この頃の大阪事務所の仕事に坂倉さんが直接どうこうしたということは少なかったように思います。西澤さんも、こうしなさいと自らの意見を言う方では

ありませんでした。ですから太田さんは、自分が引っ張っていかうという気持ちを強く持たれていたように思います。

笠原 大阪事務所で吉村先生が中心となって設計したというプロジェクトはありましたか。それとも、関わられたどのプロジェクトも太田さんが中心になってデザインされたのでしょうか。

吉村 そうですね。太田さんは口も達者でしたから。一方、西澤さんはそうではありません。太田さんが提案をまとめて西澤さんに相談し、それに西澤さんが「ああ、そうか」「そうやるか」と言って決まっていく。大阪事務所での仕事はそういう感じだったので、どちらかという太田さんが引っ張っていたイメージがあります。

笠原 初めて聞くお話です。てっきり、西澤さんが中心になって仕事をされていたと思っていましたが、中心は太田さんなのですね。

吉村 はい。西澤さんはあまり主張する性格の方ではありませんでしたから。西澤さんは「太田くん、これどう思う？」と尋ねることもありました。こうしたことが重なるうちに、太田さんご自身の仕事だという感じで進められることもあったように思います。太田さんは自分で引っ張っているということを表にはもちろん出しませんが、一番年上という状況になり、自分で決めるという場面が多くなっていったような感じでしょうか。今思い返せば、それは良い面とそうでない面の両面があったように思います。

笠原 太田さん以外に、大阪事務所をリードする方はいましたか。

吉村 いえ、そのような感じの方はおられなかったと思います。

笠原 吉村先生が坂倉事務所に入所されるのが1965年、退所されるのが1975年です。そのちょうど真ん中あたりの1969年に坂倉準三さんが亡くなられています。その前後で事務所の体制や様子に変化はありましたか。

吉村 大阪事務所に長くいましたが、変化したという意識を持っていませんから、影響はあまりなかったと思います。私自身は坂倉さんの下にいなかったもので、とうとう亡くなられたのかとは思いましたが、亡くなったから大変だというような状況にはなりませんでした。

笠原 坂倉さんは大阪にはあまり来ず、大阪事務所は西澤さんや太田さんに任せていたということでしょうか。

吉村 任せていたと思います。坂倉さんが亡くなられて、西澤さんが事務所全体の代表になりました。それで西澤さんは多忙になりましたが、大阪事務所自体は特に変わったことはなかったように思います。

笠原 東京事務所には、坂倉準三のご子息である坂倉竹之助さんがおられました。竹之助さんは設計をされていたのでしょうか。

吉村 していたと思います。

■ 建築環境研究所の設立

笠原 吉村先生は1975年に坂倉事務所を退所して独立されました。35

歳の頃ですね。

吉村 そうです。数年かかきそうな大きな仕事に、個人として声をかけていただいたのがきっかけでした。阪本精神病院（1977年竣工）というもので、共同でのプロジェクトでした。精神病院の設計は簡単ではありませんので悩みましたが、お引き受けすることにしました。

三宅 作品リストによると、そのお仕事は京都工芸繊維大学におられた西村征一郎先生とご一緒されていますね。共同設計となっています。

吉村 この仕事をとりまとめている方がいて、その方が西村さんと私でやりなさいと。そういうわけで一緒に取り組みました。

笠原 このお仕事がきっかけで、建築環境研究所を立ち上げられたのですね。

吉村 そうです。建築環境研究所という事務所名には、個人の名前が入っていません。そこがミソなのです。

笠原 「吉村篤一」という文字をあえて含めなかったのですね。それはなぜでしょうか。組織で設計するのだからあえて個人名を出さなくてよいとお考えになったのでしょうか。

吉村 事務所をつくった当時は他の方も関係していましたから。私の名前だけにすると独り占めしたようにみえますので、そう思われぬように建築環境研究所としたのです。周りを考えてのことでした。

笠原 坂倉事務所のような個人の事務所と違って、組織事務所として、所員と一緒にやるのだという考えを表現されたのかと思っていました。

吉村 いえ、そういうわけではありません。人間関係ですね。言い方が難しいのですが。

笠原 建築環境研究所は大阪でスタートしたのですね。

吉村 はい、事務所を立ち上げた当初は、北浜にある青山ビルの1階に事務所がありました。その後、天満橋に移り、さらに京都の今出川へと移りました。

駒井 私も所属していた天満橋の頃は、土佐堀川に面したビルの7階に事務所がありました。そこからは天神祭の際の船渡御がよく見えましたので、毎年、祭りの当日には事務所にたくさんのお客さんがいらっしゃいました。お客さんが入る場所をつくるため、事務所の片付けで毎年大変でした。

吉村 大阪の人でも船渡御を上から眺める機会はそうないので、みなさん楽しみに来られていたのです。

笠原 京都の事務所は、御所近くの、かつて上田篤さんが入居されていたところですね。北側に武田五一が設計した建物があり、それが取り壊される時に調査に入りました。その時、「これ、壊されんねん」と言いながら、吉村先生が隣から出てこられたことを覚えています。

吉村 そんなこともありましたね。

■建築環境研究所での仕事

笠原 建築環境研究所では、どのような体制で仕事を進めておられたのでしょうか。担当する所員が考え吉村先生がそれに応答されるのか、それとも吉村先生が所員にスケッチをわたして、それを所員が図面に仕上げているのでしょうか。

吉村 描いたスケッチを押し付けるというようなことはしません。

笠原 ということは、坂倉事務所のように、所員を活かすというか、所員を信じて任せる、というようなやり方をされていたのですか。

吉村 特に意識したことはないで、自分ではよくわかりません。言われてみて、そうだったのかなと思うくらいです。これを所員に任せるとか、私がやるというようなイメージは特にありませんでした。

駒井 私が在籍していたときの印象では、最初はもちろん所長がスケッチを描いたり、アウトラインを構想されたりするのですが、その後はわりと所員に任せておられました。所員から出てくるものを、一緒に作り上げていくというような感じです。お施主さんや工務店との打ち合わせにも若い所員が同行するのですが、所長は打ち合わせをする様子を静かに見守るスタンスだったので、所員には自分が任されているという感覚や、自分が進めなければいけないという危機感があつたようです。もちろん、本当に大事なところは所長がしっかりと抑えてお話しをされました。

笠原 お話を伺って、やはり坂倉事務所と似ているなと感じました。

吉村 そうなのかもしれませんね。坂倉さんや西澤さんも、こうなさい、ということをおまわり言われませんでした。

笠原 坂倉事務所のやり方を継承されておられるのですか。

吉村 いえ、継承というわけではなく、自然とそうになっていたというだけです。

笠原 先ほど、坂倉事務所では担当所員を中心に設計を進め、西澤さんが適宜コメントをなさると伺いました。坂倉事務所からは、吉村先生をはじめ個性的な建築家が輩出されていますが、その背景には所員にまかせるという事務所の進め方があつたのではないかと思います。吉村先生の事務所のやり方もこれに似ていて、だからこそ建築環境研究所から各地で活躍しておられる個性的な建築家がたくさん育っているのだと思います。

吉村 所員それぞれに、もともと個性がありますから。所員たちは、私が言ったことに対して自分が良くないと思えばそう言いますし、自分の意見を持っています。そのやりとりを重ねるうちに、事務所での仕事が進んでいったわけです。

笠原 所員のことを尊重されているのだと感じます。

吉村 所員であろうとなかろうと、他人の意見はきちんと聞いて、それにどう応えていくのかが一番大切です。

笠原 個人を重んじて、丁寧に付き合っていくということですね。

駒井 例えば住宅の設計は、所長は所員からの意見も受け入れ、その上で所長の考えを所員に伝えるというやりとりを重ねるなかで、できあがっていったように思います。ですから、どれも担当者の人間性というか人柄が出たような作品になっているように思います。

笠原 担当した所員の個性が滲み出ている、ということですね。

駒井 はい。だから担当者は、自分が担当したものには強い思い入れを持っていたと思います。

■所員とのやりとり

駒井 所長のご家族から、所長がご家庭では偉そうだったというお話を聞いて驚きました。事務所ではそういう感じはありませんでした。所長は、設計の細かい部分、例えば細部の寸法に対しては「ここはこの細さがいい」「こっちはこの太さ」という具合に絶対に譲らないところがありましたが、所員からの「こうしてみたらどうでしょう」というアイデアに対してはおおらかで、否定はされませんでした。「それは本当にいいのか」「ちょっとここが気になる」というように、所員の考えを深めさせるようなことは言われても、「それはおかしいからこうしなさい」というようなことはありませんでした。

笠原 柔軟さがないと所員も育たないということですね。設計事務所のなかには、絶対的な所長がいて、その所長が描くスケッチを所員が図面にし、それをまた所長が見て直して、を繰り返して最後まで設計が進むという事務所もあります。

吉村 それはそれで良いことですね。

笠原 坂倉事務所や吉村先生の建築環境研究所が個性的な建築家を輩出されているのは、やはり所員を重んじる仕事のやり方があるからではないかと思います。

駒井 それには所長のお人柄も関係していると感じます。昔、関西の建築家が集まる講演会に参加したとき、ご自身の作風を強く主張される方が多いなか、所長はそうではなく作風も人柄も控えめだなと感じたことを思い出します。

笠原 強烈な個性を示されるタイプではないということですね。吉村先生は、ご自身で仕事を取りにいたり、ご自身の考えを通されたりするのではなく、ある程度受け身でやって行かれるのですか。それは謙虚とも言えますし、自然に委ねるということでもあると思います。そうした吉村先生の事務所だから、所員の方も自立して、育って行かれるのではないのでしょうか。

吉村 私にはどうかわかりません。みなさん自由にとらえていただければと思います。

■自邸「松ヶ崎の家」

笠原 ご生家は現在「松雲荘」と呼んでおられますが、お隣に建つ自邸・松ヶ崎の家（1975年竣工）はどのように呼んでおられますか。

吉村 単に自邸と呼んでいます。あれはあんまりバツとしませんね。当時この辺りには田園が広がっていて、住宅はほとんどありませんでした。比叡山を背景に生家を写真に撮るとカッコいいのです。自邸が建つ前、この場所には父の作業場がありました。ここに建物がないと、松雲荘の西側が見えてよかったかもしれません。

笠原 そうでしょうか。私たちはあのご自邸は名作だと思っています。

三宅 『都市住宅』（1976年8月号）では、そのようなアングルで松ヶ崎の家を撮影した写真が大きく紹介されていますね。北山通りのある現在とは印象がまったく異なります。

吉村 自邸が建ったとき、近所の方々が「何かすごいのができた」「喫茶店だろうか」などと興味深そうに言っておられたそうです。

笠原 松ヶ崎の家はコンクリート造と木造の混構造で、大きな勾配屋根が掛けられています。屋根は風景に合わせてのものでしょうか。

吉村 風景に合うかどうかということは特に考えていませんでした。

三宅 室内は大きな空間が印象的です。当初の図面には増築予定の書斎や、おそらく局所暖房のための折りたたみ式のカマクラが描かれています。書斎はのちに実現していますが、カマクラはどうでしたか。

吉村 それはありませんが、代わりとして室内にワイヤーを張り、そこへ冬にだけ TENT をかける仕組みを作りました。

三宅 カマクラは形を変えて実現したということですね。

笠原 その後、ご自邸の南側に北山紅茶館（1995年竣工）を設計されましたね。この辺りでは有名な喫茶店で、よく利用しています。

吉村 敷地の一部を削って北山通りができた時に、新しい通りに面して建てたものです。オーナーさんに建物をお貸ししています。

笠原 1920年代に遡るご生家「松雲荘」、1970年代のご自邸「松ヶ崎の家」、そして1990年代の「北山紅茶館」。この場所は、3つの異なる時代の名建築がまとまって残るすばらしい場所だと思っています。時々の要請に従いながら、既存の環境を尊重してつくりあげられてきたそれぞれの建築とこの場所が、これからも長く使い続けられていくことを願ってやみません。今日は、貴重なお話をたくさんお聞かせください、ありがとうございました。

* 吉村篤一先生へのインタビューは、2025年9月6日に京都・松ヶ崎の松雲荘にて行いました。

（同席：吉村夕紀、駒井三佐、聞き手：笠原一人、三宅拓也）



図3 松ヶ崎の家
外観（提供：建築環境研究所）



図4 松ヶ崎の家
内部（提供：環境建築研究所）

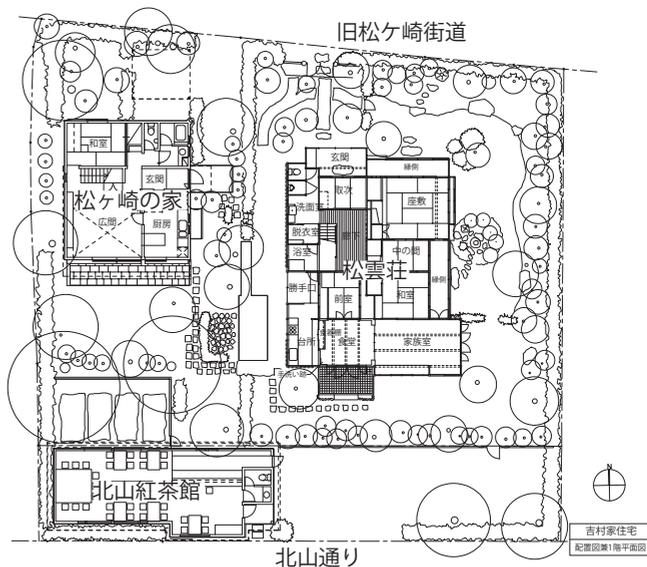


図5 松雲荘・松ヶ崎の家・北山紅茶館 配置図・1階平面図
（図面提供：緒方幸樹建築設計事務所、協力：吉村奈穂）

- 1) 松雲荘は吉村篤一の祖父で室内装飾業を営んでいた吉村光太郎が構えた邸宅。熊倉工務店の設計で1929年に竣工。登録有形文化財。松雲荘の名は、建物公開に際して、所在地である松ヶ崎雲路町にちなんで吉村篤一によって付けられた。
- 2) 父・午郎は東京高等工芸学校木工科を卒業、のちにプラスチック材料の応用に取り組み、京都市立美術大学等で講師を務めた。1972年には上野伊三郎を継いでインターナショナルデザイン学校の校長に就任。
- 3) 「先達に聞く：太田隆信氏」（本誌2025年5月号）参照。
- 4) 大谷楓「関西の建築家 吉村篤一が問いかけてきたこと：言説および住宅作品からの考察」京都工芸繊維大学大学院工芸科学研究科建築学専攻 令和2年度修士論文、2021年。



U-35委員会企画 talk baton 28 活動報告

talk baton とは…

若手プラットフォームづくりの活動の一環として、建築を取り巻く他分野のゲストがトークのバトンを繋げていくコミュニケーショントークイベントです。

建築をフィールドとする私たちと毎回のゲストとの対話を通じて、建築が本来持っている多様性やバイタリティを見つめ直し、これからの建築に求められる領域を探っていきます。



U-35 委員会 HP



U-35 Instagram



燈株式会社サービス
ご紹介ページ



燈株式会社資料
ご請求ページ

talk baton 28
「建築とAI」

ゲスト
燈株式会社
小原英之氏
AI SaaS事業担当
業界固有の文化や
ワークフローに最適な
UI/UXに仕上げたプロ
ダクトを提供する。



岩永葉月氏
AI SaaS事業担当
建設業界・建築業界
の抱える課題を把握
し、AIによって解決
案を提供する。



燈株式会社は、「日本を照らす燈となる」という使命のもと、産業が抱える課題を起点に、AIを中心とする最先端テクノロジーによって未来を実装する、東京大学・松尾研究室発のAIスタートアップ企業であり、日本のAI業界をリードする急成長中の組織だ。建設業界には、多くのデータの資産を持つ会社がある一方で、時間外労働規制や技能者の高齢化、資材の高騰などを背景として、生産性向上や匠の技の継承が喫緊の課題となっている。燈はこれらの課題に対して、アカデミアで培った最先端技術を用いて建設業を中心としたものづくり産業のDXに挑んでいる。

事業内容は、AIを中心とする最先端テクノロジーの研究開発を社内で行い、企業の課題を起点としたDXの推進をDXソリューション事業とAI SaaS事業によって行っている。

今回のトークバトンでは燈が現在取り組んでいるDX「推進に関する」事業や、生成AIの最新動向について小原氏にお話いただき、後半は燈が提供するAIコンストシェルジュ「光(Hikari)」を用いたワークショップを岩永氏と共に行った。



DXソリューション事業
研究開発したアルゴリズムを独自のAI開発基盤を用いて蓄積し、AIモジュールとして保有。各企業のビジネスモデルやワークフローに最適な形でカスタマイズして提供。

AI SaaS事業
燈固有のAIモジュールを搭載し、さらに業界固有の文化やワークフローに最適なUI/UXに仕上げたプロダクトを提供。

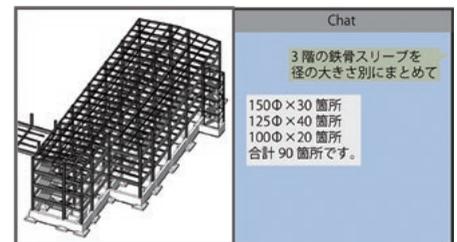
■燈の事業内容

■燈が取り組むDXについて

①必要情報をチャット形式で瞬時に取得

小原氏「建設現場では、膨大な設計図書やBIMデータの中から必要な情報を探し出すのに、従来は多くの時間を費やしていますが、AIシステム開発後は、知りたい情報をチャット形式でAIに質問することで、膨大なデータの中から瞬時に情報の取出しが可能となりました。」

ここでは、3Dモデルと連動させることで視覚的に把握することができ、AIの強みの一つとして、誰でも分かりやすく直感で情報を扱えることが実証されている。



■3Dモデルと連動させ瞬時に情報を取り出す(イメージ)

②AIを活用した断熱改修の提案システム

小原氏「こちらは住宅メーカーと共同で行っている断熱改修システムです。サーモカメラを用いて既存住宅の断熱性能値を非破壊で調査し、AIを用いて熱画像を解析し、弱点部分を特定・スコア化することで、有効な工事方法を提案することが可能となります。」

多くの案件に対し、決められたフローの中で、個々の状況に応じた対応策を提案する定型化した内容にAIが組み込まれることで、AIの力が最大限発揮されることが示されている。



■断熱改修工事提案システムのフロー

■生成AIの最新の動向

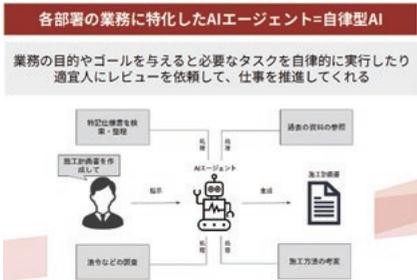
①ChatGPTの登場

小原氏「チャット形式でユーザーの質問に答えるChatGPTが2022年11月に登場しました。文章の校閲やアイデアの壁打ちなどに活用できると瞬間に世界で話題となりました。ChatGPTはわずか2ヵ月で月間アクティブユーザー数が1億人を突破し、他の主力サー

ビスと比較しても異様な成長です。GPTをはじめとする大規模言語モデル（LLM）の登場でAIを要約や翻訳など、タスクごとに個別構築するのではなく、1つのAIに様々なタスクを任せる事が出来るようになりました。」

②指示待ちAIから自律型AIへ

小原氏「現在の汎用的なチャットボットでは、都度、人間がタスクを指示したり、参照すべき情報を指定しなければいけません。2026, 2027年には業務の目的やゴールを与える必要と必要なタスクを自律的に実行したり、適宜、人にレビューを依頼して、仕事を推進してくれる自律型AIが浸透していくと予想され、建設業界にも大きな影響をもたらすとされています。」



■自律型AIエージェントのイメージ

③AGI・ASIの時代へ

小原氏「更には、LLM・AIエージェントの次のステップとして、2030年にはAGI・ASIが実現すると予想されています。AGIとは汎用人工知能の略語で、人間と同程度であらゆる経済的なタスクを自律的に実行するAIシステムです。また、ASIは人工超知能のことで、AGIを超越し、人間の知能を超えて、独自の意思決定も可能とするAIシステムです。ASI時代の建設業は『効率と持続可能性』と『文化的価値と人間らしさ』の融合により、さらに安全で創造的な産業へと進化することが期待されています。具体的には次のようなことが期待されています。

- ・ASIが管理する自律ロボットが24時間体制で作業。人手不足解消と生産性向上に寄与。
 - ・気候変動、災害、人口動態を組み込んだ100年単位の都市計画が可能に。
 - ・ASIによる新素材開発で、自己修復・カーボンネガティブな建築物が標準化。
 - ・ASIがハードウェアにも実装され、作業者は肉体労働から監督・創造的設計へシフト。
- 一方で、残る人間の役割として、地域性・歴史性を反映した設計思想の提供や、建設プロジェクトの優先順位付けと社会的合意形成、

ASIと協働することによる、新たな建築様式の創出が期待されます。」

■光（Hikari）を用いたワークショップ

茨木市文化・子育て複合施設のプロポーザル要項を題材に、燈が提供するAIコンストシエルジュ「光（Hikari）」を用いて、設計段階のAIの活用方法について、参加者とともにその可能性を探るワークショップを行った。

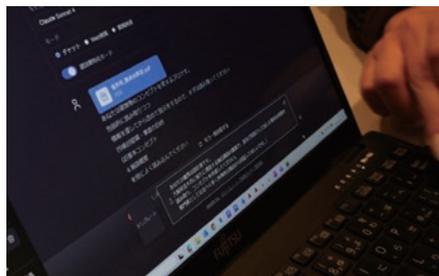
光（Hikari）は通常のLLMと異なり、建設業のデータがあらかじめインプットされており、専門知識や文脈を理解した回答をすることが出来る、という特徴がある。また、入力文章はAI学習には一切使用しない設定となっており、秘匿情報の取り扱いも可能である。今回は4つの段階に分けて、光（Hikari）を用いてプロポーザル提案を行った。

- ①要求水準書を読み込ませる。
- ②コンセプトを多角的視点で提案させる。
- ③各班が独自のキーワードを入力し、改めてコンセプトを考案させる。
- ④③で生成したコンセプトを基にパースを生成させる。

各フェーズに求められる性能の違いによって、PDFの取込み・要約が得意なGPTモデルや、推考が得意なClaude Sonnetモデルなど、光（Hikari）に搭載されているモデルを切替えながらワークショップを進めた。プロンプトの質によって得られる回答が異なり、各チームがAIに振り回されながらも、道具としてのAIの可能性を感じていた。



■ワークショップの様子



■光（Hikari）を用いたコンセプト提案

建築の様態は道具の進化とともに時代によって変化してきた。建設段階でのDXが進む中、設計段階でのAIの使い道については各々模索中の段階である。今後プロンプトエンジニアとしての側面をもつ新たな設計者像が現れるかもしれない。

一方で設計者として必要な想像力・判断力・身体感覚など、時代によって変わらない本質の部分が、AIの普及によってより一層求められる時代になるだろう。（文責：中野）



■光（Hikari）で作成した複合施設のイメージパース



■イベント終了後の集合写真

talk baton 28 を終えて

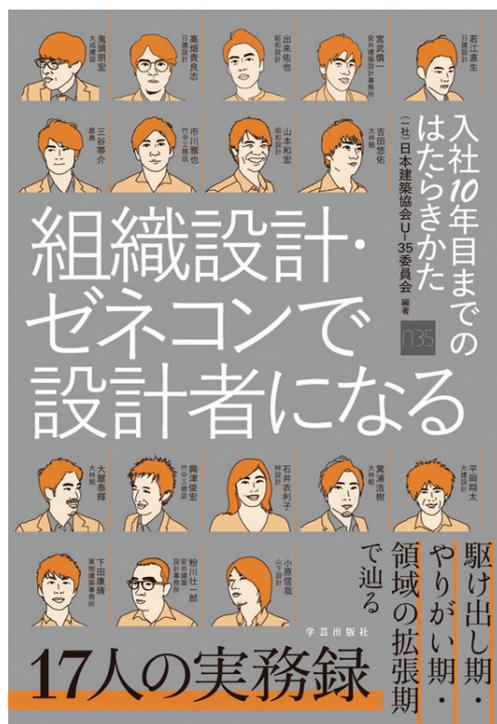
AIの科学的進歩は指数関数的に加速している。小原氏の「AIによって人間の役割が奪われることはないが、AIを使えない会社は時代に置いていかれる。」という言葉が印象的であった。新たな道具を積極的に受け入れながら、自分たちの役割を見失うことなく、新たな建築の可能性を探っていききたい。

対談日：2025.11.14
場所：昭和設計セミナーホール
(大阪市北区)

モデレーター：中野隆太（昭和設計）
WS参加者：35歳以下の若手設計者
梓設計・大林組・昭和設計・大成建設・竹中工務店・東畑建築事務所・日建設計・類設計室・安井建築設計事務所・RIA

『組織設計・ゼネコンで設計者になる』

販売中



組織設計事務所やゼネコン設計部で働く **社会人1～10年目**の若手設計者たちは、日々の仕事にどんなやりがいを感じ、どんな壁にぶつかって成長していくのか。**建築・都市プロジェクトの最前線**で働いてきた経験や学びを共有し、所属組織を超えて互いに切磋琢磨する日本建築協会 U-35 委員会のメンバーが、**リアルな実体験**を持ち寄る。

組織設計・ゼネコンで設計者になる
入社10年目までの はたらきかた

(一社) 日本建築協会 U-35 委員会 編著
四六判・224頁・2200円+税・学芸出版社

会員特別割引販売

購入ご希望の方は hensyu@aj.or.jp へご連絡ください

1章 無我夢中の駆け出し期 (1～3年目)

- ・ 建築は無数の対話でできている
- ・ だれよりも早く手を動かす
- ・ 「20年先」を提案する設計者になる
- ・ 施主のイメージから可能性を広げる力
- ・ コンセプトを見える化してコラボレーションする

座談会① 自分の無知を思い知らされる駆け出し期
社会を見つめ、「建築」の領域を拡張する
社外活動コラムⅠ 学生と一緒に次世代の空間を構想する

2章 難局こそやりがい期 (4～7年目)

- ・ 先入観を乗り越える楽しさ
- ・ ベテランに支えられつつプロジェクトの舵を取る
- ・ ミリ単位の調整でアイデアを実現する
- ・ 一歩踏み込んだデザインをチームで実現する
- ・ 工業デザインの精度でゼロから寸法を問い直す
- ・ ニーズをシーンに変換するユーザーヒアリング

座談会② 自信を掴みつつ、葛藤も生まれるやりがい期
社外活動コラムⅡ まちに飛び出てフィールドワークを行う

3章 デザイン領域の拡張期 (8～10年目)

- ・ 前例のないディテールを編み出す
- ・ 計画に潜在する公共性をデザインコードにする
- ・ 積層型大規模木造のロールモデルをつくる
- ・ 組織のチームプレーを見つめ直す
- ・ チームを導くトータルディレクション
- ・ 事業性を満たしつつ一歩先の価値を提案する

座談会③ 自らの責任のもと、多角的な視野で動ける拡張期
社外活動コラムⅢ 時代のニーズを探り、自らまちを楽しむ
社外活動コラムⅣ 建築の外側で、業種を超えて社会を考える
時代の変化と建築、設計者



(一社) 日本建築協会 U-35 委員会

日本建築協会内の若手設計者を
中心に、主に組織に属する概ね
35歳以下の設計者で構成され
る。関西を拠点に、建築におけ
る多様な価値の発信を目的とし
て組織を超えたプラットフォーム
づくりや都市のフィールド
ワークなどを行う。

U-35 委員会 HP
(書籍詳細はこちら)



協会誌『建築と社会』掲載文における 「著作権」についてのお知らせとお願い

一般社団法人日本建築協会（以下「本会」という）では、「著作権」に関して、協会誌「建築と社会」2018年6月号において『掲載された論文・記事の著作権を著者から本会に譲渡願うこと』とお願いをさせて頂きましたが、時代背景も変わってきたことから、著作権について、新たに以下の様に規定いたします。

1. 著作権について

- 本誌に掲載された個々の論文・記事・図面・写真等の著作物の著作権は、各執筆者、制作者である著作者に帰属するものとします。
- 協会誌「建築と社会」、協会WEBサイトにおける編集著作権は、発行者、制作者である本会に帰属するものとします。

2. 著作者人格権について

- 著作物について、円滑な編集・公開のために、誤字脱字の修正や見出しの変更など、本会が必要と認める範囲で手直しをさせて頂き、可能性のあるため、本誌にご投稿いただくことで、同一性保持権を行使されないことにご同意いただいたものとします。なお本会は、著作者の名誉を損なうことのないよう十分に留意いたします。

3. 著作者の責任

- 著作者は、著作物が第三者の著作権・肖像権・その他の権利を侵害しないことを保証するものとします。
- 著作物に関して第三者から権利侵害等の申し立てがあった場合は、著作者ご自身の責任において解決いただくものとします。

4. 本会への利用許諾

著作者は、本誌にご投稿いただくことで、ご自身の著作物について、本会が以下の目的で利用することを非独占的に許諾していただくものとします。

- 協会誌「建築と社会」での掲載（複製）、及び頒布
- 本会ウェブサイト等での公衆送信（会員限定公開を含む）
- 本会が協会誌「建築と社会」掲載記事を記念誌等で転載再利用すること（データを再編集し転載することを含む）
- 第三者から本誌掲載著作物について利用申請があった場合、本会がその利用を許諾すること

5. 著作者ご自身の利用について

本会に利用を許諾いただいた後も、著作者ご本人の権利として、ご自身の著作物を、ご自身の論文集への再録・ウェブサイトでの公開・研究・教育活動などで自由に利用することを、何ら妨げるものではありません。

6. 過去にご寄稿いただいた著作物について

過去に本誌にご寄稿いただいた著作物についても、上記趣旨をご理解いただき、ご同意頂いたものとして、取り扱わせていただきます。ご不明点がある場合は、2026年3月末日までに下記の本会事務局までお申し出ください。

【問い合わせ先】

一般社団法人 日本建築協会
担当：柏原
TEL：06-6946-6981
E-mail：kyoku-tyo@aaj.or.jp

個人会員の皆さまへ

ご応募お待ちしております。招待券プレゼント！

応募フォームは協会ホームページの会員専用ページ内にあります。

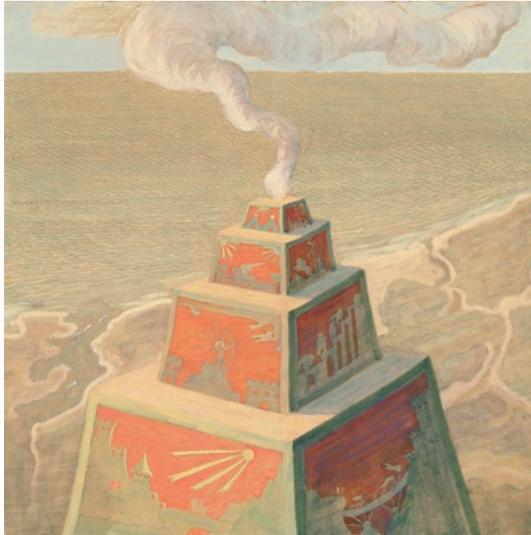
応募期限は毎月20日、厳正に抽選して当選者を決定します。(初回申込者を優先いたします。)

①

5組

チュルリョーニス展 内なる星図

リトアニアの国民的芸術家、34年ぶりの大回顧展



ミカロユス・コンスタンティナス・チュルリョーニス《祭壇》1909年、テンペラ/厚紙、国立M. K. チュルリョーニス美術館（カウナス）所蔵
M. K. Ciurlionis National Museum of Art, Kaunas, Lithuania.

リトアニアを代表する芸術家、ミカロユス・コンスタンティナス・チュルリョーニス（1875-1911）。祖国リトアニアにおける生誕150周年の祝賀ムードを引き継いで開催される本展は、日本では34年ぶりの回顧展。国立M. K. チュルリョーニス美術館（カウナス）が所蔵する主要な絵画やグラフィック作品、約80点を紹介する。

人間の精神世界や宇宙の神秘を描いた幻想的な作品の数々、音楽形式を取り入れた連作や、自身の手になる楽譜、展示室に流れる旋律をとおして、優れた作曲家でもあった画家の個性と感性が体感できる。2000年以降、再評価の機運が高まるチュルリョーニスの世界をぜひ堪能していただきたい。

期 間 3月28日(土)～6月14日(日)

9:30～17:30 ※金・土曜日は20:00まで

※入館は閉館の30分前まで

休 館 日 月曜日、5/7(木)

※3/30(月)、5/4(月・祝)は開館

観 覧 料 一般2,200円、大学生1,300円、高校生1,000円

*中学生以下、障害者手帳持参の方とその付添者（1名）無料/学生証等年齢の確認できるもの、障害者手帳の提示が必要

会 場 国立西洋美術館
企画展示室 B2F

東京都台東区上野公園7-7

TEL.050-5541-8600（ハローダイヤル）



②

2組

西洋絵画400年の旅

一珠玉の東京富士美術館コレクション

16世紀のルネサンスから20世紀の近現代美術まで



ジャック＝ルイ・ダヴィッドの工房
《サン＝ベルナル峠を越えるボナパルト》1805年 油彩・カンヴァス

1983年に東京都八王子市に開設した東京富士美術館は、国内外で制作された幅広い時代の絵画・版画・彫刻・写真・陶磁器等を約3万点収蔵する。とくに西洋絵画コレクションは、16世紀のイタリア・ルネサンスから20世紀の近現代美術までを網羅し、国内屈指の充実度を誇る。本展では同館の所蔵品から選りすぐられた80点あまりの西洋絵画を展覧する。

西洋では伝統的に神話画や宗教画が高尚な絵画ジャンルとして重視されたが、近代になると斬新な絵画主題の開拓や、造形表現そのものの革新へと画家たちの関心が移っていった。名画を通して、西洋絵画400年の歴史をご堪能ください。

期 間 3月20日(金・祝)～5月24日(日)

10:00～18:00

※入館は閉場の30分前まで

休 館 日 月曜日

※5/4(月・祝)は開館

観 覧 料 一般2,000円、高大生1,500円、小中生500円

*未就学児、障がい者手帳提示の方本人及び介護者1名まで（要証明）無料
*学生料金で入場の場合は学生証の提示が必要

会 場 京都市京セラ美術館
本館 北回廊 1階

京都市左京区岡崎門勝寺町124

TEL.075-771-4334



#チュルリョーニス#生誕150周年#レックス(王)#国立西洋美術館

#ヴァン・ダイク#カナレット#モネ#セザンヌ#マグリット

会員IDやパスワードがご不明な場合は、日本建築協会総務課
(soumu@aaj.or.jp) までお問合せください。
招待券は当協会より郵送でお届けいたします。
当選発表は招待券の発送をもってかえさせていただきます。

information

③ | ブルックリン博物館所蔵
2組 | 特別展 古代エジプト

掘り起こせ、三千年の謎



《神官ホル（ホルス）のカルトナージュと
ミイラ》（部分）前760～前558年頃
ブルックリン博物館蔵
Photo: Brooklyn Museum

ブルックリン博物館
が誇る古代エジプト
コレクションから、選
りすぐりの名品群が大
阪・あべのに集結する。

彫刻、棺、宝飾品、
陶器、パピルス、そし
て人間やネコのミイラ
など約150点の遺物を通
じて、私たちの想像を
超える高度な文化を創
出した人々の営みをひ
も解く。

謎に満ちた三千年をと
もに旅する案内人は、気
鋭のエジプト考古学者、
河江肖剰（かわえ ゆき
のり）。

人々はどんな暮らし
を営み、何を食べ、何を
おそれていたのか。彼ら
はどんな言語を話し、何
を書き残したのか。ピラ
ミッドはなぜ、どのよう
にして作られたのか。ミ
イラに託されたメッセー
ジは、そして死後の世
界とは。

これまでのエジプト展
で見過ごされてきた「知
っているようで知らない
事実」から最新技術を使
ったピラミッドの研究成
果まで、映像や音声も交
えて紹介する。

期 間 3月20日（金・祝）～6月14日（日）
火～金10：00～20：00、月土日祝10：00～18：00
※入館は閉館の30分前まで

休 館 日 3/23（月）
観 覧 料 一般2,300円、大学・高校生1,800円、
中学・小学生500円
*団体料金（15名以上）は各200円引き
*障がい者手帳を提示の場合、美術館カウンターで
チケット購入時、本人と付き添い1名まで当日料金の半額

会 場 あべのハルカス美術館
大阪市阿倍野区阿倍野筋1-1-43
あべのハルカス 16F
TEL.06-4399-9050



#ブルックリン博物館#古代エジプト#人間やネコのミイラ

④ | 生誕185年 ルノワール展
5組 |

コレクション約50点を一挙公開



《読書 赤とローズのブラウスを着た二人の女性》
1918年、山王美術館

60年におよぶ画家生活のなかで、肖像、風景、静物、家族、裸婦とさまざまな主題に取り組んだルノワール。すべてに共通しているのは、温かく、愛情に満ちた眼差しが注がれているということだろう。ルノワールにとって、生きることは描くことであり、描くことは悦びであったといえる。

前衛的な画家グループである印象派を出発点としながらも、絵画の伝統に学び、つぎることなく探求をつづけたルノワール。生誕185年を記念した本展では、山王美術館のコレクション約50点を一堂に公開し、その画業の一端をたどる。

光と色彩、生きる歓びにあふれたルノワールの世界を、ぜひお楽しみください。

期 間 3月1日（日）～7月31日（金）
10：00～17：00
※入館は閉館の30分前まで

休 館 日 火曜日、水曜日
※4/29、5/5・6は開館
観 覧 料 一般1,300円、大学・高校生800円、中学生以下500円
（保護者同伴に限り2名まで無料）
*一般料金以外は学生証の提示が必要

会 場 山王美術館
大阪市中央区城見2-2-27
TEL.06-6942-1117



#ルノワール#生誕185年#幸福の画家#印象派#裸婦像

常任理事会

第6回常任理事会

1月21日(水) 17:30~19:05

協会会議室&WEB

出席者 指田会長ほか11名

- 議事 (1) 「建築と社会賞」について
 (2) 2026年度の新入会員ガイダンス開催時期について
 (3) 総会講演会における講演者候補について

編集企画委員会

第10回編集企画委員会

1月9日(金) 18:00~19:30

協会会議室&WEB

出席者 三宗委員長ほか11名

- 議事 (1) 2月号 ひと・まち・建築小委員会・状況報告
 (2) 3月号 東海支部・状況報告
 (3) 4月号 各委員会・状況報告
 (4) 5月号 環境分科会・状況報告
 (5) その他

第9回建築デザイン分科会

1月16日(金) 18:00~19:25

協会会議室&WEB

出席者 杉江幹事ほか4名

- 議事 (1) 4月号特集担当ページについて
 (2) 8月号特集について
 (3) その他

第7回構造分科会

1月13日(火) 18:00~19:00

安井建築設計事務所会議室+WEB

出席者 正野幹事ほか7名

- 議事 (1) 「構造の頁」について
 (2) 4月号特集について
 (3) 次年度の幹事について
 (4) その他

第9回環境分科会

1月7日(水) 18:00~19:20

WEB

出席者 橋本幹事ほか8名

- 議事 (1) 「設備の頁」の企画
 (2) 5月号特集号について
 (3) 4月号特集担当ページについて
 (4) その他

第10回施工材料分科会

1月22日(木) 16:00~17:00

協会会議室&WEB

出席者 藤丸幹事ほか7名

- 議事 (1) 編集企画委員会の報告
 (2) 4月号特集担当ページについて
 (3) 4月号ふりかえり記事について
 (4) 編集企画委員会出席について
 (5) その他

第10回法令分科会

1月14日(水) 16:00~18:00

大林組大阪本店応接室

出席者 河野幹事ほか4名

- 議事 (1) 2026年特集テーマ「再生」について
 (2) 法令コーナー
 (3) 2026年度幹事の選出
 (4) 情報交換

第10回ひと・まち・建築小委員会

1月22日(木) 19:00~20:00

協会会議室&WEB

出席者 澤田小委員長ほか4名

- 議事 (1) 作品の選定
 (2) 作品の掲載状況、予定
 (3) gallery掲載報告、予定
 (4) その他

事業委員会

第6回情報見学小委員会

1月8日(木) 18:00~19:00

協会会議室&WEB

出席者 本田事業委員長、奥村小委員長ほか4名

- 議事 (1) 本年度の事業について
 (2) その他

第10回CCCフォーラム

1月19日(月) 19:00~20:00

協会会議室&WEB

出席者 本田事業委員長、本田小委員長ほか4名

- 議事 (1) 第11回青年技術者交流会の直前確認
 (2) 2026年度~2027年度 体制およびスケジュールの合意形成
 (3) CCCフォーラム ロゴデザインの決定
 (4) 次回「若手技術者フォーラム」に向けた準備
 (5) その他

出版委員会

第9回出版委員会

1月27日(火) 17:00~18:15

協会会議室&WEB

出席者 中尾委員長ほか6名

- 議事 (1) 制作進行中の書籍について
 (2) 出版に関する座談会について
 (3) 既刊書籍経過報告
 (4) セミナー等について

教育委員会

第2回工高生教育小委員会

1月23日(金) 18:00~19:00

OMM4Fミーティングルーム&WEB

出席者 谷口小委員長ほか4名

- 議事 (1) 本年度第71回工高生デザインコンクール実施報告
 (2) 次年度第72回工高生デザインコンクール募集規定の件
 (3) その他

未来創生プロジェクト

第8回建築次世代委員会

1月14日(水) 17:30~18:30

協会会議室+WEB

出席者 菅原小委員長ほか7名

- 議事 (1) リアル見学会
 (2) 学生交流・広報企画
 (3) その他

第9回2040委員会

1月8日(木) 19:30~20:30

WEB

出席者 吉田リーダーほか6名

- 議事 (1) 活動報告の掲載について
 (2) 今後の活動について
 (3) その他

第8回U-35委員会

1月7日(水) 19:30~22:00

協会会議室&WEB

出席者 大屋リーダーほか11名

- 議事 (1) 新メンバー紹介
 (2) 今後の活動について
 (3) その他

第9回U-35委員会

1月27日(火) 19:30~22:00

協会会議室&WEB

出席者 大屋リーダーほか15名

- 議事 (1) 新メンバー紹介
 (2) 今後の活動について
 (3) その他

審査会

第2回論考コンクール審査委員会

1月13日(火) 19:00~19:35

協会会議室

出席者 松村委員長ほか3名

- 議事 (1) 一次審査通過論考について
 (2) オンライン公開プレゼンテーションについて
 (3) 最終審査について
 (4) 審査結果発表について
 (5) 表彰式について
 (6) 受賞作の公開について
 (7) 生成AI利用の応募について

実行委員会

第3回論考コンクール実行委員会

1月20日(火) 18:00~19:00

協会会議室&WEB

出席者 吉村委員長ほか5名

- 議事 (1) 第10回以降の審査委員について
 (2) 第9回審査の進捗報告
 (3) 第10回コンクール主旨文案について
 (4) その他

講習会

講習会委員会主催

2025年度建築工事実務講習会【施工計画】

1月20日(火) 9:00~17:00

講師 浦瀬 誠氏(竹中工務店)、伊藤維俊氏(清水建設)

出席者 寺岡委員長

参加者 74名

講習会委員会主催

2025年度建築工事実務講習会【積算・仮設見積】

1月27日(火) 13:30~17:00

講師 鄭 泰允氏(大林組)

出席者 寺岡委員長

参加者 48名

講演会

CCCフォーラム主催 第11回 青年技術者交流会

1月30日(金) 18:30~20:30

会場: Open Innovation Biotope "bee" オカムラ 関西支社内&WEB

発表者: 粉川壮一郎(安井建築設計事務所)、

武内大輝(東畑建築事務所)、

成瀬壮太(大建設)、桜本佳季(大林組)

参加者: 本田事業委員長、本田小委員長ほか19名

司会: CCCフォーラム(正)片岡委員、

(副)井上委員

内容: 会場とWEBにて発表者のプレゼンと質疑応答、参加青年技術者による交流懇親会終了後 懇親会実施 参加者14名

編集企画委員会 (2026年1月現在)

副会長(編集担当) <環境分科会>

川合 智明 大橋 巧

理事(編集担当) 北野 勝也

木場 将雄 齋藤 悠輔

佐藤 榮一 生野 大輔

中尾 勝悦 寺井 千佳

中原 岳夫 仲村 憲一

西 博康 △橋本 直樹

橋寺 知子 梶井 貴廣

松島 茂樹 松本 健

◎三宗 知之 持留 崇志

吉村 英祐 <施工材料分科会>

副委員長 今井 信之

桑原 悠樹 上原 秀介

古谷 隆祥 門野 陽

編集委員 河合 智寛

■特集小委員会 能瀬 直樹

<計画分科会> △藤丸 啓一

△飯田 匡 南野 貴洋

田中 直人 森田 健

松田奈緒子 吉田 正友

山崎 晋一 <法令分科会>

吉村 英祐 奥山 陽二

<建築デザイン分科会> 日下部美嘉

桑原 悠樹 △河野 学

小林 敬政 時見 正人

小林 啓明 吉田 悠起

篠木 大輔 ■ひとまち建築小委員会

△杉江 順哉 浅田 翔大

田中 和八 伊藤 翔

田中 裕大 上田 寛彬

樋口 展寛 太田 栄治

平岡 翔太 加嶋 章博

松本 和也 片岡 政規

米山 剛史 貴志 泰正

<空間デザイン分科会> 佐伯 先史

東 実千代 ▲澤田 純一

今井 充彦 鞆野 淳司

河西 孝平 豊田 充広

神田 健吾 西田 佳代

△黒柳 亮 平野 尉仁

佐々木琉偉 増田 敬彦

清水 香澄 山本 和宏

宗田 菜々 (順不同)

<構造分科会> 古島 正博

榊原 啓太 ◎委員長

△正野 和司 ▲小委員会委員長

瀧野 敦夫 △幹事・小委員会

多田 全希 副委員長

萩原 学

水島 靖典

藪田 智裕

山下 真輝

山本 佳明

吉村 純哉

地球環境を守り、100年建築に貢献する

NACL のアルミ表面処理

株式会社日本電気化学工業所

<http://nacl.jp> E-mail:sc@nacl.co.jp

本部営業部 〒560-0036 大阪府豊中市蛍池西町2丁目7番26号 NACLビル2階

TEL (06)6843-1235(代) FAX (06)6853-1632

東京事務所 〒111-0051 東京都台東区蔵前2丁目6-7

TEL (03)3862-0978(代) FAX (03)3862-7098

お客様の抱える問題やニーズに
より速やかに、より丁寧に対応するために

企画・デザイン、制作、製版、印刷

株式会社 中島弘文堂印刷所

本社 〒537-0002 大阪市東成区深江南2丁目6番8号

TEL.06-6976-8761/FAX.06-6976-8765

東京支社 〒101-0052 東京都千代田区神田小川町1丁目4-2 風雲堂別館ビル2階

TEL.03-3526-5580/FAX.03-3526-5582

<http://www.n-kobundo.co.jp/>

印刷 2026年2月20日

発行 2026年3月1日

発行人 一般社団法人日本建築協会

大阪市中央区大手前1-7-31

電話 06-6946-6981

印刷所 株式会社 中島弘文堂印刷所

定価 1390円(税込)

©「建築と社会」誌の記事の無断転載を禁じます



AAJ U35 EXHIBITION

3.18Wed.-3.22Sun.
10:00-18:00
FabCafe Kyoto
〒600-8119 京都府京都市下京区本塩町554

AAJ U35 EXHIBITION

活動12周年を迎える日本建築協会U-35委員会による、これまでの活動と今後の展開を示唆する参加型の展覧会です。建築・まちづくりに関わる35歳以下の若手設計者が建築と〇〇をテーマに社会との接点を模索しこれまで活動を続けてきました。可変可能なユニット家具「nomadogi」を活用したパブリックスペース再編プロジェクトもfabcafe KYOTOや行政とのタッグにより進行しています。この展覧会を通して、次なる展開を参加者のみなさんと考えていきたいと思ひます。

1 日本建築協会 U35 exhibition - 新陳代謝する組織の12年 -

建築と〇〇についてディスカッションを重ねた「talk baton28回分」の記録、街にアクションをおこす。「action 10回分」の記録の他、出版物の展示を行います。35歳までの設計者でトランプスを続けてきたデザイン集団の中身を見せさせていただきます。



2 Nomadogiとパブリック - ノマディックプレイスメイキング -

大阪府茨木市で実施したIBARAKI STREET ACTIONにて開発された可変可能なユニット家具「nomadogi」。開発思想や、展開可能性をカタログ形式で展示します。直感的かつ手触り感のある空間づくりを体感いただけるミニノマドギコーナーも設置しています。



3 35歳、!! - 35歳ってなんだ？人生を考える展 -

35歳について考える企画展示。35歳は人生にとって様々な転換点なる歳ではないでしょうか？私・僕の35歳どうなっていたい？振り返ってみると35歳どうだった？同年代の人は何を考えているの？U-35委員会メンバーと一緒に考えてみましょう。



TALK SESSION

2026.3.21 Sat.
17:00-19:00 トークイベント
19:00-20:30 アフタートーク

nomadogi と パブリック ノマディックプレイスメイキングという考え方

#公共空間利活用 #まちづくり#タクティカルアーバンイズム #可動家具#資源循環 #木材活用
#可変性 #建築と社会#ランドスケープ #手触り感のある空間づくり#日本建築協会

イベント詳細については今後変更の可能性があります。U-35委員会 Instagramにて最新情報を発信いたしますので是非ご確認ください。